翼龍と書いてワイバーンと呼ぶ！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
翼龍と書いてワイバーンと呼ぶ！

【Ｎコード】
Ｎ８３０９Ｄ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
屠龍塚町に住む一人のどこにでもいそうでいない少年……そんな少年が成長するかもしれない物語。

藍の章　プロローグ／その一（前書き）

？「あれ？名前が入ってないぞ？」？？『それはそうだろうな、ここで私たちの名前を出してしまっては俗に言うネタバレという奴になってしまう』？「ああ、なるほどな……」

藍の章　プロローグ／その一

プロローグ

俺が目覚めたのは十六年前……いやいや、目覚めたんじゃなくて産声を上げたのが十六年前だ。

何不自由の無い暮らしを送っているがもうちょっと贅沢な暮らしをしていたいと思っていたりもするし、毎日家に帰ったらおやつがあってもいいのではないかと思っていたりする。

小学校にはじめて入ったときは見知らぬ連中の顔をぼーっと眺めているだけだったし、宿題なんかも多量に出て遊びに行くのが五時ぐらいからだった。

小学生のときになんやかんやがあって中学に入り、転校するような形で異国の地……といっても、別の県に入っただけなのだが当時の俺はそうはおもっていなかった……に行ってそこでもまた、見知らぬ顔をまじまじと眺めて三年を過ごした。

高校ぐらいはどうにかしたいとおもっていた俺なのだが、爺さんが外国に出立して俺の世話をしてくれる人は皆無となったのだが、もとより、一人暮らしも同然だったので一人になっても構わなかったのだが爺さんの知り合いの家族のもとで暮らすこととなった。

そこでの生活は楽しかったし、何よりそこの家族の人たちは俺のことを本当の息子みたいに扱ってくれたのが嬉しかった。まぁ、いまもそこに住んでいるのだが……

そして、高校二年生となった俺は本日始業式というものをあくびをしながら眺め、今日の晩御飯はなんだろうかとおもいながら帰路につくことにしたのだが……

その日、俺の世界が変わった……

一、

『そこの少年』
今日は始業式だったために午前中だけで学校から開放された俺。本当だったら部活などがあるのだが、色々と忙しい俺は部活に入らずに帰宅部として生活していた。
そして、今日……いきなり後ろから話しかけられたので後ろを振り返ってみたのだがそこには誰もいない。
「……気のせいか？」
『気のせいではないぞ』
声のようなものがした方向を見ると、そこにいたのは一匹の白猫だった。まさかなぁ、猫がしゃべるはず無いな。
「猫がしゃべるわけ無いよな」
『そうだとおもう。猫がしゃべるなど声帯の部分でまず不可能だ。もしかしたら突然変異の猫がしゃべるかもしれないが私はしゃべれない』
「……それはしゃべってないのか？」
どうにも、この猫が俺に話しかけてきているようだ。
『私の口を見てみろ、どこも動いてはいないだろう？』
「ああ……でも、腹話術って方法もある」
『少年は私を何だとおもっているのだ？』
猫だろ？いや、白い野良猫か？どっちでも構わないが……
「あ～わからん……連日の徹夜のせいで脳内が腐食してきているのか？」
『腐る脳みそがあるほど聡明そうな顔をしていないような気がするのは私だけか？』
「……お前、一体全体何もんだよ……見知らぬ俺に何のようだ？異世界を助けて欲しいとかそういう勇者ものは無しだぞ」
いい加減、猫と話していて疲れてきた。ここは住宅街だからいつ人が来てもおかしくない状況なのだから……他人から本当に疲れているとおもわれかねんからな。
『私は話の早い人間は好きだ』

「そりゃどうも」
猫にもててても何の自慢にもならん。その気持ちだけいただいておこう。
『実はな、おなかが空いて昏倒寸前なのだ』
「……そういやぁ、確かにやせてるな……」
猫は骨と皮しかないといっていいような状況で、立っているだけでもつらそうだった。
「う～ん……じゃあ、何か食べ物でもあげたほうがいいのか？」
『出来ればさば缶とかが好まれるのだが』
「……わかったよ」
近くのコンビニにその猫を抱えて連れて行き、駐車場で待つように指示、そしてさば缶を四つほど買って……俺の小遣いが昇天してしまった……猫に分け与える。
『恩にきろう』
「そりゃどうも……」
白猫がさば缶を食べているのをみていると、一人のおばさんが近寄ってきた。
「……あんた、その猫は野良猫かい？」
俺はそのおばさんことを知っていて、野良猫などにえさを与える人間を見ると叱り飛ばすというおばさんだった。野良猫にえさをやるといけないと宣言しているところを新聞で見たのがきっかけである。
「いいえ、迷子になっていた俺の猫です……ちなみに名前はタンポポです」
「そうかい、それならいいんだけどね」
そういっておばさんは俺を睨みつけてから去っていった。白猫はしたから俺を見上げてきており、呟いた。
『他人に嘘をつくのは良くないとおもうぞ』
「そうしねぇと俺の全財産をかけてまで助けてやったお前の命が消えちまうからな……さて、そんじゃまぁ……一緒に散歩でもし

ますかねぇ」
『私は散歩など……ああ、なるほどな』
影のほうからこちらを見ている先ほどのおばさんの存在に白猫も気がついたのだろう。猫は俺の隣に立って同じ歩調で歩き出すこととなった。
――――
おばさんの執拗な捜査は未だ続いており、結構な道のりを走破した。
「まだついてきてるぜ……」
『ううむ、なかなかしつこいな……ところで、少年……さば缶のお礼に面白いものをみせてやろうか？』
「面白い物？」
さて、面白いものとはなんだろうかとちょっと考えてみることにした。ううむ、猫が作った鼠の剥製か？それとも鼠体模型か？
『ちょっと私についてきてくれ』
猫は考え込んでいる俺をよそに段々だと河川敷に向かって歩き始める。
「あ、ちょっと待ってくれよ！！」
猫が走り出し、俺も走り始める。後ろのおばさんもどうやら走り出したようで、ちょっとしたかけっこが始まった。
河川敷をある程度まで降りると、そこは自転車用のサイクリングロードがあり、猫はそこを橋の下まで一直線に走っていった。
「おい、どこまで走るんだよ？」
『いずれわかる』
気がつけば猫は時折俺の後ろのほうを見ており、もうおばさんがきていないことを確認すると走るのをやめて歩きに変えた。
『どうやら巻いたようだな』
「そのようだ……で、面白い物ってここにあるのか？」
俺がそう尋ねると猫は黙って橋の下を眺める。俺もそれに習ってちょっと遠くにある橋の下を眺めるが、ここからではみることが出

来ない。
「橋の下にあるんだな？」
『正確に言うなら端の下の下にあるんだがね』
耳や尻尾が垂れているところを見ると疲れてきたのだろう。俺は白猫を抱えあげて橋の下へと向かっていくことにした。
『しかし、君は妙な少年だな。自分のお金を出して助けるほどそんなに白猫が珍しいのか？』
「いや、別に白猫は珍しくないぞ……それに俺は妙な少年ではない」
『ふむ、君がオス猫だったら喜んで夫婦になっていたんだがな』
どうやらこの猫はメス猫だったようだと気づいて……それがどうでも良いことにさらに気がついて俺は白猫と一緒に橋の下へと向かって着実に歩を進めることにしたのだった。そこに何があるのかは未だわからない。

藍の章　その三（前書き）

晶「うぉい！サブタイトルがその三になってるぜ！」ネコ「ま、色々とあるんだろう……」晶「そんなもんか？まだ自己紹介もしてないのに俺たちの名前出てるぜ……」ネコ「私にいたってはネコだぞ」晶「とりあえず、読んでくださいな」ネコ「ふ、逃げたな……」

藍の章　その三

三、

目が覚めると隣の布団で寝ているのはパジャマを着て眠っている少女の姿だ。

「す～……じゅるるる～……」

はじめのほうは可愛い寝顔だとおもっていたのだが脳がだんだんと覚醒していく段階でよだれをたらして眠っているだらしない顔が脳内に張り付かれていき……

「さて、起きるか……」

みていて得になるものではないとスパッと未練を断ち切って俺は起き上がった。

「う～ん……もう食べれませんよ……」

そんな寝言を部屋に残して……

――――

朝の日課であるランニングを終えて家に帰ってくると先ほどどうせ食べ物の夢でも見ていたであろう藍のエプロン姿を見ることができた。最近では既に日常の一ページとして俺の生活に組み込まれている。

「ああ、晶様おはようございます」

「ああ、おはよう……洋子さんは？」

洋子さんとは俺がお世話になっている家の奥さんのことだ。

「先ほどお勤めに行きました」

「そうか……う～ん、じゃ、俺もそろそろ飯食べないと学校に遅れるな……」

席に座ると藍が俺の目の前に湯気の出ているご飯などを置いてくれる。

「……ふぅん、藍の料理のセンスってかなりいいよな？」

「ありがとうございます」

俺がそういうと照れたような仕草で箸を口の中に突っ込んで箸は「ボキッ！」という断末魔の叫びを残して大小あわせて四本になってしまった。
「あ……またやっちゃいました」
「……」
まぁ、これで七膳目なのだが、そんなことはどうでもいい。
藍がこの家に来て七日目で毎日毎日箸の本数が少なくなっていることなどさらに輪をかけてどうでもいいことだ。料理の話に戻るが、この家に藍がやってきたとき藍は自ら炊事を買って出てくれたのだが見事に努力は謎の料理という暴力に変わって俺たちに降り注いできた。見事に俺たちは撃沈してしまい、やめてもらおうとしたのだが
「譲れないんです！お世話になるんだから何か恩返ししませんと……」と意外に頑固なところを見せて毎日俺たちは謎の創作料理の餌食となった。洋子さんと醜いトイレ争奪戦はこの家の恥部だろう。しかし、めきめきと実力をつけてきた藍は四日目にして人並みの和食を作れるようになって昨日の夜には洋食も殆どマスターしたようだ。俺は小さい頃からずっと料理をしてきたのでよくわからんが藍の実力は相当なものなのだろう。
「今日から私も晶様と一緒に登校できるようになります！」
嬉しそうにそう言っているが、それは色々と手続きやら何やらあってようやく昨日に編入手続きを終えたということなのだろう。
「ん～じゃ、そろそろ行くか？」
「はい！！じゃ着替えてきますね！」
気がつけば藍の食器に載っていた料理たちはすべて彼女の胃の中に納まってしまったらしい……俺の量の二倍はあったとおもったのだが俺はまだ自分の分を半分ほどしか胃の中に収めてはいなかった。
――――
「なぁ、晶……お前の家に居候が来たんだって？」
「俺自体も居候なんだがな……まぁ、新たな居候仲間が増えたの

は事実だ」
　どこから情報を仕入れたのか知らないが一人の男子生徒が俺に転校生の情報を聞いてきた。
「女だって？」
「ああ、そうだ」
「うひょう～……春が来たね？」
「誰に？」
「君に」
　やれやれ、こういった冗談が好きな連中がこの学校には多すぎて困る。一度集団粛清を行ったほうがいいだろうか？
「ま、冗談はともかく……このクラスではないってことは確かだろうね？」
「そうだろうな……となりのクラスって藍は言ってたからな」
「へぇ、藍ちゃんって言うんだ？」
「ああ、そうだ」
　別に秘密にしておきたいことなんて一つも……いや、あったな。
「ん？白瀬……顔色が悪いよ？」
「……もとからこんな面だったらよかったのになぁ……色白美人ってやつだろう？」
「青白美人の間違いじゃないのかい？ま、気分が悪いのなら保健室に、機嫌が悪いのならカルシウムを採ることをお勧めするよ。イライラが直るらしいからね」
　そんなプチ情報などどうでもいいと思っていると朝のホームルームを告げるチャイムが鳴り始めたのだった。
―――
　思ったとおり……というより、高校になったら高校生がこの学校にやってきましたとか先生が言うことは無いようだ。どうせ、俺らの担任はがちがちの現社のティーチャーだからしゃべることも無いだろうが……
「黒田、ちょっとトイレに行ってくる……」

「ふぅん……未だに顔色が悪いけどトイレに行って逝くことはないようにしなよ？トイレで倒れると逝っちゃうことが多いそうだよ」
黒田は首をすくめてそういい、俺はそれを無視してトイレへと向かおうとしたのだが……
「晶様！学校って面白いんですね！」
「遅かったか……」
きっと今の俺の表情は苦虫を十匹ほど噛み砕いて青汁で飲み干したような感じに仕上がっているのだろう。オプションとして汗を流しているに違いない。
「……聞いた、今の？」
「……うん、晶様って呼んでたよね？」
「もしかして、白瀬君ってそういうプレイの好きな人なのかな？」
「白瀬はああ見えてドスケベだからね……家じゃご主人様なんて呼ばせてるかもよ？」
周りの視線がいたい……最後の黒田、お前には後で『白瀬晶のお手軽地獄旅行』につれてってやるから楽しみにしてろよ？
黒田を地獄に落とす前にやるべきことはたくさんある。
「……藍、俺のことは学校で白瀬君とか輝君とか君付けで呼んでくれって言っただろ？」
「あ、そうでしたね？」
「……とりあえず、一時間目始まるからお前は教室に戻っておけよ」
「はい、わかりました！！じゃ、失礼しますね、晶様」
忘れてたのか、わざとなのか……どっちかわからんが……しっかしまぁ、とき既に遅しだ……
「ワイバーン……か」
「白瀬、何をつぶやいているんだい？」
「いや、いかれた野郎の独り言だ……気にしないでくれ」
「もとより気にしてないけどね」
俺、いまめっちゃ不機嫌……今の俺は“あしゃら”を超える自

信があるぜ？
　俺が言ったとおりに一時間目の予鈴が鳴り出し、教室の生徒たちはそれぞれがそれぞれ、次の時間の授業の準備をし始める。あるものはロッカーに、またあるものは席について日々の日常を続ける作業となる。
「白瀬、ワイバーンって知ってるかい？」
「ワイバーン？龍っぽいけど龍じゃないとか言われてる奴だろ？」
「……ま、君の中でのそれらの定義がなんだっていいんだけどね……この街にもそんなワイバーンの話があるのさ。教えてあげようか？」
「いや、知ってるから遠慮するぜ？ほかに何か面白い話しを知ってるのなら教えて欲しいがな……おもに龍関係とかな……暇があったら調べて欲しいぐらいだ」
「そうかい？君が僕に頼みごとをするなんて珍しいね」
　別に頼みごとじゃなくてこれは地獄に行くための片道切符だとおもって欲しい。

藍の章　その四（前書き）

晶「おれさぁ、一つおもうことがあるんだけど？」ネコ『何だ、少年？』晶「俺たちまだ自己紹介もしてないぜ？」ネコ『ああ、それはちょっと色々と順序って奴があるんだよ』晶「ふ～ん……」ネコ『さて、読者の皆さん……評価感想、お願いします』晶「ちなみに今回の話は学校です」

藍の章　その四

四、

昼時はそれぞれが好きなように食べるのだが、俺の場合は一人で食べている。いや、友達とかがいないとかそういうのではなく、他人より食べるのが早いのでちょっと暇になるのだ。他人が食べている前で食べ終わった俺が暇そうに他人の弁当を覗き込んでいると

「あれ？白瀬君はまだ食べたりないのかな？」とか

「うわ、人ん家のおかずをチェックしてる……なんて野郎だ」とおもわれないようにするためには自ら孤独という険しい山道を時速三十キロで駆け抜けなくてはいけないのだが……

「……晶様、おいしいですか？」

「……ああ……おいしいぞ？」

俺の目の前にはニコニコしながら尋ねてくる藍の姿がある。

「それにしては顔色が優れませんが……やはり、まだ料理の腕が悪いのですか？」

「いいや、料理はおいしいんだがな……その、この空気がな？」

辺りからは男たちの口では絶対に言わないような嫉妬心がオーラとして彼らを包んでいる。

「空気？ああ、確かにお外で食べたほうがおいしいですもんね？今度一緒にピクニックにでも行きましょうか？鍾乳洞が見えるいい地底湖を知ってるんですよ」

はは、そこは非常に楽しそうだな……まぁ、いつになるかはわからんが期待しておくこととしよう……

「おい、白瀬……僕が必死になって君のために龍関係の話を調べてきてあげたのに君は居候さんと一緒に午後のひと時を楽しんでいるのかい？おいおい、そりゃないぜ～僕も混ぜてくれよ」

やってきたのは黒田……その手にはなにやら書類を握っている。

「ああ、あれは冗談だったんだけどな」

「そうかい？まぁ、調べちゃったものはしょうがないから君に渡すよ……藍さんだったかな？僕の名前は黒田だけど……」
「はい？」
「白瀬の親しい友人だから今後ともよろしく……」
「それはどうもご丁寧に……」
二人で話をしているようだったので俺は一人で書類を見ることにした。この短時間のうちにどうやらパソコンなどを使って調べてくれたのかプリントアウトされており、見やすく整理されている。
書類の二枚目には既に知っている伝説が載っており、その次のページには近くの山にある龍と思われる生物の話が載っていた。
「なぁ、黒田……」
「なんだい？僕は藍さんとの午後の甘いひと時を邪魔されたくないんだが？」
「邪魔したことには謝ろうとおもってるが……この伝説っていつぐらいのものかわかるか？」
俺が手にしている書類を覗き込んで
「ん～？」と呟いた後、頷いて口を開く。
「比較的新しい……ここ百年以内に作られたとおもわれる伝説だね……面白いもんだよ、百年前だって既に電気が発見されていたのにねぇ」
「なぁ、お前はこの伝説……本当だとおもうか？」
俺は現実主義者の黒田に対して馬鹿な質問だとはおもったのだが、調べてもらった手前、こういうことを聞いておきたかった。
以前、お化けはいるだろうかと軽い気持ちでたずねたのだが奴は「馬鹿だなぁ、白瀬は……いいかい、お化けなんていないのならぜひとも姿を現してもらいたいものだよ！呪い？呪いを掛ける前に僕の目の前に姿を現してくれって言いたいね」と言っていたのでこの件にもどうせ否定的な意見を述べてくるとおもったのだが……
「ああ、本当だとおもうね」
「その根拠は？」

気になったのでそのようにたずねると奴は遠いところを見るような瞳を俺と藍に見せていった。
「……世の中には知らないほうがいいってこともあるんだよ……じゃ、僕は用事があるからこれで失礼させてもらうよ」
そういって黒田の奴はきょとんとしている俺たちの目の前から姿を消してしまったのだった。なんだ、あいつ？
「黒田さんって変わった方なんですね？」
「俺からみれば藍も充分性格が変わっている気がするけどな……」
「そうですか？ああ、なるほど……歩き出すときは絶対に左足からしか踏み出せないところですか？これは性格じゃなくてくせですよ、晶様」
そうそう、そういう人とはちょっと違った空気を持っているところな？藍フィールドが転回されており他者の攻撃を寄せ付けないといったところか？
「おっと、変わった奴らに構ってたら飯食う時間が減ってたぜ……」
「晶様、複数形になってますよ？相手が一人だったら『変わった奴』が正解です」
人差し指を立ててそんなことを先生みたいに言ってはいるが、俺からみたらお前も入ってちょうどいいんだが？
とにもかくにも、昼休みはこんな感じで過ぎていった。
――――
気がつきゃ放課後で俺はどうするべきかと悩んでいた。何を悩むか……それは、藍のことではなく、今夜の晩御飯のおかずだった。藍が買い物にいくかもしれないのでそれでは金の浪費だ……ということで俺は藍のいる隣の教室へとやってきた。
「へぇ藍ちゃんってやっぱり白瀬君と同じ家にすんでるんだ？」
「ええ、そうですよ、一週間ぐらいですかね？」
いたにはいたが、なにやら女子と仲良くなっているらしい……

これ以上俺の家での態度を暴露されていては困るのですまなそうな感じで女子の輪に入っていく。
「あ～藍、ちょっと話がしたいんだがいいか？」
「はい？いいですよ？どなたとお話しがしたいんですか？」
そういった瞬間に俺の頭の中には
「きっと藍の頭の中を切ったらお花畑が出てくるんだろう」と確信してしまった。
「……ボケはいいからよ……藍、俺はお前と話したいの！わかった？」
「ええと……わかりました。皆さん、今日はこれで帰ることにしますね」
「うん、じゃあね二人とも」
ああ、この人たちどこかで見たことがあるような女子たちだなぁとおもうことがあるだろう。そんな俺にとってはど～でもいい人たちだったので俺は返事をしなかったのだが、藍にとってはど～でもいい友達ではなかったのだろう、彼女はしっかりと振り返って頭を下げた。
「はい、さようなら」
藍と共に校門を抜け、俺たちはスーパーに向かうことになった。
「……晶様」
「んあ？」
それまで黙って歩いていた俺たちだったのだが、唐突に藍が俺に話しかけてきて俺は虚をつかれた様な返事をしてしまった。
「……友達とはいいものですね？」
「……友達ねぇ……俺はよく知らんがいいものじゃないのか？」
俺がそんな回答をすると藍は不思議そうな顔をした。
「……晶様にはお友達がいないのですか？」
「……さぁな、転校とか色々してきたからそんなもんはいないっていったほうがいいんじゃないか？」
「ではあの黒田さんは？」

「ん～あいつは俺のことを友達だとおもっているだろうが……」
「晶様は友達ではないとおもっているのですね？」
「いいや、親友だな」
「親友？」
「ああ、親しい友人って奴だ。友達よりランクが上って所だな」
「では、私はどうですか？」
首をかしげて俺のほうを見てくるので俺は答えた。
「居候仲間だな」
「それはどのようなランクなのですか？」
その藍の質問に対して俺は首をすくめるしかなかったというのは当然だろう。

藍の章　その五（前書き）

晶「なぁ、ネコ」ネコ「何だ、少年？」晶「俺、おもったんだが……ワイバーンって何だ？」ネコ「猫の私が知るわけないだろう？」晶「本当か？」ネコ「本当だ」晶「ふ～ん」ネコ「その目は信じてないな……まぁ、皆さん、評価感想がありましたらネコに連絡下さい」晶「いやいや、どっちかというと俺は評価を待ってます！」

藍の章　その五

五、

「晶様！」

扉から顔だけ出して俺の名を呼ぶ藍。

「ん？どうした？」

「遂に出来ましたよ！」

「へぇ、何がだ？」

お菓子でも作るといっていたからそれが出来たのだろう……あの喜びようからすると結構出来が良かったのかもしれない。

「私と晶様の赤ちゃんです！！」

は……？

――――

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

目が覚めればいつもと同じ起床の時間……となりにはいつもと違わぬ藍の寝顔。

「すぅ～……すぅ～……」

そんな安らかな寝顔を見ていると夢の出来事を思い出す。

「……いかんいかんいかん！！俺は何を考えてるんだ！！」

立ち上がって未だに寝息をたてている藍をその場に残して俺は本日も恒例である朝のマラソンに向かうのだった。

「晶しゃま～……」

寝ている藍をその場に残して……

――――

今日は休暇であり、ごろごろと過ごしてもいいのだがそうもいかないようだった。

「晶様、ピクニックに行きましょう！」

「……ああ、そうだな」

マラソンから帰ってきて見れば既に藍は準備をしており、お弁当

も用意されていた。何より、藍の目に宿る情熱の炎は視線があったら最後……絶対に成功させて見せるという感じだった。
「どこに行くんだ？あてはあるのか？」
無計画にそんなことを言っても行く先は決まっているのだろうか？裏山は毎日マラソンで向かっているし、公園でピクニックなんてまるでままごとのようだ。
「あてならあります！」
いつぞや言ってた地底湖だろうか？俺、さみぃの苦手なんだよなぁ……
「どこだ？」
「うふふ……内緒です！行ってからのお楽しみということでお願いしますね？」
ニコニコとしているのだが、俺にとっては不安でいっぱいだ……
……どこに連れて行かれるのだろうか？こんな不安にかられたのは勉強し忘れて受けた期末試験以来だぜ……。
「さ、行きましょう、晶様！」
俺の手をとり藍は足取り軽く玄関を飛び出したのだった。

―――――

「るんるん♪」
「……」
俺の手を握ったまま彼女はとりあえず徒歩で裏山へと上っていく。
たった二人でピクニックに行って何が楽しいかは俺には理解できなかったが藍はどうやらとても楽しんでいるようだった。
「なぁ、藍？」
「何ですか、晶様？」
「二人でピクニックなんて楽しいか？」
「う～ん……少ないですかね？」
「もっと増やしたほうが良くないか？」
だから今日はいったん帰ろうな？といおうとしたところでぱぁっと顔を明るくさせた藍は俺に告げる。

「それなら今度来るときはもっと人数を増やすことにします！さすが晶様ですね！」
何がさすがなのか教えて欲しい。
「……晶様、本日向かう先についてちょっとだけヒントを出したいとおもいます！」
「ヒント？」
ヒントも何も、ここの道を通っていってしまえば必然的に裏山のてっぺんについてしまうのだ。
「じゃ、ヒント行きますね？ヒントはとても景色が綺麗なところですよ？」
「それ、ヒントか？」
とても景色が綺麗なところ？裏山のてっぺんから見えるものは……何もないな。生い茂る木のおかげで町並みなんてまったく見えない。
俺なりに必死に考えた結果……
「う～ん……葉っぱか？」
「ぶっぶ～違います！」
違ったか……それならこれに違いない。
「木の幹だろ？」
「それも違いまーす！」
「木の枝」
「はずれです！」
「毛虫？」
「見えたらいやです！私は毛虫は嫌いなんですよ～」
「じゃ、ふくろう？」
「いたらいいですね！私、まだ見たことないんですよ！」
「ミミズク？」
「あ！それもいいですねぇ！」
その後、俺は様々な回答を藍に伝えたのだがあたりは一つもなかった。

「う～ん……ちっともわからん！！」
「もうちょっとで山の頂上ですからそこで答えをお見せしますよ」
俺は藍に手を引かれながら裏山への登頂を目指して憂き、ため息をこぼした。藍はまったく息を切らしておらず、それどころかさっきよりも元気になっているようだった。
――――――
ようやく頂上が見えてきたのだが、この山は頂上なのに木がたくさん生えており、風が吹けば時折町の景色がちょろっとだけ見えるだけだった。
「ふぅ……登頂完了って奴だな……藍～何も見えないぞ？」
「そうですね、このままじゃちょっと見えないでしょうね！晶様、荷物をそこの木の下に置いてください」
藍に言われて俺は近くの木の下に荷物を置く。
「これでいいのか？てか、荷物置いたところで何も変わりはしないだろ？」
「いえいえ、私の負担がへるんですよ……じゃ、ちょっと目を閉じててくださいね？」
「？」
言われたとおりに目を閉じ、俺は何が起こるのかわからなかったが藍を信じることにした。急におかしな浮遊感に襲われ、俺は怖くなったのだが目を閉じている。
「もういいですよ！」
「うぉう！！」
目を開ければそこにあるのは見えることのないだろうとおもっていた町の景色。はじめてみる町の景色は綺麗で、時折吹く風が俺たちをなでていった。
「なるほどねぇ……」
後ろから藍に抱きしめられるような感じで俺たちは空にいた。
「はじめっからこうしてくれれば楽だったのにな？」
「いやいや、こんな反則行為をしたら楽しくありませんよ！ピクニ

ックは歩いていくものだって友達に教えてもらいましたからね」

――――

家に帰ってきて真っ先に藍は俺に尋ねてきた。

「ピクニックはどうでしたか？」

「ああ、最高だったぜ」

久しぶりに体を伸ばせた感じがして藍に感謝をしたい。

「そうですか！それならまた来週も行きましょうね？」

いや、さすがにそれはちょっと……勘弁してもらいたい。

藍の章　その六（前書き）

晶「いやぁ、最近は主語が入った小説名が多いな、ネコ？」ネコ「少年、口は慎め……そんなこと言ってたら誰かに叩かれるぞ？」晶「いやいや、俺は別に悪いことなんて言ってねぇから大丈夫だって」ネコ「そうか？というより、この前書きは注意を書くものなんだぞ？」晶「ああ、そうだったな……ということで、注意かどうかはわかりませんがはじめてこの小説を読んでくださった方、主に感想を期待してますのでよろしくお願いします！」

藍の章　その六

六、

「晶様、今日はハンバーグを作りましたよ♪」

「へぇ、おいしそうなもんだなぁ……藍は料理が作るのがうまいもんだなぁ～」

湯気が立ってハンバーグの隣にはにんじんが添えられていたりする。

「いえいえ、晶様が食べてくださるから作れるんですよ……私も食べられちゃいましたからね」

――――

「俺はまだ手もつけてねぇぞ……はぁ……はぁ……」

いかん、そろそろ変な夢を見るのが習慣づけられてきている気がする……このままでは俺は色々とやばいことになりかねん……

じとっとした目で俺は隣の布団で寝ている藍のほうを見る。

「う～ん……どうにも夢の中で登場する藍は美化されている気がする……」

「ぐ～……ぐ～」

疲れているのかいびきをかきながら眠りこけている居候仲間の藍を見やる。うるさいいびきを止めるために俺は藍の鼻をつまんでやることにした。

「ぐ……すぅ～……すぅ～」

いびきは止まり、静かな寝息に変わったので俺は立ち上がっていつものように朝のマラソンへと向かった。

――――

「いかん、眠い」

学校について眠気が襲ってきた。これまでいつものようにマラソンなどをしていたのだが、一度も学校で眠気に襲われたことはなかったのだが……

「どうしたんだい？とても眠そうじゃないか？」
非常に面白いおもちゃを見つけた！といわんばかりの顔が俺の近くにやってきた。
「何だ、黒田？今、俺は非常に機嫌が悪いぞ？」
「それは結構……いや、ねぇ、何でそんなに眠いのか教えてもらいたいね」
ニヤニヤしていやがる……こいつ、何考えているんだ？
「……最近悪夢を見るんだ」
「へぇ、悪夢？僕はてっきり藍ちゃんと夜の共同作業でもやっているのかとおもったよ」
「ぶぁ～か！俺と藍の間にはなにもねぇよ」
「そうかい？それなら健全的で良かったよ」
ちなみに布団は引っ付いているからな……となりの布団に入ろうと考えればはいることなどたやすいことである。
「学校で寝るのはさすがに罪悪感があるからな……ねみぃ……」
「おやおや、そんなに眠いのなら寝てしまえばいいのに」
ここで寝て悪夢を見てみろ……毎朝叫んで起きてるんだ。学校でそんなことしたら保健室どころか病院にいかなきゃならん。
「じゃ、一つ眠気を覚ますいいことを教えてあげようか？」
「いいことだと？何だ、それ？」
俺が立ち上がったことをいいことに、奴はさらににやけ顔をプラスしていく。
「この前の伝説の場所が詳しくわかったんだよ」
「この前の伝説だぁ？いつの話ししてんだ、お前？」
書類を渡されたのはもう一週間ぐらい前だ。その書類には確かに地名までは書かれていたのだが地図にはここらへんとかそういう適当なことしかかかれていなかった。
「そんなに食って掛かるようじゃ駄目だよ～？ほら、これがそうなんだ」

自信満々に俺の目の前に見せたものは……

「なんでぇ、隣町の龍塚じゃねぇか……」

龍塚とはその昔に龍を生めた場所とされたところで、石がぽつんとおいてあるだけだ。それ以外にあるものはないし、観光名所にもなっていない。近々そこには大きな会社が建てられるそうで撤去されるそうだ。それに対して誰も反対しないのはこの龍塚に関わるといいことがないという噂があるからである。

「つぶれる前にその伝説……ま、伝説かどうかは知らないけど行ってみたら？面白い発見があるかもしれないよ？」

「わぁったよ……明後日ぐれぇにはいくからよ」

俺がぶっきらぼうにそう答えると黒田は何が面白いのか突然笑い出した。

「何だ？何か知ってんのか？」

その笑いに対してちょっと不振におもった俺は奴に尋ねる。

「はは……君は何も知らないんだねぇ？」

「何を知らないんだ、俺は？」

「その龍塚、今日までしか見れないよ？明日には撤去されちゃうからねぇ～」

「……わぁったよ。今日見に行けばそれでいいんだろ？」

そのように答えると奴はにやりと笑って最後にいった。

「うんうん、そうしないとせっかく調べた意味がなくなるもんねぇ……ま、がんばってくれよ？」

何をがんばるのか、そのときの俺には理解できなかった。

――――

午後の授業は男女入り乱れてのサッカーだった。俺たちのクラスと藍たちのクラスとのガチンコ勝負で、女子サッカー部というものが我が高校にあるだけに結構強い。

「白瀬、はっきり言おう……」

俺は今回ゴールキーパーをしている。何故かって？別にキーパーが得意というわけではないのだがくじで決まったことだ。

「何だ？てか、お前は何で皆のようにボールに突進していかないんだ？」
「僕が行っても負傷者が一人増えるだけだからね……はっきり言わせてもらうけど、僕はちょっとトイレに行きたいんだ」
「行け」
それじゃあ失礼するよ？と言ってディフェンスの黒田が途中退場。
「白瀬！行ったぞ！！」
そんな声がしたので真面目に正面を見るとなんと！あの藍がボールを持って突進してくるではないか！俺たちのチームは全員が攻撃にまわっているためにディフェンスなど一人もいない！というより、連中……追いつくのが無理と考えているのか誰一人としてこちらには来てくれていない！！
「おい、お前ら！さっさと守りに来いよ！」
「いや、無理！」
めっちゃはやいねん！とかあっちで避けんでいる間に俺の目の前に藍が迫っていた。
「いっきますよぉ！！晶様！！勝負です！！」
右足を後ろに思い切り曲げ……その瞬間に右足になにやら変なエフェクト効果なのか水の塊がついている気がする……それを一気にボールにぶち当てる。
「なんじゃそりゃ！？」
急激な勢いを増し、ボールは俺を殺そうとしているのかまっすぐ俺につっこんでくる！勢い以前にボールはそのボールの五倍ほどの水を纏っており、当たったらマジで死にそうである。
「緊急回避！！！」
俺は横に跳ねて脱出……ボールはそのままゴールし、高水圧を撒き散らした。その結果なのか地面がえぐれている。
「……やったぁ！やりましたよ皆さん！！」
「すごいよ！」
藍たちのクラスメートたちは胴上げをしており、俺たちのクラス

メートは俺を非難する。
「なんて野郎だ！」
「よけんなよ！！」
「あれを受け止めろとお前らは俺に言うのか？」
「「そうだ！」」
「じゃ、てめぇらがキーパーやれよ！」
「うるせぇ！くじでキーパー引いたお前が何とかしろよ！！」
険悪なムードの中、試合は再開。
その試合も終わってみれば十三対零という悲惨な結果に終わった。
「いやぁ楽しいんですねスポーツは♪」
「……ついてねぇな」
放課後、俺と藍はそんな会話をしながら家に帰ったのだった。

雷電の章　その一（前書き）

晶「お、気がついたら章が変わってる……」ネコ「そのようだな」晶「てかさぁ、今おもったんだけどネコ、お前はもう普通にしゃべってるな？」ネコ「いまさら気がついたか？」晶「なんで普通にしゃべってるんだ？」ネコ「ちょっと九官鳥と声帯体部分を交換してきた」晶「……マジか？」ネコ「マジだ」

雷電の章　その一

七、

「藍、ちょっと行ってくる」

「どこに行くんですか？」

「隣町でちょっと友達と約束してるんだ。すぐに帰ってくるからおばさんが帰ってきたらそう伝えておいてくれないか？」

「わかりました。気をつけていってらっしゃい」

「ああ、藍のほうも戸締りしておけよ」

俺はそういって夕闇に飲まれつつある住宅街を後にしたのだった。

隣町までは自転車でどのくらいだろうか……そうだな、三十分もあればきっかり目的の場所までつくことが出来る。

「ぜぇ……ぜぇ……」

もっとも、それは全速力でこぎまくって……だが。

「龍塚……龍塚……」

目的の場所はちょっとした空き地のような場所で見つけやすかった。何より、白い看板で

「建設予定現場」と書かれているのだ。後は懐中電灯を地面に当てて探すだけでいいのだから、ちょうど良い目印になる。

ここに来た時点で既に真っ暗でちょっと林に入り込んだところに龍塚はある。龍塚と呼ばれる所以は一メートルほどの大きさの石の中央に

「龍塚」と彫られているからだ。この文字を彫った人物をこの土地に昔から住んでいる人は知っているらしいのだがあいにく、俺の知り合いにそのような人はいないので何故、これがここにあるのかよくわからない。龍塚なのだからこの下に龍でも封印されたという伝説があるのかとおもったのだが、残念ながらこの下には龍はいないらしい。これは情報通の黒田が言ったことだから間違いないだろう。今手元にある奴から渡された書類にも書かれているし……だが、そ

のとき奴はにやけていたからもしかしたら何か裏があるかもしれないが……

「……帰るか……」

ここにきたって結局は何もなかったな。所詮、俺の世界は俺の世界だったというわけだ。一つが変わったところですべてが変わるわけではないということが今回の件でよくわかった。

ぽつっ……

「ん？」

俺の視線が上にいく……と、二階から目薬が落ちてきたのかとおもったのだがその目薬は天からたくさん落ちてきた。

「夕立！？嘘だろ！？」

降り始めた雨はお調子者が調子にのったようにどんどん降ってくる。濡れないように場所を探すが、近くにあるものは一メートル弱ある小さな屋根のようなものだけだった。

「ふぅ……」

それでもないよりましだったのでしゃがむ感じでその下に移動する。

ごろごろ……

「ちぇ、雷まで鳴り出しやがった……携帯、つながるかな？」

家に電話するために携帯を取り出してボタンを押そうとして……

……書類に携帯の光が当たってとある一説が照らされていた。

「ん……翼龍塚？」

書類にはこの町にもう一つ伝わる伝説かどうかわからない眉唾話が載っていた。簡潔に説明するとそれはこの地で悪さをした翼龍を起こすための手段だと書かれている。

「……」

もしかしてなのだが、あれは龍塚などではなくこの翼竜塚なのではないか？長い年月の所為なのか知らないが

「翼」という言葉が消えていると仮定しよう……そんで、この屋根のようなところ……つまり、俺が座っているこの場所におけばいいんじゃないのか？

仮説は所詮仮説だったので実際に試してみることにした。それなら龍塚にあまりいい噂がないというのも頷ける。この石が翼龍を起こす石ならばいわくつきというのもありえるかもしれない。

「よし……」

人力でその石をもてるかどうかはわからんが試しにやってみることにした。雨が降る中ご苦労なことだとおもう人が多々だろうがそういう性分なのでしょうがない。

「う、おおおおぉぉぉぉ！！！」

人は声を出すことによって力を多く出せるらしい……らしいというのは本当かどうかわからないからだ。

声のおかげなのかは知らないが、俺の力でも何とか龍塚は持ち上がった。

「ぐぬぬ……」

ふらふらしながらもそれを雨の中ここから一メートルほど遠い場所の屋根の下におこうとして……

「しまった！！」

長年、雨ざらしされてきていたのでコケが生えており、なおかつ今の天候は雨だったので滑りやすかったのだろう。俺はその石を目的の場所に落とすという形で置いてしまった。

どぉん！

「……？」

地面が揺れた気がしてちょっとふらっとしたが踏ん張って何とかなった。

どぉぉぉぉん！！

「うおっ！！」

今度は先ほどよりも数倍強い揺れが俺を襲う。危険を感じた俺はその場から離れて広場へと移動する。

移動しながら後ろを見ると……今の俺の顔は間違いなく引きつっているだろう。

「……まったく、試すもんじゃないな」

そう呟いてみるが足の震えが止まらない。

どぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！！

ゆれはやまずにそのまま響くが、どうやらこの広場以外はゆれていないのかここから見る景色の中に転倒したものなど一つもないようだった。そう断言する理由は木に立てかけて不安定になっている俺の自転車が倒れていないからである。

「人生二回目の経験……」

どぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！！！

一回だけしか俺の世界は壊れないだろうとおもっていた……だが、心の中では壊れていて欲しいとおもったのかもしれない。だから、俺は信じられない伝説などに耳を傾け、実際に試そうとした。

試そうとした結果が正解ならば俺は自らが望んだ……それがたとえどんな終わり方をしてもだ……自分の世界を壊すということについては成功している途中ということである。それが間違いだったら……俺はちょっと精神に異常をきたしてきているのだろう。

「さぁて、爺さん、俺はあんたがいつか言っていたことを試すときがやってきたようだぜ……」

震える足を思い切り叩き、それがちょっとやりすぎてしまったとおもいながら俺は雨の降る中傘もささずに揺れる木々、大地を晴眼で見据える。
「っと……まだ猶予があるみたいだから今のうちにしとくか……」
忘れていた家への連絡を今しておこう。
「ああ、藍か？ちょっと面白い奴にあっちまってな……帰りが遅くなるかもしれない……救急箱の準備でもしといてくれ」
俺は相手の返事も待たずに電源自体を切って俺の目の前に迫ってくる相手を見据える。
その相手は……

雷電の章　その三（前書き）

晶「お、またその二が飛ばされてるな……」ネコ「そんなことより、今日は一言言わせてもらいたい。のども変わったことだしな」晶「なんだ？言ってみろよ」ネコ「うむ……感想を私にくれぇ～……すっきりした」晶「……」

雷電の章　その三

九、

「あ～きらっ！！」

読書をしているところへ耒がやってくる。その表情がなにやら含むところがあるようで恐い。

「……ん？なんだ、耒」

幼い外見をしている相手に対して恐怖を抱くのは俺の中ではかっこ悪いということなのであえて、何気ない感じで相手に尋ねる。

「ちょっとお願いしたいことがあるんだけど～」

「……なんだ？」

ははぁ、やっぱり何か一物を抱えてるな？

「怒んない？」

「怒らない」

「嫌がらない？」

「嫌がらないから言ってみろよ」

「ん～一緒にお風呂にはいって？」

――――

「だ、誰がはいるかぁぁぁぁあ……はぁ……はぁ……最近こんなんばっかりだな」

顔が上気しているのがわかるし、まともに物事を考えることも出来ない。

元凶である耒のほうを見ると……

「えへへ……ソフトクリームだぁ……」

よだれをたらしながら俺の左側に寝ている同居人……ニコニコしてやがるし、まだこいつの場合は続きがあるだろうなぁ……この一週間、奴は一言多い寝言をかましてくれている。

「晶のおごりだからおいしく感じちゃう♪」

「黒いな……」

こいつ、成長したらどうなるんだろうか？
「……晶様ぁ、朝ですよぉ～……むにゃむにゃ」
耒の向こう側では寝ぼけた藍が正しいことを言ってくれている。
「……しょうがねぇ、マラソンいくか……」
寝不足が続く最近……マラソンに行くのがおっくうになってきたのだが継続は力なのだと俺の先生は叫んでいる。つまり、力というものは継続しなければ手にはいらないのだろう。
――――
「あ～しんどいなぁ……」
「お帰りなさい、晶様」
「お帰り～晶」
疲労感をお土産にして帰ってきた俺の目の前に朝食が置かれる。
「……バナナ？」
朝食がバナナ……だけとは……これは一体、どうしたものだろうか？
視線を藍に向けると何故か耒が俺から顔をそらした。
「……実は、耒ちゃんが晶様の分まで食べてしまったんです」
「……」
「あ、あはは……おいしかったからつい……」
耒は笑ってごまかそうとしているのだろう、下を向いて決して俺と目を合わせないようにしている。
俺はいらいら感がたまっている状態だったのであったまにきた。俺の中の悪魔もそう叫んでいる。
『朝食の仕返しとして耒を食べちゃいなよ♪』
なんてことを言うんだ、俺の悪魔は！悪魔はやっぱり悪魔か？
この暴挙に対して俺の善良なる天使が救世主として現れる。
『いけません……もうちょっと大きくなって食べたほうがよろしいとおもいます』
『ああ、なるほど……』
天使、てめぇも相当黒いやろうだ……悪魔、お前は何敵の言う

ことに納得してんだよ。
『じゃ、とりあえず今回は野球拳の刑で我慢するってのは？』
『いえいえ、そのようなみだらな刑はいけません。耒さんは悪気があって朝食を食べてしまったわけではないのですよ？耒さんは許してあげましょう』
お、いいぞ天使……まともなことを言うじゃないか。
『いっそのこと藍さんに相手になってもらいましょう♪』
てめぇはもう一度下級天使から勉強しなおしたほうがいいな。
「ふぅ……とりあえず、耒……お前はばつとして今日の放課後俺と一緒に夕飯の買い物に付き合うこと！いいか、絶対にお菓子とか買ってやらないからな？」
「ぶ～」
お菓子という言葉に反応して奴はほっぺを膨らます。
「ったく、俺の朝食取りやがって……こうなったら常備している俺専用のプリンでも食べるか……」
「あ……」
冷蔵庫を開けた瞬間にどちらかの声が聞こえてきた。そんなものお構いなしに俺はプリンに手を伸ばそうとして……
「……ない」
神々しくて優しく俺を癒してくれる女神がいなかった。俺は髪の逆鱗にでも触れてしまったのだろうか？
金色に輝く姿はどこにもいなかった。変わりにおかれていたのは「食べちゃった！てへっ♪」と書かれた紙だった。
「……耒ぃ……お前か！お前が俺の女神を……くぅ～……どうしてくれようか！」
「わ、わざとじゃないって！！！く、苦しい……」
耒の胸倉掴んで締め上げる。
「この紙はどう見ても悪意あるお前の仕業だろうがぁぁ！！」
「あ、あたしじゃなくってもう一人のあたしが……」
「言い訳無用！！！お前、一週間おやつ抜きだ！！」

耒を下ろして俺はため息をつくが……
「こんなこともあろうかと実は戸棚に羊羹を隠してたんだぜ……耒、良かったな、羊羹がお前を救ってくれたんだぞ？」
そういって俺は戸棚に手をかける。
「羊羹……？あ……」
誰かの声が聞こえたがこれまた無視して金塊へ続く堅固なる砦の門を開ける。
「……ない、だと？」
目の前にはほんの少し透けて見えるぐらいのこしあんの宝玉が存在しなかった。渋茶が相棒という俺のマイフレンドが家出してしまったのか行方をくらましていた。
「Ｙｏｕｋａｎ！Ｙｏｕｋａｎ！Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！！」
そこにおいてあるのは
「すみません、小腹が空いたので食べてしまいました」と達筆で書かれている紙だけだった。
「……ほぉ、君たちはボクに紙だけ残してすべてを奪い去って……ボクに……ヤギになれとでもイウノデスカ？」
俺の怒り、最頂点……さぁて、たとえいい子の藍でもちょっと覚悟してもらわないといけないなぁ……
「あ、あはは……」
「え、えぁはははは……」
二人とも俺から離れようとしており、俺はそれを逃がさないように考えていたのだが……
「ちっ、そろそろいかねぇと学校に遅刻か……」
「ふぅ……」
「よ、よかったぁ……」
俺がそういうと二人は安堵したようにそれぞれがため息をついたのだった。
皆勤賞を狙っているので朝食抜きでも我慢しなくてはいけないよ

うだ。
「……食べ物の恨みは恐ろしいぞ」
俺はそんな捨て台詞を二人に残して鞄を引っ付かんで制服に着替えて歯磨きも何もしないで学校へと向かうことにしたのだった。
そして、俺は自分の弁当も学校に持っていってなかったことに後ほど気がついた。

雷電の章　その四（前書き）

晶「はぁ……」ネコ「何だか元気がないな？どうしたんだ？」晶「……最近悪夢を見てな……」ネコ「いやいや、良くあることだろ？てか、この物語ってどういう方向性に向かってつっぱしってるのだ、少年？私はもう出ていないぞ」晶「……わかるわけないだろ」ネコ「それもそうだな、読んでいればいずれわかるな」

雷電の章　その四

十、

隣の席に座っている人物が俺のほうをちらちらと見てくる。

「え、え～と晶……」

「……俺に何か用でもあるのか、色野さん？」

隣の席の女子生徒は色野耒……その耒が授業中なのにいちいち話しかけてくる。

「その～……」

「今は授業中だろ？授業に集中しろよ」

「う……け、けど……」

先生に視線を向け、俺はそれ以上の話を聞かないということを暗に示すことにした。勿論、授業中だからである。

――――

授業も終わり、俺はトイレに行くことにした。

「晶……」

「ごめん、色野さん……俺、トイレに行ってくるわ……授業一分前にしか戻ってこねぇから」

そういって俺はトイレへと旅立つことにした。

「お、白瀬……君もトイレかい？」

「ああ、お前もか？」

教室を出る途中で黒田に出会った……と、その隣には藍の姿も見える。

「いやいや、僕はトイレに行かなくて結構だ。さっき行ってきたからね……ところで、こちらの彼女が君と一緒にトイレに行きたいといってるんだが？」

とても落ち込んでいるような姿の藍を見たのだが、俺は当然のことを口にする。

「あいにく、俺は女子トイレに行くつもりはないんでね……俺の

隣の……」
そういって耒のほうを見る。
「……色野さんをつれてってあげるといい。じゃ、俺は失礼するよ」
トイレに行くため、俺は二人の隣を静かに通り過ぎたのだった。
――――
「……まさか、羊羹を食べただけでこうなるとはおもってもみませんでした……」
「だろうねぇ、あそこまで怒っている姿を見るのは久しぶりってところだね～」
晶がいない教室で藍、耒、黒田の三人組が彼について話し合っている。
「……た、食べ物のことであんなに怒らなくてもいいのに……なんであんなにあたしたちに怒ってるの？黒田、教えてよ！」
自称、晶の親友である黒田に詰め寄る耒。
「あ～それはねぇ～……彼、強情なところがあるからね。怒ってるって言うよりも君らに何かを期待してるんじゃないかな？」
「期待……ですか？」
藍が不思議そうにそう聞き返す。
「そう、期待。何か君らにして欲しいことがあるんだと僕は思うね。ま、何があったかは聞いてないからよくわからないからね」
そういって黒田は席を立つ……と、すぐに晶が教室へと戻ってきたのだった。
――――
俺が教室に戻ってくると黒田がニヤニヤしながらこちらを見てきている。
「約九分ほど廊下で見つからないように張り込みなんてご苦労様」
「ふん、うるさいな」
どうやら教室にいた藍たちの姿を見ていたことがばれていたようだ。これでも結構努力して隠れていたつもりなのだが……

「しっかし、口が軽いのは相変わらずのようだな」
「口が軽い？残念ながら僕の口は平均的な重さをしているとおもうね……彼女たちじゃ気づくのは僕は無理だとおもうね。君がきちんとどうして欲しいのか伝えたほうが話は早くまとまるとおもうけどねぇ～……彼女たちにしゃべったのは悪いとおもってるよ」
まったく、どこまでこいつはお見通しなんだ？ちょっと試してみよう。
「……なぁ、その代わりといっちゃぁ何だが一つだけ教えてくれないか？」
「何かな？答えられる範囲で答えてあげるよ」
「……藍のスリーサイズは？」
「ああ、彼女のバストは……」
「やっぱ、いい」
躊躇なく答えようとしたということはこいつ……どこでそんな情報を得たんだ？というより、何もみないで答えようとしたということはすべて頭に記憶しているというのか……なんつ～奴だ……。
「これで満足かな？」
「ああ、満足だ……」
黒田は自分の席に戻っていき、チャイムが鳴るとあわてて藍も自分の教室へと戻っていったのだった。
――――
「いまさらなんだけどさ……数学の教科書忘れてきちゃった……
……晶、見せてくれない？」
「はい、色野さん」
無造作に教科書を開いて渡す。残りの授業時間は五分ほどだ。本当に今更であり……まじめに授業を受けていないのは耒の授業ノートを見ればわかりきったことだった。耒のノートには落書きがほどこされている。
「……まだ怒ってるの？」

その一言にカチンと来た。現在進行形で授業じゃなかったら間違いなく怒鳴っていたかもしれない。
心を静めるために授業に集中することにした。現在の授業は新人の女性教師であたふたといった調子で授業をしており……黒板に書かれている数式にはいくつかおかしいところが存在している。
「……え、え～と、ここがこうなります……」
「先生！」
俺はとりあえず手をあげることにした……めったに授業では誰も手をあげていないので寝ていた連中も何事かと俺のほうを見る。
「え？白瀬君……だったかな？何？」
「そこの計算式、黒板の答えは７ｘになってますけど４ｘｙだとおもいます。それに、第一にｘを定義し忘れてますよ……よって、この問題はどんなにうまく解こうと定義し忘れている時点で入試などでは零点だとおもいます」
「あ、あ～……本当ですね……」
ぎょっとして先生はあわてて黒板の内容を書き換え始めた。
「もうちょっとまじめにやってもらわないと困りますっ！」
俺は自分の机を思い切り叩いて……先生は驚いた表情をし、クラス中の連中も俺を驚いた表情で見ていた。
「……」
しらけた空気が流れ始め、俺を助けてくれたのは授業を終えるチャイムだった。
「先生、終わりましたよ」
「え、あ、あ～……そ、そうね……それじゃあ、今日はここまでだから……」
先生はそのまま黙って廊下に消え、俺のまわりにはどうやら近寄りがたい空気でもあるのか誰もよっては来ない……ただ、一人を除いては……
「晶！あんな言い方しなくてもいいんじゃないの？」
「あ？」

隣の席の耒は俺を睨みつけてくる。
「何だ？俺が何か間違ったことをしたのか？」
「そうじゃないけど……先生だって必死にやってるんだから！謝ってきなさいよ！」
「謝るねぇ……謝るのはそっちが先だろうに！黙ったまんまだもんな、お前ら！」
「あ……」
俺は耒に対してそう告げると教室を出ることにした。
「あ、晶様……」
「色野さんに用事があるんだろ、藍？」
そういって教室の外に立っていた藍の横を素通りし、さらにその先にいた黒田の隣も素通り……俺はこのまま家に帰ってしまいたかった。

雷電の章　その五（前書き）

晶「一つ、知りたいことがあるんだが・・・・」ネコ「なんだ、少年」晶「この小説ちゃんと読まれてるのか？」ネコ「・・・・・さぁ？」

雷電の章　その五

十一、

職員室に先生を探しに行ったのだが先生の姿は確認できず、他の先生に聞くとその数学の先生は屋上に行ったといっていた。

屋上に向かうと先生がフェンスに手をかけて夕焼けに染まり始めている校庭を眺めている姿を確認……俺は先生に近づいていって頭を下げた。

「先生、ちょっと言い過ぎました」

「……白瀬君……いいの、私が間違えちゃったのが悪かったんだから……」

数学の先生はどうやら泣いていたようで涙の筋が残っている顔で俺に向かって微笑んでいた。

先生の隣に俺も立って夕焼けを見やる……と、先生が俺のほうを見ながら聞いてくる。

「普段はとてもおとなしいって聞いてたんだけど……表情も恐かったからどうかしたの？」

「……ちょっと先生に八つ当たりをしてしまって……」

「……八つ当たり？」

他人に話すにはばかげているといった話なのだが、俺は先生にこれまでの経緯について詳しく話すことにした。

「……なるほど、白瀬君はその二人に謝って欲しいのね？」

「そうなんですよ……どうやら謝るっていうのを期待している俺のほうが馬鹿げているとしか今は考えられませんけどね」

あの二人に謝って欲しいとおもってるのは事実なのだが、何故、「ごめん」という言葉が口から出てこないのだろうか？

「じゃ、私がその二人に言ってきてあげるわ？」

「いえ、いいですよ……相談できる相手が今だけいるだけでもいいですから……」

そういって俺は首をすくめる。
「相談できる相手が……普段はいないの？」
「いえいえ、相談しようにも何故かけんか内容を知っているという友人ぐらいしか頭に思いつきませんから……」
俺のクラスメートたちは適当な性格をしているためにちょっと信用性に欠ける。
「成る程～誰か絶対に信用できる相手が欲しいのね？」
何故か話はそっちのほうに進んでいき、先生は俺を見てくる。
「まぁ、本当に信用できる相手なんて自分だけかもしれませんね」
そういって首をすくめて俺は回答する。
「じゃあさ、私がその絶対に信用できる相手になってあげるわ」
「……いえ、いいですよ」
担任でもない新人の先生はちょっと信頼できそうにもない。見た目で判断するのもどうかとおもうが、はっきり言ってこの先生は頼りない。
「あ、今頼りないっておもったでしょう？」
「はは……そりゃまぁ……授業中でも当てられたのは二、三回ってところですからね」
「じゃ、一つ条件を出すからそれを絶対に護って？そしたら私は絶対にあなたのことを裏切らない」
すっと……先生の雰囲気が……いや、すべてが変わったといっていい。
「私を絶対に裏切らないで？」
「え？」
「そうしたら私もあなたを絶対に裏切らない……どう？これならのめる条件でしょ？」
「え、ええ……」
有無を言わさぬその態度に俺は困惑しながらも……頷くことしかできなかった。
「うん、これで約束成立ね……じゃ、そろそろ戻らないと最後の

授業があるから」
遅くなるわよとだけ言い残して先生は去っていった。
「……」
俺もそろそろ授業が始まる時間帯だとおもい、屋上を後にしたのだった。
――――
放課後、俺は帰宅につくことにした。
「……」
隣には気まずそうな顔をした耒がとぼとぼと歩いている。
もう夕闇に染まり始めている住宅街なのだが俺たちは今夜の晩御飯の材料を買いに行かなくてはいけないのでスーパーへと向かわなくてはいけない。
「……あのさ、晶……」
だんまり決め込むのもさすがに疲れてきたのか、耒は伏せた感じで俺に視線を向けてくる。
「何だ？」
「……朝のこと、ごめん」
「そうかい」
「……やっぱ、許してくれない？」
「……いや、許す」
既に朝のことはどうでも良くなっていた。それは何故か……あの先生のことだ。あの新人の先生を俺はどこかで……いや、見たことないな。藍と耒にどこか似ている気がするのだ。
「ありがと～許してくれるんだ？」
耒の声を久しぶりに聞くような……そんな嬉しそうな声が隣から聞こえてきたので俺はちょっと思い当たることを試して見ることにした。
「……耒、ちょっとこっち向いてくれ」
「え？何？」
俺は耒の両肩をつかんで目を合わせる。

「え、え？ちょ、ちょっと……何？」
「……動くなよ、それと絶対に目を閉じるなよ？」
耒の奥底にじっと見つめていれば見ることのできる紫電の光を……そうだ、これを俺は見たことがあるとおもったのだ……つまり、あの先生は……
「ちょ、ちょっと晶？」
「え、あ……すまん」
気がつけば目の前には耒の幼い顔が真っ赤に染まって迫っており……俺はちょっとあせってはなれた。
「……どうしたの？」
「ん？ああ……いや、ちょっと考え事をしててな……さ、早いところ夕飯の材料かって家に帰るぞ？朝も昼も殆ど何も食べてねぇからな」
ま、先生は先生だな……ということにして俺は耒の手をとってスーパーへと駆け出した。
「な、何？どうしたの？」
「腹が減ったって言ってんだよお前はおなかが減ってないのか？」
「減ってるけど……」
そうかい、それならなおさらいそいで帰って藍の手料理を食べねぇといけねぇなぁ……おなかが減ってると機嫌が悪くなっちまうからな。
「何一人で納得してるのよ？」
「ああ？ま、耒のおかげってのもあるな……ありがとよ！」
「え？」
さっきから耒は頭を可愛くかしげているだけだが……そうだろう、俺だって何故、こんなに気分がいいのか理解できない。
———
「晶、これ買って！」
「あ～？」
耒が持ってきたのはおもちゃがついているお菓子のようなものだ

った。
「……却下、後百円ほど値段を下げたものなら考えてやる」
「ん～わかった」
すごすごと去っていき、三分ほどで戻ってくる。
「じゃ、これ」
「さっきより値段が上がってるぞ？」
「え～いいじゃん！」
「……しょうがねぇな……金はやるから自分で買ってこいよ？」
俺が財布の端を緩めるのを見ると耒はにやっと笑い……俺はため息をついた。

藍の章　その二：シーワイバーン（前書き）

晶「気がつきゃ十回目だな」ネコ「ああ、そうだな……今回は少年と藍のはじめての出会いのときだな」晶「そ、十回目記念ってことでね～……ああ、二十回目も何か考えておこう……」ネコ「ま、比較的他の話と比べると今回は長いので、この話自体に対して何か感想なんかをいただけるとうれしいですな」

藍の章　その二：シーワイバーン

二：シーワイバーン

白猫と共に俺は橋の下にやってきたのだが……

「何もないじゃないか？」

そこにあるものといえば砂利や本、はたまたごみぐらいなものだった。

『いや、人間の視点から見てみると確かにここには何もないように見えるが……このように……』

猫は俺の手から飛び降りて橋に近寄ってコンクリートあたりを見ていた。

『猫の視点で物事を見ると違って見えるものなのだ』

そういって猫は一回鳴き、視線で俺を呼ぶ。

「……成る程ね」

そこにあるのは鍵穴とその鍵穴に入れたらきっとぴったりだろうとおもわれる鍵がそこにあったのだ。

「これをまわせばいいんだな？」

『ああ、その鍵を回せばおのずと扉が私たちの前に姿を現すだろう……』

猫はどこか遠くを見るような視線をしており、俺はその鍵穴に鍵を差し込んでひねる。

かぱっ

「……」

近くの草むらからそんな音が聞こえてきて……近寄ると壊れた水洗便所が別世界へとつながるであろう、扉を開けていた……そのままこの土地の地下に降りるための階段がそこにはあったのだ。

「……ここを降りていけと？」

『当然だ……この先には面白いものが待っているからな』
「……そこまでして面白い物をみなくてもいいんだが……」
そんな、ねぇ……便所に飛び込めって考えられないんだが？先にあるのはゴールデンに輝く不純物か？天国の前には地獄があるって奴なのか？
『とても汚らわしい想像をしているかとおもわれるがそのようなものではないぞ？大体、いいことの前には悪いことがあるのは世の常なのだろう？』
そんな無常な世の中はいやだなぁ……幸せだけの世の中って来ないものか？
「……わかったよ、いけばいいんだろ？」
『物分りが良くて結構』
猫が先に躊躇なく飛び降り、俺も飛び降りようとしてそこの見えない闇に不安を持ったのでトイレの中につけられいてた鉄の柱を使ってトイレの世界へと向かったのだった。
「うおっ！！」
途中、地上界から差し込まれていた全世界を照らしてくれているお天道様が翳ったどころか……その存在を確認できなくなってしまった。
「……扉が閉まったのか？いや、ふたが閉まったのか……」
どうでもいいことなのだが、とりあえず、これからは慎重に降りていかないと危ないようだ。周りがまったく見えない状況で、かれこれ五分ほど降りているというのに未だしっかりとした足場は見えてこない。見えてこないのは暗闇だからだろう？と誰もつっこんではくれないのが心細い。
「俺、閉所恐怖症なんだよなぁ……あと、暗いところも駄目なの」
『ならば、どうやって眠るんだ？』
「お、猫か……」
ようやく足場が近づいてきたようで、猫の存在を確認することが

出来た。足場にたどり着くと猫は俺に電気をつけるように言った。
『私がこれから言う歩数をきちんと護るようにすればここは明るくなる』
「へぇ、早く言ってくれよ」
『まず右に一歩出てくれ』
「わかった」

ぐにゃ……

「……何か踏んだ気がするんだが？」
『気のせいだ……次はそのまま前に七歩』

一、二、三、ぐにゃ……五、六、七……

「猫、さっき何かまた踏んだ気がするんだが？」
『妄言はやめてもらいたい……そこの壁の部分にスイッチがあるからそれを押すように……ああ、間違っても下を押すな』
「もう命令口調だな……」
言われたとおりにスイッチを入れるときちんと電気がついて俺はようやく目で猫を確認できるようになった……
「それと、変なのもいるな……」
『そう、これが君に見せたかった“者”だ』
目の前にいるのは鮮やかな藍色をしている……
「龍？」
『いいや、これは翼龍……さしずめ、シーワイバーンってところだ』
そのシーワイバーンが何で川の下にいるんだ？ここ、海じゃないぞ？どういった経緯があったんだ？鮭のように産卵でも……
「と、鎖でつながっているってことはどこかから移送でもされてきたのか？」

首、足、前足の代わりにある翼……に鎖がつけられており、俺より数倍でかいその体は動こうともしなかった。
「死んでるのか？」
『……生きてるさ……たまにここに遊びに来るからな……』
猫は物怖じせずに自分より数十倍はでかい怪物であろう翼龍の鼻の頭に乗った。
『起きるがいい……』
ネコパンチを打ちまくり、必死に起こそうとしている。
『……少年、こいつの足を思い切り踏んでくれ』
「いいのか？」
この物体が暴れ始めたら俺の命は殆どなさそうなんだが？
『構わない……どうせ動きが愚鈍な輩だからな』
いや、そりゃ猫のほうが動くのさすがにはやいだろうが……あまり隙間のないここで暴れられたら共にぺしゃんこだろうに……
「知らないからな！！」
俺は思い切り足を踏んづけてやった……

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

咆哮、そして猫はしりもちをついている俺の隣に華麗に着地した。
『少々強引だったようだが……起こすことが出来た、感謝しよう』
「……そりゃどうも」
翼龍はこちらの存在に気がついたのか大きなおめめを細めて猫を捉え、次に俺に視線を写して……首をかしげた。
『はじめてみる生物だから不思議に感じているのだろう……こいつは比較的おとなしい性格だから君が襲い掛からなければ食われることはないだろう』
「いや、誰が好き好んで翼龍に襲い掛かるんだ？」
いたとしてもドラゴンバスターか勇者だろ？ちなみに後者の場合は悪さをする相手に限って……だが。

ぐるる……

「お～なんか唸ってるぞ？大丈夫なのか？朝起きて『らっき～……朝食がデザート付で目の前に置かれてるぜ』とかおもってたらどうするの？」

『……大丈夫だ、こいつは私のことをえさだとは思っていない』

私は皮と骨しかないからなと猫は呟く。え？俺は？

『……それはそうと、少年……気味の名前を聞くのを忘れていたんだが？』

「ああ、そうだったな……俺の名前は白瀬晶（しらせあきら）だ」

『ふむ……こちらの少年の名前は晶だそうだ……』

ぐるる……くんくん……ふんっ！！

「うをっ！！」

鼻でくんくんされた後に物凄い鼻息が俺の顔面を襲った。

『トイレくさいって言ってるぞ』

「……トイレにすんでるくせしてそんなこと言うなって伝えておいてくれ……」

その場に俺は座って目の前にいる翼龍を再びみあげて……改めてこんな生物がこの世に存在していることをはじめて知った。

「まさか、龍が本当にいるとはなぁ……」

『厳密に言うと龍ではないが……バイオ兵器とかが考えられているこのご時勢に掛け合わせるといったことが合っても不思議ではあるまい……』

猫はいきなり俺の肩に登った。

ドン！！

「……へ？」
猫がいたところからなにやら煙が出ている。
『完璧に巻いたとおもっていたんだが……少々爪が甘かったみたいだ』
そういって自分の爪を壁でがりがりと削る。
「……どういう意味だ？」
「こういうことよ」
上のほうから誰かの声がして……猫を保健所に連行しようと考えていたおばさんが姿を現した。
「……！」
「その猫が翼龍と会っていたのは知ってたからね……つけさせてもらってたのよ」
地面に華麗に着地したおばさんの手には拳銃が握られている。
「……すげぇおばさんだ……」
「む……私はおばさんじゃないわよ……」
おばさんは自分の顔に手をかけ、顔を一気にはがした。
「だ、脱皮した……」
と、冗談はこのくらいにしてその下からは綺麗なお姉さんが姿を現し……俺のほうに拳銃を向ける。
「……一般市民には手を出したくなかったけどこれを知っちゃったからには少々痛い目……場合によってはひいおじいちゃんが待ってる地獄に言ってもらわなきゃいけなくなるわ」
「残念ながらうちのひい爺ちゃんはまだ生きてるぞ？」
「……こほん、さ、そこをどきなさい」
自分の間違えを……てか、さすがにうちのひい爺ちゃんがまだ生きてるとは思っていなかったのだろうな……認めずにおばさんもとい、お姉さんは俺に銃を突きつけたまま近寄ってくる。
「へぇ、何でどかないの？これ、言っとくけど本物よ？」
「……わかってるさ……足が震えて動けねぇだけだ」
「そう、それならよかったわ」

俺の隣を素通りして……俺は何もしなかった。
「ところで、白猫はどこに行ったのかしら？」
銃を突きつけられてそう聞かれるが……俺は答えなかった。
『時間稼ぎはお手の物だな、少年』
なぜなら、猫が既に電気を消すスイッチに手をかけていたのだから。
「そりゃどうも……」
猫はこの部屋の電気を消し、あっという間に暗闇が俺たちを襲った。
「くそっ！！」
猫がいた場所に向かってお姉さんは拳銃をぶっ放すが、猫は既にそこにはいなかった。
『少年、今から私が言うとおりに動いてくれ！』
声を出したら危なそうなので頷き、俺は猫の後ろについた。この猫は相当修羅場をくぐってきたようで……なんと、先ほどのお姉さんの衣服に蛍光塗料をつけていたらしかった。光って相手がどこにいるのかすぐにわかる。
『……重いだろうがこの物体を持ってあっちの扉をくぐるんだ』
「わかった」
なにやら重たいものを渡され……やわらかくて変なものだったが……それを担いで言われたとおりに扉に逃げ込む。
「そこね！」
拳銃を発砲したのだが扉にあたり……俺たちにあたることはなかった。もうちょっと左に俺がいれば見事に当たっていただろうが。
『この扉はどんなことをしても壊れないものでな、あんな豆鉄砲では通用しないものなのだ』
「……詳しいな、猫」
『まぁ、私としても伊達に猫をずっとやっているわけではないからな……』
猫の後に続いて俺はそのまま歩いていく。

『この台座に乗るといい……ここから上の川までつながっているから、健闘を祈る』
「……お前はどうするんだ？」
『残念ながらこのスイッチを押さない限り君たちはここから脱出できない……それに、私は水が駄目なのだ』
そりゃそうだ、猫だから……
「けど、どうやってここからお前は脱出するんだよ！」
『……この研究所を作った人物は伝説を実現させたかった……ただ自分の欲望のために様々な生物を掛け合わせて龍を作ろうとした……だが、その過程の途中でその人物は猫とひっついちゃった……この話を信じるのは人の勝手さ……だから、私は必ずこの話の続きをするために君の目の前に現れるということだけは約束しよう……そのときはその子の笑顔をもう一度見てみたいものだ』
「そこにいたのね！」
どうやってはいってきたかは知らんがお姉さんがここまでやってきたようだ。
『すまん……鍵をかけ忘れていたようだ……それでは、これで失礼するとしよう』
「お、おいっ！！」
猫はそのままスイッチを押し、俺は外に出ようとしたのだがカプセルケースに入れられたように動けなくなって水の流動のみを感じたのだった……
――――
「……はぁ、ったく……」
川原にへたり込んでいる俺の手の中には藍色のワンピースを着ている女の子の姿があった。服はべちゃべちゃに引っ付いて体のラインを綺麗にあらわしている。
「……やれやれ、このこをどうしろって言うんだよ……」
足かせに千切れた鎖……あの翼龍＝この娘って図式になっちまう。あの猫の話を信じるとすれば……だが。

「……よくわからんが……うちのあしゅらさんに土下座でもすれば居候仲間が増えるかも知れねぇな……」
うちのあしゅらさん＝洋子さんだが……
「ん……」
そろそろお目覚めのようで、見知らぬ男が……いや、さっきあったか？とりあえず、抱いてちゃ変な誤解をされかねんからな。
「……ああ、晶様ですか……ここはどこです？ネコさんは？」
「え？」
普通の態度に少々驚きながらも俺はこれからのことについて目の前の少女に伝えることにした……そして、俺は彼女の名前を聞くことにした。
「名前……ですか？ネコさんは私のことを藍って呼んでました」
藍……ね……見たまんまだな、猫。こうして、俺は藍と共に家に帰ることとなった。

雷電の章　その六（前書き）

晶「え～非常に心ぐるしいですが……」ネコ「なんだ、少年？」晶「この小説はもしかしたら次で終わるかもしれません」ネコ「それはまた、急だな。この前は第二十話までいくって言ってなかったか？」晶「……さぁ？そんな昔のこと忘れちゃった」ネコ「……」晶「まだ早いですが、これまでありがとうございました」ネコ「お世話になったのはタナチュウさんぐらいだろうがな」晶「こらこら、そんなこと言わない！きっと心の中では皆……この小説コメディーっぽくなくね？とかおもってるかもしれないけどそんなことは口が裂けてもいえません」ネコ「まったく、おしゃべりだな、少年は……」

雷電の章　その六

十二、

「ねぇ、晶～」

「……なんだ、耒？」

雑誌を読んでいる俺のところへ耒がすまなそうにやってきた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

「……なんだよ？」

ずばりと物言う耒にしては珍しくもじもじとしている。ああ、こういう顔もかわいいな……って馬鹿か、俺は？

「あたしをね……」

「あたしを？」

「抱きしめて欲しいの」

――――――

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……い、今までいちばんまともだったな……」

言ってて自分がどんどん変な階段を駆け上がっていっているような気がしてならない……こういうときはあれだ、崇高で美化された妄想や夢なんかじゃなくて汚らしく本物が存在しているというこの目の前の現実をただ……見つめるのだ！！

「ん～……あきらぁ……」

「！？」

布団の中にら、耒が入ってきてやがる！？しかも……しかも服が……はだけてる！？

「ぶふっ……」

い、いかん……いかん！！今ここで鼻血をたらすなど……本物の変態だ！ここは冷静を……大人らしいクールな……いや、ＣＯＯＬな俺を保たなくてはいけない。

「……とりあえず、今日はマラソンじゃなくて散歩にしよう」

鼻血を止めるためにティッシュをつっこんで俺はその場を後にしたのだった。そして気がついたのだが……

「お、俺が耒の布団に入ってただと……」

――――――

「ねぇ、晶……なんか今日おかしくない？」

「な、何がだ？」

本日は休日で藍と洋子さんはどこかに出かけてしまったらしい。ねぼすけさんの耒はどうやら置き去りを食らったようだ。

お昼まではそれぞれの好きなようにしていたのだがさすがに昼時は俺が耒の食事を作ってやらないといけないので手伝ってもらわないといけないのである。もっとも、手伝おうとしたところで耒は邪魔になるだけだが……

「あたしのこと避けてる気がする……この前のおやつのことまだ怒ってるの？」

「いいや……そんなことないような気がするんだが？」

朝のことを思い出しそうになるので俺はあわてて自作の料理に視線をうつす。

「ほら、目を合わせて話さないし……」

「はは……ちょっと色々とあるんだよ」

こ、これはこまったなまともに顔も見れん……

「晶、鼻血が出てるわよ？」

「……あ、ほんとだ」

俺の鼻から赤い液体が……ぼたぼた出ている。鉄分を惜しまずに湯水のようにばしゃばしゃ出ている……これぞまさしく出血大サービスという奴だろう。

「ははぁさては……」

「！？」

えっちなことを考えていたんでしょ？と聞かれるのが非常に恐かった。

「私のチョコレートを黙って食べたでしょ？」

「……俺はたまにお前がそういう性格で本当に良かったっておもうぞ」
ティッシュをつっこんで応急処置をする。
「とりあえず、最近寝不足が続いてるんだ……そのせいで鼻血が出てるんだっておもう」
「……じゃ、今日は一緒にお昼寝でもする？どうせ二人とも帰ってくるの夕方だろうから……」
「いや……遠慮しとく……それよか散歩してくる」
今度は何がおきるかわからないからな……っと、携帯に着信が……しかし、着信相手の電話番号は見知らぬ第三者の電話番号だった。
「もしもし？」
『久しぶりだな、少年』
この声は……
「白猫か？」
『覚えていてくれて感謝する……今日は暇かね？』
「まぁ、暇っちゃ暇だが……それよか、お前……よかったな、生きてたんだな」
あの時は正直言って自分のことで精一杯で、俺はてっきり猫が死んでしまったのだとおもっていた。
「晶、友達？」
「ああ、俺の友人からだ」
未に説明しようかとおもったのだが……しても信じてくれないだろうとおもって説明するのはやめておいた。
『今日、少年の町の山のほうにある廃工場に来て欲しい……そこに私がいるわけではないが、そこにも面白い者がいるから』
おもしろい……者……ねぇ……
「……わかった、一人で行ったほうがいいのか？」
『一人で行ったほうが危険が少ないだろう』
「……そうか」

俺は立ち上がって耒に告げる。
「ちょっと遊んでくる……もしかしたら遅くなるかもしれないから洋子さんと藍に伝えておいてくれ」
「ん～わかった……けど、明日の数学の予習とかしなくていいの？問題、当てられてたでしょ？」
「あ～……確かにそうだったな」
あれからあの先生、俺に毎日問題を出すようになってしまった。
周りの生徒は
「白瀬に対して先生が恨みを持っている」とおもわれているようで……まぁ、確かにそうおもわれたってしょうがないのだが……きちんと謝ったのだから大丈夫のはずだ。
「……ある程度は解いてるからなんとかなると思う……駄目だったときは耒に見せてもらうから」
「……つまりそれはあたしにその問題を解いておけっていってるのね」
げんなりした表情の耒に手を合わせておいて俺は家を出ることにした。
「じゃ、行ってくる」
「帰りに何かおやつを買ってきてね♪」
「……ああ、買ってきてやるよ……その代わりに救急箱用意しといてくれ」
「……え？」
不思議そうな顔をした耒に背を向けて俺は自転車に飛び乗る。時間なんて決めていなかったのだがあの変に気難しい猫のことだ。きっと電話を終えた後からその面白い者を待たせているに違いない。その相手がどんな相手だろうと待たせるのはさすがに礼儀を知らないといわれてしまうだろう。
「……風が強いな」
風が吹き、俺の隣を葉が駆け抜けていく……その風が伝えてくれるものはなんだろうか？

自転車を逆風に向かって走らせて……俺の体力がそろそろレッドゾーンに入ろうとしたときになってようやく廃工場はその姿を俺の目の前に現してくれた。
「さぁて、何が出るだろうか？」
よりいっそう風が吹き荒れ始めたのだが……もう廃工場の中に入ることになるので関係ないだろう。
もっとも、その廃工場内の窓が割れていたりしたら意味が無いが……
「さ、行くか」
一陣の突風が俺の脇を駆け抜けていった。

突風の章　その一（前書き）

晶「……嬉しい……てか、そういえばまだ殆ど頭のほうじゃん！ここで終わっちゃったらわからずじまいで終わっちまうよ！」ネコ「相変わらずお馬鹿だな」晶「……というわけで、更新スピードはかなり遅くなってしまうかもしれませんが……とりあえず翼龍についていけるところまで、はてなが消え去るまで続けたいとおもいます」ネコ「お～がんばれ～」晶「最後に、ｋｉｍｉさんにタナチュウさん……そしてこの小説、絶対にコメディーじゃねぇだろ！っておもってる方……ありがとうございます！」ネコ「うわ！しつこいぞ、少年！」

突風の章　その一

十三、

廃工場内部は非常に埃がひどく、長年誰もここに立ち入ったことが無いことがすぐにわかった。

「……廃棄されたのが何十年前だって爺さんは言ってたかな……」

うちの爺さんはこの工場で働いていたそうなのだが……それが五十年以上前だそうなので（働いていたのは十六、七ぐらいだったそうだ）結構立つのだろう。子どもたちが来るにはちょっと危ないし、来たとしても普段は警備員が立っていたりするのではいろうにもはいれない……はずなのだが、今日に限って警備員はいなかった。

警備員がいるということはまだ、この工場には何らかの利用価値があるのか、この工場を取り潰して別の何かを建てるのかのどちらかだろう。

「さぁて、誰が……でるかな？」

こんな怪しいところに来たのだ……ただ、猫の言葉だけを信じて……

「お、ようやく来たか？」

「って、爺さんか……」

そこにいたのはうちの爺さんこと、白瀬宏太である。爺さんは大の旅行好き……というより、冒険好きで、地元住民も行きたがらないような場所に行ったりするのが大好きなのである。

「帰ってきたんなら連絡ぐらいしてくれよ」

「いましておるだろう？ああ、お土産はちょっとしくじって失敗したからすまんのう……」

そんな申し訳なさそうに言わなくてもらって結構だ。爺さんが持ってくるものは銃刀法違反になるようなものだったり、白い粉だっ

たり、図鑑にも載っていないような謎の生命体だったりするからな……すべて遠慮している。
「なぁ、爺さん……爺さんはあの白猫と知り合いなのか？」
「晶よ……わしは今ようやく日本に帰ってきたところで疲れているのだ……とはさすがにいえんのう。わしがここに戻ってきたのは少々昔話をするためだけ……というわけでもないが、主にその話しをするために帰ってきたのじゃ」
しっかしまぁ、こんな奇遇もあるものなのだろうか？
「爺さんが……白猫と関係しているのか？」
俺が質問すると爺さんは首を横に振る。
「いいや、わしが白猫について知ったのは昨日の今日じゃ。日本からの国際電話が来たのでお前からだろうとおもっていたのじゃが……どうも、以前研究をしていたところに勤めていた人物のなれのはてじゃったようじゃ……その猫はお前のことを知っており、わしが勤めていたこの工場のことをお前に話してほしいといっておったのじゃ」
「ふ～ん……でもそれなら別に猫が俺にいってくれればいいじゃないか？何だって爺さんが俺にわざわざ話すためだけに外国からいったん帰国したんだ？」
「それはの～」
「それは？」
「猫がいったんこちらに戻ってきて自分も海外に連れて行けといったのじゃ。高いところは駄目だから優雅な船旅がいいと申してもおった。猫は既に港でわしを待っておる」
沈んでしまえ。
「……ま、それはいいとして……この工場、何なんだ？」
俺は埃のたまり場を指差す。
「ここか？ここは表向きは製鉄工場じゃが……裏のほうじゃ……」
爺さんは指をぱちんと鳴らすと近くにあった壁が動き始める。

「……な、隠し階段！？」
「そうじゃ……しかしまぁ……驚き方が普通すぎじゃな。け、こんなのおどろかねぇよっておもっておったが……」
そりゃ、誰だって学校の絵が二つに分けられるとはおもわないだろうよ。これがほんとの学校の階段か？
「さ、下に行こうかのう？……晶よ、人は常に戦えるというわけではないし、人の命はもろくてはかないもの……ここから先は何があっても所詮はお互いの痛みなどわからない他人じゃ」
「な、なんだよ……わかってるよ。小さい頃から毎日毎日言われてたことだから」
爺さんと俺との間に絆などない。
あるものは冷たい何か。
格闘家だと自分のことを言っている爺さんは小さい頃から俺を鍛えてきた。爺さんの夢は自分を倒す格闘家を作り上げるらしく、ちょうど手元にいたのが俺だったということだ。練習中に俺が死んでも爺さんは仕方の無いことだとずっと言ってきたおかげで俺と爺さんはそういう言葉の後、とある言葉を爺さんが言うまでは他人となってしまうのである。
しかし、爺さんがそんなことを言うときは決まって面倒ごとが始まる直前であり、いまさら対応しようにも対応することは出来ないだろう。
「……さぁて、龍が出るか虎が出るか……」
どちらにしても俺に待っているものは炭酸の抜けたコーラよりも愕然としたものなのだろう。
――――
かれこれ暗い階段を三分ほど下っているだろうか？途中、扉が見えたりしたのだが爺さんはそこに入ろうともせずに呟くだけだった。
「そこは違う……」
まるでお化けのように呟いて爺さんは下へと向かっていく。薄暗くてものをはっきりとは確認することは出来ないのだが、下に行く

たびに……いや、正確に言うなら扉を一つずつとばしていくうちに俺を大人数が見ている。
「……」
ぞくぞくする感覚が俺をずっと襲っていたのだが……
がぁぁぁぁぁっぁぁぁ！！！
「！？」
「お目覚めのようじゃな」
そんな雄たけびが聞こえた瞬間に俺をじっと見ていた人物？たちはその姿を消した。消したというより霧消してしまったといっていいだろうか？
「晶よ……」
「なんだ、爺さん？」
「ものを作るには基本が大事だ。基本は応用の踏み台となる運命……基本はそのうち邪魔となり、頭の隅の牢獄に閉じ込められてしまうものだ」
「……さぁな、そうとも限らないと俺はおもうけどな……で、それが何なんだ？」
俺はそういって先を歩いていた爺さんを追い越して階段を駆け下りていく。既に目指すべき扉の隙間からは光が漏れ、それが俺の足元を照らしてくれている。
「所詮爺のたわごと……気にするな」
既に扉の前までやってきていた俺の耳に爺さんのそんな声が聞こえてくる。
「ああ、気にしないね……爺さんはこないのか？」
「残念ながら白猫と共に世界を旅しなくてはいけない……ああ、今度はどんなお土産が欲しい？」
「そうだなぁ、できれば日本の空港に売ってる奴でいい」
「……そうか」

「それと、折り入って頼みがあるんだ……」
「何だ？老い先短いわしにできることがあるなら聞いてやろう」
「……負担が増えるかもしれないけどお土産の数、増やしておいて欲しいんだ」
爺さんは振り返ることもなくただ頷いて階段をゆっくりと上がっていった。
「じゃあな、爺さん」
俺は爺さんに聞こえないようにそう呟いたのだが……
「ああ、犯罪者になんてなるなよ、晶」
と……答えてきやがった。まったく、たいした爺さんだ……
「さて、俺がやることなんてよくわからんが……」
目の前には蛍光灯の光であふれている扉……その扉が比較的新しいもので、何度もここに人がやってきているのは先ほどの階段で理解できた。こんなじめじめしたところにコケが生えていないのはおかしい限りだ。
「……とりあえず、この扉を開けるとするか」
俺は扉に手をかけて、それを思い切り押したのだった。

突風の章　その三（前書き）

晶「……」ネコ「なんだか浮かない顔だな、少年」晶「もとからこんな顔だ」ネコ「じゃ、元気がないな？一体どうしたんだ？」晶「……ま、色々とあるんだよ」ネコ「そうか？」晶「気にしないでくれ」ネコ「わかった、そうすることにしよう」

突風の章　その三

十五、

「一体全体、その右腕はどうしたんだい？」

黒田が俺の右腕につけられているギブスにちょっかいを出しながら尋ねてくる。

「こけた」

「そうかい……まったく、カルシウムを日ごろから摂取しないからこんなことになるんだよ……きっとカルシウムの神様に祟られたんだろうねぇ～」

へっ、そんな神様いるわけねぇだろ？

「あいにく、俺は左手でもある程度は出来る」

俺はそういって席につく。

「おいおい、そんな無理はしないほうがいいんじゃないのかい？」

「ふん……大丈夫だ。日常生活ならば支障は絶対にきたさんからな」

「晶、本当に大丈夫なの？」

耒もそんな風に見てくるが、大丈夫なもんは大丈夫だろう。今朝の朝、藍に耒に……そして……

きーんこーんかーんこーん……

「みんなおはよう……今日は非常勤講師が一人このクラスの副担任として入ったことを伝えよう」

「非常勤講師？」

俺は首をかしげ、黒田のほうを見ても

「情報不足だね」と呟いてこちらのほうに視線を送ってくる。

「一体全体、俺が休んでいる間に何かあったのか？」

「さ、さぁ？あたしもきいてないけど……」

耒は眼球をハワイまで旅行させに行ったのか、耒の瞳はひっきりなしに動いていた。
「……じゃ、はいってきてください……色野凪先生」
「は～い♪」
そういってはいってきたのは……
「な、凪さん！？」
「どうも～晶君♪」
そういって教壇に姿を現したのはスーツ姿の凪さんだった。
「色野凪で～す♪皆さんこれからよろしくお願いしますね～……特に晶君」
クラス中の視線がいたい。
「……ええと、凪さん？」
「晶君～私は先生ですよ～」
「……この際どっちでもいいです。何故、ここにいるのですか？」
「それはですね～私は皆さんに国語を教えに来たんですよ」
そういってにこりと微笑むその凪さんの笑顔が悪魔の笑顔に見えたのは俺の気のせいだろうか？
「あがが……耒、お前……このこと知ってたろ？」
「……ぷいっ」
耒はあらぬ方向に視線を持っていった。どうやら、こいつは確信犯という奴のようだ。
「じゃ、早速一時間目は国語だからな……お前ら、ちゃんと先生の言うことを聞けよ……特に白瀬」
「……うぐ、はい……」
担任の先生にそういわれてしまっては逃げも隠れも出来ないだろう。
――――
「……じゃ、ここでなんでこの人物がこうおもったのか答えてもらおうかな～……晶君、お答え下さい」
「……先生、これで質問回数五回目ですよ？まだ始まって二十分

も立っていませんが、このハイスピードで当てられたのは生まれてはじめてです」
俺はそういってしょうがなく立ち上がった。
「はい、じゃ答えてね♪」
「……え～……雄太はこの犬がとても哀れにおもって自分と同じ境遇だとおもったからですよね？」
「……正解ですね～」
「「「おお～……」」」
クラスメートたちはそんな声を出してくれるが、俺にとっては恥ずかしいだけだ。
「次はもっと難しい問題を出すことにしましょう」
そういって先生は黒板に文字をどんどん書いていく。
「……はぁ、俺……なんでこんなことになってんだ？」
今までの俺の行動がどこか間違っていた……ということがあるのだろうか？あるのだったら俺にこっそりと教えて欲しい。
「あたしに聞かないでよ……」
助けを求めた耒は俺にとってこんな態度をとってくるし、まさに四面楚歌かとおもったのだが、ここで下がったらこれからずっと俺にあたりかねない。
「耒、そういわないで助けてくれよ～」
「……しょうがないわね……」
少々考え込んでいたようなのだが耒は仕方ないとばかりに唇をなめてなにやら考え始めた。
「……うん、この問題なら絶対に晶君でも解けないでしょうね～……問題です、今日の私の下着は何色でしょう～♪」
今だとおもったのだろう……誰かが立ち上がった。
「「先生！その問題は今はまったく関係ないとおもいます！！」
「藍！？」
耒が立ち上がってそう先生に述べてくれたのだが、気がつけば、俺の後ろの席には藍が座っていたのだった。

「晶様、あのような質問には答えなくていいんですよ」
「いや、そりゃ答えないけどよ……」
「おやおや？白瀬はもしかして先生の下着の色を知っているのか？」
黒田がそんなことをほざき始める。
「しらねぇ！」
「え～……だって、今日私の布団から晶君のにおいがしてたもん！」
「！？」
え、え～と……確かにはいっちゃってましたが、あれは事故ですよ～……といおうとしてここで言ってしまえば俺は墓穴を掘ることになるだろうと思って黙っておいた。
「……晶、その顔何？」
ここで食いついてきたのが耒だった。耒は俺の顔を覗き込んで何かを確認しようとしている。
「さぁ？この顔は生まれつきの顔だからな……」
「それならあたしの顔を見て話しなさいよ」
俺が見るのは雲が鮮やかなお空だけだ。太陽は万物に平等にとは言わないがそこそこ平等に日光を与えてくださってらっしゃる。
「晶様、もしかして……」
「こほん、藍……はっきり言うが、なんらやましいことなんてないんだぞ？ただ、転がっていったらはじめは耒の布団に入って耒を押しつぶした気がしないでもないが……」
「つまり、君は耒ちゃんに覆いかぶさったということだね？」
「え、そ、そうだったの？晶のえっち」
耒、お前がいまさら照れても可愛くもなんともないぞ。
「黒田、お前は話をややこしくするな……それで、目が覚めてあわてて転がって移動すると次にたまたま……凪さんの布団の中に入ってってそこで転がるときに体力を使いすぎてそのまま力果てたというわけだ」
「つまり、君は凪さんの布団で果てたんだね？」

「……黒田、その言い方は誤解を招くからやめろ……そして藍、お前はなんだか当たったらびしょぬれじゃすみそうもない水の弾なんて放棄してさっさと自分のクラスにおとなしく戻れ……ちょ、ちょっと！危ない！マジ危ない！このままじゃし、死ぬ！？」

俺はそういって説得モードに入ったのだが……いかんせん、経験値が足りなかったようで……倒れたのだった。

突風の章　その四（前書き）

藍「さて、これからどうなるんでしょうか！」ネコ「待て、少年はどうした？」藍「さぁ？知りませんが？」

突風の章　その四

十六、

「ん～……久しぶりによく寝たなぁ～」

いつもだったらもんもんとした夢を見て叫んでおきるのだが……

……今日はとてもすがすがしい気分だった。まだ太陽が昇ってきていないので部屋の中は暗いが問題はないだろう。

「やっぱり、他の部屋に移してもらって正解だったな」

俺は一人呟いて立ち上がる。

時間は昨日の夜にさかのぼる……

――――

「洋子様！さすがに四人で一部屋はきつすぎます！」

物凄く血相を変えて夕食時に洋子さんにそんなことを藍が呟く。

「一体どうしたの？そんな恐い顔しちゃって」

「別にどうもしてませんが……晶様が窮屈そうな顔をして寝るのがつらいと涙ながらに学校で語っていたのを聞いていたんです！」

拳を握り締めてそんなことを言っており、耒はボーっとして俺を見てるし、凪さんはお笑いを見ながら食事をしている。

「え、お、俺そんなこと言ってないし……」

俺がそういうと洋子さんは

「どうなの？」とばかりに藍のほうを見る。

「証拠ならあります！！」

携帯を取り出してスイッチを入れる。

『知らせの友人黒田がここに嘘偽りのない言葉だと宣言します！右に転がれば耒ちゃんに襲い掛かり、左に転がれば凪先生の下着の色を確認してしまうと白瀬が言ってました！』

「誤解です」

「……晶、まだ何も言ってないわよ」

「誤解です」

「……」
「ごか……ぐはっ！！」
「……ちょっと静かにしてなさい！……で、藍ちゃんは何もされてないのね？」
「されてません……」
そういって何故か暗そうに言う藍。
「そう、それなら……晶、あんたの寝る場所は今度から隣部屋ね……って、それじゃあんまり意味がないわね……まぁ、どこに行っても状況が状況だからどうしようもないけど……そうね、向かい側の部屋に寝なさい」
「……わかりました」
――
こうして、俺は一人で寝ることになったのだ。わかっていただけたであろうか？
「いやぁ……やっぱり初めから一人で……」
いきなり俺の布団がもぞもぞと動き出して……良く知った声がしてきた。
「ふぁ～……あ、おはようございます、晶様……」
「……ああ、おはよう」
「あ、いけない！私ったらまたおトイレいって間違えてこちらの部屋に入ってしまったようですね♪」
いけませんねといって藍は頭をこつんと叩く……余談だが、以前にもこういうことがあって行方不明となってしまったのかと俺はあわてて探したことが一度だけあった。
「……とりあえず、おきるとするか……」
俺は布団から出るために手を支えとしようとしたのだが……
「ん……？」
「……晶？」
誰かの何かに当たった。
「……ら、未！？何でお前まで！？」

「私もいますよ」
「凪さんまで！？一体全体……」
――――――
「これは一体全体なんなんだぁ～～～～～……はっ！？夢か！」
いつものように俺は目を覚まし、やれやれと呟くしかなかった。
隣には耒がおり、その反対側には凪さんがいる。いつもの配置だ。
うん、どこも問題はない……そうおもって立ち上がろうとしたのだが……
がっ……
「ん？」
誰かの手が俺の手を思い切り掴んでいる。いや、いまさら気がつくのも遅いのだが……
「藍の手か……」
「ん～晶様、そちらは凪さんの布団です……行っては……あ、そっちは耒さん……」
耒側から手を伸ばしており、やれやれと俺はまた呟いてもう片方の手でおきようとしたのだが……
「晶君～……私、たくましい人好きなの～……」
「凪さん！？」
寝ぼけているのだろうが……その目は半分だけ開かれていて俺の手を……その、抱きしめている。
「マラソンなんて行かないでもっと寝ましょう……」
「ぐ……すげぇ力だ」
凪さんは万力の威力を発揮して俺を布団へと引きずり込もうとする。
「もしもだ……もしもここで布団の中に引きずり込まれてしまったら……」
寝ぼけている凪さんは夢と現実とを理解していない。つまり、彼

女の夢の中で俺がおもちゃのような何でも言うことを聞く存在だとするならば……

「き、危険だ！！」

急いで離れようとするが、そこには藍がいる。

「そっちは耒さんです～」

そっちは耒さんです～……なんてどうでもいい！！俺をここから助け出してくれ！お願いだ！誰か……誰か俺に希望の光を！救いの手を！

「ぐ……ここまでか……」

「……晶」

「ら、耒……助けてくれるのか……」

どうやって俺の上に馬乗りになったかは知らんが……その口元がにやけたのを見て俺は絶望という名の朝日を見た。

――――

「……白瀬、今日はなんだか鉄分が足りてないようだけどどうかしたのかい？」

非常に俺の面が面白いのだろう、黒田の奴はいつにもまして笑って嫌がった。そりゃそうだ、俺の鼻には血を止めるためのティシュが詰め込まれているのだから。

「……色々と刺激的な……いや、ちょっとレバーを食べ過ぎた。朝からフライパンをかじって鉄分とったのが間違いだったな」

「ふ～ん、そうかい？それはまた、豪勢な食事だったねぇ～……」

そこでやつは何かを考えて呟く。

「おいしかったかい？」

「うるさいわい！！！」

俺はそういってまったくしゃべってこないおしゃべり娘と何故かこのクラスに平然とした面でいる、色白と評判ではあるが今は何故か顔が真っ赤の藍とともに席についたのだった。

「藍さん、どうかしたのかい？」

「い、いえ……その、な、なんでもありません」

「ふぅ〜ん……耒さん、なんだか今日は珍しくしゃべらないけど……？」
「え、ちょ、ちょっと考え事してるから」
「へぇ、考え事ねぇ〜……で、白瀬はなんで色即是空なんてノートに書いているんだい？で、なんでその次にあれは夢だ！を何行も書いているんだい？」
「漢字の勉強だ」
「ふーん？」
人間、夢を見ることは多々ある。小さい夢でいちいち気にする必要はないだろう。

突風の章　その五（前書き）

藍「ネコさん、これから一体全体どういったことになるんでしょう？」ネコ「さぁ？それはわからないな……っと、そんなことより、無常さん、評価に感想、ありがとうございました」藍「そうだった！どうもありがとうございました」ネコ「これからどういったことに少年が巻き込まれるかは秘密なのだが……どうせろくなことには巻き込まれないだろうな」藍「まぁ、晶様にはがんばってもらいましょう♪」

突風の章　その五

十七、

俺は今、真剣ににらみ合っている相手がいる。その相手は静かに俺を見つめ返してきており、俺にとっては絶対的圧力を誇っている。

「……」

そして、その相手の近くには……いや、相手をけしかけてきたのは凪さんだ。ぜんぜん頼りにならないような顔をしているが、今の彼女はオニのような形相というか、冷たい瞳で俺を見ている。

二対一のこの状況……

「さぁ、はじめましょうか……晶君？」

俺は顔をゆがめて相手を説得するために口を開く。

「何故……何故こんなことをしなくちゃいけないんですか！凪さん！俺、涙が出そうですよ！」

俺の心からの願いを凪さんに伝える。

「……晶君、ここでは私のことを……」

凪さんはため息をつく。

「……先生と呼んでください」

そうして、ずいと国語の補習用プリントを俺の目の前につきつけてきたのだった。

――――

発端は本日の国語の時間だ。

「白瀬、何で君は顔が赤いんだい？真実を教えてくれないとちょっと僕は君を警察に突き出そうかなと考えてしまうんだが？」

今日の朝の光景が未だにフラッシュバックして俺の顔を赤く染めている。

「何でだ？そりゃ、何か俺が法に触れたんなら警察行きを考えてやってもいいんだが？」

ちらりと凪さんのほうを見るが、凪さんは黒板に漢文を書いてい

っており、どうやらまだ俺たちがおしゃべりをする時間はあるようだ。
「何でってそれはね……耒ちゃんを見ろよ」
隣の耒は顔を真っ赤にしてたまにこちらを見ては顔を下に下げている。
「熱だろ？」
「ま、そういうことにして……藍ちゃんを見てみろ」
何故か後ろの席にいる藍は非常につやっぽい瞳で俺のことを見ている。
「風邪だろ？」
「風邪で目がつやっぽくなるのかい？」
「そりゃ、あれだ……花粉症」
「……じゃ、朝何があったのか詳しく教えてくれよ」
何故、何故ここまで食いついて来るんだ？不思議になって周りを見ると他の連中も心なしか耳をそばだてているような気がしないでもない。
「大人の階段を駆け上がったんだろ」
「はぁ？」
どうやら逃げ場は耒の左にある窓しかないらしいが……あいにく、ここは二階であって飛び降りたらちょっと痛そうだ。
「わぁったよ……いいか、一度しか言わないからな？てか、何をそんなにきたいしてるんだか……今日の朝、起きようとしたら藍に手をつかまれてて……」
「うんうん！それで？」
「ほら、右手がこんなんだからなんとか起き上がろうとして左のほうを見たら凪さんがな……起こしてくれなくてな、そんで、俺の上に耒が馬乗りになっててそのまま引き込まれて……」
「うんうんうんうん！！」
だんだんと顔を近づけてくる黒田に
「今日のこいつはどうしたんだ？」とおもいながらも話の終わりを

告げる。
「目の前に三人の顔があってそれぞれをじっくり見る機会があっただけだ」
「……それだけ？」
「ああ、それがどうかしたのか？」
未だに思い出しても恥ずかしいというか、その、いい思いだったな。
「で、何で顔が赤いんだい？それが納得できない」
言ってやったのにこいつは何故か不機嫌で……俺はため息をついた。
「いや、その……三人がとても可愛い顔で寝てるな……はじめて感じたから」
「くっそがぁ！このくそやろうが！そんな『好きな先輩と目があった！きゃは♪』てな感じの初々しいがなんとなくうらやましいというくだらないことでいちいち顔を赤くするなぁ！なんだかとっても悶々としちまったじゃないか！僕の妄想を返せ！」
黒田はいきなり俺の胸倉を掴んできた。
「お、おい！何を意味わからんことを……」
「うぉぉぉぉ！！男どもよ！今こそ立ち上がれ！この勘違い大将軍に極刑を！」
「はぁ？勘違いって……お前たちだろ！」
「いや！変な顔をしていた白瀬が悪いだろ！皆、そうおもうだろ？」
男どもは消極的だが頷いている。
「ほら見ろ！現実に君は僕らの敵だ！」
「わけわからんことを言うな！今日は凪さんの機嫌が悪いんだぞ？こんな騒動、凪さんの耳に入ったらどうするんだよ！」
俺がこの不毛な争いを終結させるべくはなった言葉は予想以上に効果があった……
「悪い子にはおしおきですっ！！！ていぃぃっ！！」

どごす！ばかん！！

「ぐはっ！」

「ぶはっ！！」

俺と黒田の脳天に凪さんの一撃が決まる。くぅぅ……さすが俺の右腕をおった威力だけはあって……てか、そんな一撃を食らってまだ頭の形を形成している俺たちの頭めっちゃ石頭？

「本日、居残りするように！他の人も授業中に私語をしたりしちゃ駄目ですよ～？」

凪さんはそういって教壇に立って授業を進めるようだった。

「……あいたたた……黒田、お前のせいだからな！」

「ふん、それはへんな言い方をした君が一方的に悪いとおもうね」

「二人とも、補習用プリントをそんなに増やしたいのかな？」

「「いえ、なんでもありません」」

――――

とまぁ、こういうことがあったのである。

黒田は既にプリントを終わらせて俺に話しかけずに帰ってしまったが……既に俺たちの心はつながっており、俺の手には奴の答えが書かれているはずの一枚の紙切れがある。

「……晶君、ちょっと先生は職員会議に行ってきますから逃げちゃ駄目ですよ？」

「逃げませんよ」

どうせ家に帰っても凪さんに会うのだから彼女に逃げるには家出するしかないだろう。

凪さんがいなくなったことを確認すると俺は早速答えが書かれているとおもわれる紙を広げる。

「……４Ｐ？」

４ページ？いや、この補習用プリントの答えがどこかの教科書の４ページにでもあるということなのだろうか？

「……白瀬へ、僕は残念ながら凪さんに睨まれているのでカンペ

の製作は出来そうにないので自力でがんばれ……？」
友は見事に俺を裏切り……夕焼けは眠たいのか知らないが徐々にその姿を地平線の向こうへ……きっと自分の家に帰ろうとしているのだろう。
「くそ！俺だって帰りたいわい！！こうなったら脱走するしかない！！」
俺は鞄を掴むと二階の窓としりながら夕日を入れ込む窓を思い切り開けた。
「このパイプを使えば……」
俺はパイプを掴もうとして、今の自分の状態を思い出す羽目となった。
「あ、俺っていま右腕使えな……うわぁぁぁぁぁぁ！！！」
そうだった、俺は今、骨折をしていて右腕が使えないのである。
俺はバランスを崩して陸上部が引いていたマットに落ちた後に職員室で凪さんにしぼられたのだった。

突風の章　その六（前書き）

藍「ネコさん、もう少しで物語も殺伐とした話に変わりますね？」ネコ「いや、変わらないだろう？てか、何で殺伐とした雰囲気に変わるんだ？」藍「ほら、革命を起こすんですよ」ネコ「誰がだ？」藍「晶様がですよ」ネコ「いや、作者が革命の話しなど……かくめい！」藍「……なんで江戸っ子口調なんですか？」ネコ「く、伝わってない……」

突風の章　その六

十八、

「晶君、次はどういったものを買えばいいのかな？」

「そうですね～……りんごですかね～」

俺はメモをみながら凪さんに応える。

「……それより、学校の仕事終わってないって言いませんでした？」

俺が職員室で凪さんに起こられている間、他の先生は『色野先生も大変ですね、まだ書類が残っているんでしょう？』と呟いていたのを思い出した。

「別に仕事を捨ててまで買い物に付き合ってくれなくても良かったのに……」

「何言ってるの、晶君？ここにきちんとやりかけの書類は持ってきてるわ」

そういって買い物籠の隣に持っている自前のバッグには凪さんの机においてあった書類がきちんと収まっていた。

「……でも、大変でしょう？」

「そう、大変だけど……」

そこで微笑んで俺のほうを見る。

「助手もきちんといるから大丈夫。明日からのちょっとした休みの前に手段をとっておかないとね」

「成る程……」

明日から藍、耒、凪さんは旅行に行くようで、俺が入っていないのはバイトが入っているからである。バイトと言っても、友人の……正確に言うと黒田……家族に勉強を教えるといったものなのだが。

「そういえば、りんごとかごぼうとか魚だとか……なんだか統一性がない買い物ですよね？聞いた話じゃ今日の夕食になるって藍が

言ってましたけど？」
「そうねぇ、確かに統一性がないけど……」
凪さんはあごに手を当てて考えているような仕草をして、成る程と呟いてから俺に言う。
「ああ、料理をしている人たちはある程度の域に達すると創作料理に手を伸ばすようになるんじゃないのかしら？」
さて、りんごやごぼう、魚が混じった料理……俺の知っている中には入っていないので間違いなく藍の創作料理になるだろうが……
「もしかしたら一品じゃないかもしれませんよ？」
うちの家の食事係は日によって替わる。俺がしたり（月曜日）、俺と藍が一緒にしたり、（火曜日）藍が一人でやったり、（水曜日）洋子さんと藍が一緒にやったり、（木曜日）耒がこげを作ったり、（金曜日）凪さんが役に立たなかったり、（土曜日）暇な人がやったり（日曜日）……と、こんな感じだ。
基本的に俺は好き嫌いがないのだが……強いてあげるなら耒が作る料理と凪さんが心をこめすぎて作った料理は嫌いだ。
「けど、まぁ……料理が得意な藍が失敗するってことはないでしょうけど……一番料理もうまいですし……」
今じゃ料理が趣味となっている人間の腕前を教えるまでもあるまい。彼女は間違いなくあの家の中で一番の実力者を持っている。客観的に言うなら次点で洋子さん、俺……で、それから果てしない間を開けて耒と凪さんがどんぐりの背比べをしているというところだろう。
さて、このようなことを考えていると凪さんはちょっと眉間にしわを寄せて俺を睨んだ気がした。
「む、私が料理上手じゃないっておもってない？」
「え？いや……」
事実を疲れたもんだから俺は押し黙るしかなかった。急いで言い訳、もしくは話を変えるかのどちらかにもっていかなくてはいけな

い。凪さんは子どもっぽいところがあるのでこういう話になるとむくれるのだ。嘘をつくのはどうかとおもうのだが（そもそも、この人には嘘が通用しない）事実を言うと俺に台風が向かってくるだろう。

「……心がこもっているのは間違いなく凪さんだと思いますよ」

「そう、それはよかった♪」

それ以降、凪さんはご機嫌となり、遠慮したりしたのだが俺の腕を抱きしめるような形で帰宅したのだった。

後に、これがちょっと問題となった。

――――

「あ～見た目と違っておいしいんだな～」

本当に見た目がぐちゃぐちゃの料理だったのだが味は結構おいしくておなかいっぱいになった。腹いっぱいになった俺はソファーに座ってボーっとしている。

「本当ねぇ～」

俺の隣で耒もそう呟く。耒もはじめは

「ちょ、ちょっと待ってよ！何これ！？これを、これを食べろって言うの！？これなら凪さんの料理を食べたほうが……」ととちくるったことを言っていた。

「藍様様だな」

「ふふっ、お口にあって何よりですよ晶様」

そういって俺の近くに食器洗いを終えた藍がやってくる。

「ところで、何でこんなにおいしかったんだろうな？」

ふとした疑問……人間は知りたいという気持ちがなければ早死にすると国語の先生が言っていた。だが、例外も存在するらしいとおもったのはこの後だった。

「それはですね、心をこめて作っているからですよ」

「ああ、なるほどねぇ……」
心をこめれば何でもおいしくなるってか？
「まぁ、晶君は私の料理が一番心がこもっているって言ってたけどね」
凪さんも俺たちのところにやってきて俺ににこりと笑いかける。
「へぇ、晶……あんなに食べたくせしてあの凪さんの料理のほうがおいしいっておもってるの？」
耒が
「へ、八方美人は滅べばいいわ」って顔でこちらを見てくる。
「え、あ……」
「……晶様、本当ですか？」
藍も
「侮辱です」といった表情を見せる。
「りょ、両方同じくらいおいしいっておもってるんだが……」
「あら、それならあたしは？」
耒がニヤニヤしながら俺に尋ねてくる。まぁ、俺がこういった手前は……ちゃんと答えないとこまるだろうな。
「まずい、どぶに捨てると地球環境悪化に拍車をかけるだけだろうな」
「言ったわね！」
あっというまに俺の胸倉を掴んで犬歯をむき出しにする耒を凪さんが止める。
「まぁまぁ、耒ちゃんも私のようにきちんと心をこめて作れば評価してくれるとおもうわ。そうすれば私のようにおいしい料理を作れるとおもうから」
あなたが言わないで欲しい
「え、え～まぁ……がんばってみようかなぁ」
耒は俺の胸倉を離してまた隣に静かに座る。
「……いい子いい子、私は布団に入るときも、食事をするときも、学校で晶君を呼び出していぢわるするときも晶君のことしか

考えてないわ」
「意地悪？……晶様、いつそんなことされたんですか？」
心なしか、藍の表情が恐く見えた。
「え、え～と、さぁ？」
「……だから、私のほうが心がこもってるのは間違いないわ♪」
「む、それなら私は常に晶様のことしか頭にありません！だから私のほうの料理のほうがおいしいですよ！」」
藍もどことなく子どもっぽいところがあるからなぁ～ま、いずれ収まるだろう。
「ふぁ～眠いな～……耒、もう寝ようぜ？俺、疲れた」
「そうね……じゃ、先に晶と寝てるから……二人とも区切りがいいところでやめないと洋子さんに怒られるよ」
耒はそういって俺と共に寝室に行こうとしたのだが、体を二人に掴まれてどこかに連れて行かれたのであった。俺はそんな三人を待ってやれるほど心に余裕がなかったので一人で寝室へと向かって明日のために眠ったのだった。

黒田の章　その一（前書き）

晶「ふぅ、酷い目にあった……」ネコ「おお、少年……どこに行ってたんだ？」晶「トイレに行ってたら三人に出られないように監禁されてた」ネコ「それはまた……」晶「さて、今回から新たな章となってあの三人はしばらくのあいだおさらばです。いよいよ話も終わりに近づいて……」ネコ「そうなのか？」晶「まぁ、更新するたびに最終話に近づくのはすべての小説で言えることだからな」ネコ「そうだな、そんなことよりこれからどうなるのか……一番知りたいことは……」晶「なんだ？」ネコ「私の出番があるかどうかだな」晶「さぁな？」

黒田の章　その一

十九、

「じゃ、晶様……行ってきますね？」

藍色のワンピースに身を包んでリュックを背負っている藍は玄関先で俺にそう告げる。

「ああ、楽しんでこいよ」

藍はそのまま洋子さんが待っている車に乗り込み、次に耒が部屋から飛び出してきた。

「晶、お土産心待ちにしておいてね」

「そうだな、まぁ、怪我のないように帰って来いよ」

返事をせずに

「あたりまえじゃない」と言いたげの顔で車に乗り込む。

「じゃ、晶君……言ってくるから、私がいなくなっても悲観して紐無しバンジーなんてしちゃ駄目よ？」

後ろから抱きしめるようにして凪さんが呟く。

「しませんよ！！早くしないと遅れますよ！」

俺を放すと彼女は右手を上げて車に颯爽と乗り込み……車は猛スピードで去っていった。

「さて、俺もバイトに行きますかね～」

俺は学生服に着替えるべく、部屋に戻ったのだった。

――――

「なぁ、白瀬……」

「何だ？どうした？」

浮かない表情をして俺のところに黒田がやってきたのは一週間ぐらい前だっただろうか？

こいつにしては珍しいくらい表情で俺にすがりたがっていたようだった。

「……一生のお願いがあるんだ」

人には恩着せが増しことをさせる黒田だが、その正体はけちであり、以前はこのように述べていた。
「人に恩を着せるぐらいなら自滅したほうがまだましだね」
と。
つまり、これは何かの緊急事態なのだろう。
「なんだ？内容は？」
「……僕の妹の家庭教師をして欲しいんだ！」
頼むといわんばかりに頭を下げてくる。何事かと他の連中が俺たちをじろじろと眺めているが、つるんでいる二人だったので
「ああ、またあの二人が馬鹿なことしてるな」とおもわれているのだろう……普段の黒田の言動が俺のかっこいいイメージを壊しているのであって、最近の行いは若干俺のせいだが、とりあえず問題児扱いされるのは黒田の制である。
「妹だぁ？お前、妹が欲しいって言ってたじゃないか？」
「それは義妹のほうだ！勘違いするな！」
「未に『僕の義妹にならないか？』っていってたくせしてよぉ」
困った顔をして俺の背中に隠れた未が懐かしいな。一芝居うって
「あ～黒田、残念ながら俺が未の兄貴分だからあきらめてくれ」って言ったらクラス中の連中が引いていたのが記憶に新しいなぁ。
「っと、話しがずれた……妹がいたのは事実なんだけど……両親が別居してて僕が父側、妹が母親側にいてね……」
「……悪いな、なんか、茶化したみたいで」
罪悪感にさいなまされながら俺はそんなことを口にした。
「いいよ……で、僕の妹の学力が低迷気味だったそうなんだ。ああ、今僕らのいっこしたの学年にいてね、今学期からこの高校に入ってきているんだ。でも、そろそろがんばって成績を浮上しないと残念ながら来年また中学気分が抜け切れていない哀れな新高校生と一緒になってしまうんだよ！頼む！だから教えてやってくれ！この通り！両親もちゃんと一家庭教師として君を雇いたいといっていたんだよ！」

何故、そこまで期待されてるかわからないのだが……

「まぁ、教えるのはいいんだが……成績じゃお前のほうがはるか上だろ？」

はっきり言って俺の成績は徐々に下がりつつある。藍は平均より上で、耒に至ってはトップだ。

「藍とか耒に頼んだほうがいいんじゃないのか？先生の凪さんのほうがいいとも俺はおもうんだが？」

人に教えるにはしっかりと自分で理解していなくてはならないと……誰が言っていた気がする。それが国語の教師だったか数学のあの先生だったかは理解できないが……俺がそう告げると黒田も頷いた。

「ああ、確か体育の鳴竹が言ってたね」

あれ？あんまり勉強関係ない人が言ってるな……

「とりあえず、頼むよ！今度の休みの間だけでいいから……これが僕の家までの地図だから！」

それじゃあ……といわんばかりに奴は去っていった。

「……困ったもんだなぁ」

黒田には色々とお世話になっているので無下には拒否できない。まぁ、一年前に習ったことなのでノートを探してそれを復習して……どういったことを教えなければいけないかなどをまとめたりしなくてはいけないようだ。

「明日からが地獄だな」

次の日から俺は準備に取り掛かるために凪さんに教え方を習ったり、数学の先生に先生独自の説き方などを教えてもらったりと……

「白瀬は先生好きになった」と噂されたりもしたのだが（勿論、いった連中には仕返しを忘れなかった）何とかこの日を迎えられたことを前向きに考えよう。

――――

ピンポーン♪

耳障りの良い音が鳴り、俺は一つの扉の前に立たされていた。

「……？」

比較的大き目の家を眺めながらそんなことを考えていると……

「ああ、悪い悪い……約束どおり来てくれたんだね？」

何故か後ろから黒田が現れた。

「あれ？何で後ろから出てくるんだ？」

しかも、気がつけば足元には穴が開いていた。

「さ、ここからはいってくれたまえ」

「？」

どうなってるか理解できないが、俺はとりあえずその穴に続いてはいることにしたのだった。

「なぁ、何でこんな穴がここにあるんだ？来るときはなかったぞ？」

「緊張していたからだとおもうね……とりあえず、玄関には君を亡き者にしようと考えている第三者の意図が感じられるんだ。あの時君が痺れを切らして扉を開けたらお陀仏だったよ」

どういう家だ、それは？俺が家にやってくるのがそんなにいやだとおもう奴がいるのか？

「こうして穴を掘って君を助けに行かなくてはいけない事情だったものでね……穴は石で隠しておいたんだ。実にうまい隠し方だったろう……さて、ついた」

既に家の中に入っている状態であり、今でも靴を履いたままだった。俺たち二人が顔を出した場所は台所だった。さらに言うなら近くに黒田のお母さんとおもわれる人物が包丁を持って立っていた。

「あら、董……そちらが白瀬晶君？」

「うん、そうだよ」

「いつも息子がお世話になってます……どうか、娘をよろしくお願いします」

「え、いや……」

こんな風に頭を下げられたことなんてないから俺は戸惑ってしまった。
「……じゃ、母さん、妹の部屋に連れて行くよ」
「ええ、がんばってね白瀬君」
「はぁ、がんばります」
母親の瞳が
「この人はいつまで耐えられるかしら？」と言っているような気がした。

黒田の章　その二（前書き）

晶「お、今回はその二が存在してるな？」ネコ「まぁな……」晶「どうした？何か気がかりでもあるのか？」ネコ「さいきんさぁ、ほら、何だ、私の口からはいえないが……似てる題名が……」晶「気のせいだ、それはネコの気のせいだ」

黒田の章　その二

二十、

案内された部屋の扉には質素に

「奈津美と夏華の部屋」と書かれていた。ここに来て俺は扉に手をかけた黒田に尋ねる。

「……黒田、二人に教えないといけないのか？」

黒田はためらったような仕草を見せた後、告げる。

「いいや、一人のほうでいいよ……奈津美のほうを頼んだよ」

「なるほどな、夏華ちゃんをお前が教えるのか？」

「……そんなことより晶、僕は君に妹をお願いしたい」

「？」

「理解は出来ないだろうけど、よろしく頼む」

「そりゃ、わかったが……何かあるのか？」

首をすくめ、黒田は応えないまま扉を開け……俺は驚いた。

「あれ？俺が二人……？」

「何を言っているんだい？これは鏡さ……」

そういえば黒田の整った顔も鏡に映ってるな……

「どうだい、驚いたかい？」

この部屋……四方の壁がすべて鏡だ。

「で、奈津美ちゃんってのはどこだ？」

「そこにいるよ……じゃ、住み込みでよろしく頼むから」

「え？」

扉は音を立てて閉じられ、俺は鏡の自分を見つめることなく……

……

「うわ！？」

右を見るとそこには少女がいた……どうやら、これが奈津美ちゃんのようだとおもったのだが……

「なにぃ！？」

俺はしりもちをついた。鏡に写っているはずの奈津美ちゃんの姿はどこにもなく、代わりにいるのは一匹の龍……だが、前足がないところを見るとワイバーンと言う奴だろうか？
「あなたがお兄様が呼んだ新しい家庭教師さん？」
「え、ああ……ところで、そっちのごついのは……」
俺は鏡に映っているワイバーンを指差してたずねる。
「奈津美ちゃん、君の鏡に写った姿か？」
「え？」
驚いたように俺に尋ねてくる。あれ？この子には見えてないのか？
「どうしてわかるの？」
驚いたのはどうやらこれが見えているからのようだった。しかも、興奮している。ワイバーンのほうは俺が気がついていることに気がついたのだろう、敵意をむき出しにした。
「あ～っと……とりあえず、落ち着いてくれ……というより、説明してくれ」
「この人は……」
人ではない、どっからどう見ても先祖はサルとかそんなもんじゃないだろう？
「……私の双子のお姉様なの」
「……へぇ、じゃあ君もワイバーンなのか？」
そんなら必然的に黒田もワイバーンとなるな……
だが、俺の考えは間違っていたようで……
「違うわ。私とお兄様は人間よ」
「じゃ、何でこの……」
指差すと、俺を睨みつけてくる。おっと、恐い恐い……
「……この子の名前は何だ？」
「夏華」
「……夏華ちゃんはワイバーンなんだ？てか、なんで鏡にいるんだ？」
こんなごついのにちゃん付けするとは思いもしなかったのだが、

とりあえず一歳年下なのだろう。
「……わかるわけないじゃない……小さい頃に行方不明になっちゃって……それが関係しているのかも……」
よく理解できない。
「で、夏華ちゃんが現れたのはいつだ？」
たずねるととてもいやそうな顔をする奈津美ちゃんだったが……
「……お父様とお母様が行方不明になったお姉さまのことが理由で別居してすぐ……朝、鏡を見ると、私が映ってる代わりにお姉さまの胸の部分が映ってたわ」
表現があれだが、俺はワイバーンの胸を見てたくましいものだなぁ～と無駄におもったのだった。奈津美ちゃんの胸はちょっと小さいだろう……きっと、夏華ちゃんのほうも小さいに決まっている。
くだらないことを考えるのをやめてこの子の境遇を考えた。きっと、鏡に写っている夏華ちゃんを
「お姉さま」と呼んでいるところを聞かれたんだろうなぁ、で、母親は可哀想になってもう一人いる黒田と生活させるようにしたんだろう。夏華ちゃんで別居していた二人は奈津美ちゃんのおかげでまた戻ったのかもしれない……所詮は俺の考えだが。
「……ま、いいや……とりあえず勉強しよう」
「……おかしいとおもわないの？」
「何を？」
ワイバーンの胸がたくましいことか？藍だってたくましかったし……いや、今の人の姿でも、その、結構あるし……
なおも無駄なことを考えていた俺の耳に彼女の声が聞こえる。
「あの、私がこの部屋の壁を鏡にしてること……」
「お姉さんと会うためだろ？」
そんなこと考えればわかる。兄弟はいないが、双子というものは結びつきが強いそうじゃないか？
「違うの、私がお姉さまを監視するためなの」
知ったかの俺を笑ってくれ……いや、嗤ってくれ。

「どういう意味だ？監視するって？」
俺はいい加減疲れてきたので腰をおろす。
「……たまに、たまにお姉さまがいなくなるの」
「で？」
それがどうしたんだ？夏華ちゃんだってワイバーンだ。たまには大空を自由に飛びたいとおもっているんじゃないのだろうか？
彼女は決心したかのように告げる。
「……これまで、これまで……お姉さまが私の前から姿を見せなくなった次の日に必ず事件が起きてるの！だから、だから……お姉さまが暴れてるんだって……」
俺はワイバーンのほうを見るが、そのワイバーンは無実だ！といわんばかりに首を振る。
「お前のお姉さまは否定してるぞ？」
「……口じゃなんだっていえるわ」
意外と厳しいんだな……奈津美ちゃん……そして、夏華ちゃん、あんたも相当へこむだろうなぁ～夏華ちゃんはなんもしゃべってないし……
「さ、とりあえず勉強だ。奈津美ちゃんが何で成績不振に陥っているのかわからんからそれから見つけていこうか？」
「勉強なんて……簡単だわ。だけど、お姉さまがいなくなることを考えるとテストなんて手につけられなくて……」
「ああん？お前は勉強をなめてるのか？」
と、本気で問いただしたくなったのだが……
「……わかった、そんなら今から出す二十問を全部といて見やがれ！」
俺はそういってノートを一枚破って問題を書いていく。勿論、その中身はめちゃくちゃ難しい入試レベルの問題……奈津美ちゃんは高1だったな。これはとけるまい。
――――
「俺が悪かった……」

満点だった。
「……晶さん……でしたよね？私、今週毎日補習テストがあるんです。その間、お姉さまの監視をお願いできますか？」
「わかった、その代わり満点取ってきてくれ」
俺は隣のワイバーンを眺め、ワイバーンのほうも俺を見てくるのだった。

黒田の章　その三（前書き）

晶「なんか本編と関係ないことしてると思っているそこのあなた！」ネコ「違うのか？これって浮気だろ？」晶「全然！これは違います！」ネコ「とりあえず、評価よりも感想が欲しい今日この頃です」

黒田の章　その三

二十一、

その晩、俺は夕食をいただきながら

「とりあえず、おれのバイト代を決めるのは奈津美ちゃんが採ってくる補習のテストで」と言っておいた。

「さ、ここが君にあてがわれた部屋だよ」

「ああ、隣ね……」

用意された部屋は奈津美ちゃんの部屋の隣だった。

「だけど、まぁ……こちらの意見としては夜通しで勉強しないといけないってレベルだからね……ああ、あの部屋防音性だけは大丈夫だから」「ちょっと待ってくれ」

「なんだい？」

去っていこうとした黒田を引き止めて尋ねる。

「……お前の妹……奈津美ちゃんのほうじゃなくて夏華ちゃんのほうだが……未だに行方不明なのか？」

「……奈津美に聞いたのかい？まぁ、別に隠してるってわけじゃないからいいんだけど……そうだよ、今じゃ行方不明じゃなくて戸籍上でも、この家の中でも死んでいるってことになってるよ。奈津美はそうは言わないけどね」

俺は

「いや、あの鏡に彼女が映ってる」といおうとして奈津美ちゃんとの約束を思い出す。

「絶対に……絶対に晶さんはお姉さまが見えるなどと他人に言わないで下さい。言ってしまえば私と同じ扱いを受けてしまいますから」

「……かわいそうに、双子だったから鏡に映った自分を夏華だと

思い込んでしまったんだろうね」
俺だった鏡にあんなものが映っていたら卒倒しそうだ。
「……ま、そうだな……じゃ、俺は勉強教えてくるから」
俺は鞄を掴んで奈津美ちゃんの部屋に向かったのだった。
――――
「奈津美ちゃん、夏華ちゃんが行方不明になったときの出来事を教えてくれないか？」
俺は学習道具をそっちのけで奈津美ちゃんに尋ねる。どうせ鏡の中にいる夏華ちゃんのほうは日本語がしゃべれんだろうからな。
「……あれは小学校に上がってすぐだったの……」
静かにしゃべりだした奈津美ちゃんの涼しい声を俺は聞き始めた。
「……この町の山のほうに廃工場があるのは知っているでしょう？私たち二人で探検に行ったのね、そのときお父様に友達に遊びに行くって伝えたんだけど……それで、二人で警備員さんに見つからないように一人が石を投げて囮になってもうひとりが中に入って窓の鍵を開けるっていう役割だったんだけど……私が囮でお姉さまが鍵を開ける役。私のほうが足が速かったから……私が警備員さんをうまくひきつけていたんだけど、裏側の窓は開かなかったの。それで、きっと私をおいて帰ったんだわっておもって家に向かったんだけど……お姉さまはいなかったの……その後は大騒ぎ。私は廃工場のことを伝えたわ。そしたら急いで警察とかその場にいた警備員が中を探したんだけど見つけることはおろか、誰かが中に入ったような足跡はなかった。だって、誰も立ち入っていないことを示すように埃が床にはあったもの……その後は無意味な山狩りが行われたわ……父親として役に立たないとお母様はおもったのかその後に別居しちゃったの。」
「はぁ、なるほど……」
しかしまぁ、意外なことはあの廃工場が出てきたことだろう。けど、冷静に考えてみればそれは必然的に登場する舞台だったのかもしれないなぁ……

「……夏華ちゃん、記憶あるか？」
首を振る。
「家族の記憶はあるんだろ？」
頷く。
「……とりあえず、今日はもう寝たほうがいいだろう？明日からずっと奈津美ちゃんは補習テストがあるんだからな？」
「うん、わかった」
おお、実に素直だ……だが、どうやら自分の姉のほうが気になるらしい。彼女はずっと夏華ちゃんに視線を送っていた。
「きちんと俺が夏華ちゃんを見てるから」
「本当？」
「ああ、本当だ……なんなら約束してもいいぞ？」
そういって小指を差し出す。
「ゆびきりげんまんだ」
「うん！」
―――
言われた手前、俺は夏華ちゃんを見ることとなった。近くのベッドでは奈津美ちゃんが静かに眠っている。
「……相互監視下に陥ってるな……」
俺がちょっとでも奈津美ちゃんに近づこうとすると鏡に映る夏華ちゃんは威嚇してくる。ふ、安心してくれ……俺は寝顔を見たいだけだからな。
「それより、夏華ちゃん……一体全体どうなったら人間がこんな姿になるんだろうなぁ？」
夏華ちゃんは首を傾げるぐらいしか応えようがないようだった
「ふぁ～さすがに眠くなってきたな……ちょっと休憩」
俺は鏡に映っている夏華ちゃんの足のところの鏡にもたれようとしたのだが……
「え？」
壁があるとおもったそこには何もなく、俺はそのまま鏡側に倒れ

こんで……
「？」
なにやらやわらかいものが後頭部にあたった。
「あれ？」
そして、何故か目の前にはさかさまに映る奈津美ちゃんの姿があった。
「あれ？」
「さっさとどきなさいよ！」
奈津美ちゃんは立ち上がって俺は頭をぶつけた。
「あいたたた……いつの間におきたんだ、奈津美ちゃん？」
「何いってるの？それより、あんた……なんでここにいるのよ？」
「はぁ？」
何故か、もたれたはずの鏡が目の前にあり……鏡に映るのは眠っている奈津美ちゃんの姿だった。
「あれ？これは一体？うぐぅ！！」
俺はいきなり胸倉を掴まれた。
「どうやってはいってきたの！教えてよ！」
「あ、あせるな……てか、俺に理解できん……」
離してもらって俺はため息をついた。
「なんか知らんがこっちの鏡の世界に来たんだな～……妹さんはぺたんこなのにあんたは意外とあるんだな～鏡じゃたくましい胸のワイバーンだったがこっちでもすごいなんてそうぞう出来なかったぜ？こちらの世界じゃあんたは普通に人間の姿をしているんだな？」
俺がそういうと頭を叩かれた。
「違うわよ！あんたが来たらこの姿にいきなりなったの！」
「人の頭を叩くな。脳みそが出て減っちまうだろ……この部屋、全部反対なんだな」
部屋の中は鏡に映っている奈津美ちゃんの部屋とは反対だった。
「そんなことより、ちょっと試したいことがあるんだが？」

「何を？」
「あっちの世界に俺が戻れるかってこと」
俺はもとの世界に戻れるかどうか試しに鏡に手を触れようとしたところ……
「まってよ！私を一人にしないで！」
その声は悲痛に聞こえ、俺は
「悪かった、どこにも行かないからな……悪いが、覚えてる限りで昔のことを教えてくれ」と言ってその場に腰を下ろしたのだった。

紫電の章　その二：サンダーワイバーン（前書き）

晶「あ～今回の話は……」耒「あたしの話だよ～」晶「ネコは？」耒「選手交代！今日からあたしが相方ね？」晶「ふ～ん、そうなんだ……では、ご覧下さい」耒「感想よろしく！」

紫電の章　その二：サンダーワイバーン

八：サンダーワイバーン

目の前に現れたのは紫電を纏った一匹の龍……

「いや、ワイバーンか」

前足のないそいつは立ち上がって吼えることなく俺を見て、唸る。

「……」

俺は回れ右をして……ここから逃げようとしたのだが……

「あれ？」

気がつけば自分がいる場所は……逃げ場のない断崖絶壁に囲まれた四角形の場所だった。

「嘘だろ！」

嘘じゃないのはこの状態を見れば軽々しく理解できるのだが、叫んでおかないとやってられなかった。

がぁぁぁぁぁ！！

ワイバーンは口を開けると……

ひゅぃぃぃぃぃぃ……

なにやらワイバーンの口の前に雷を纏ったエネルギーが収束されていっている。

「ビーム！？これってビームなのか？」

俺はあわてて俺の体調の二倍はあるワイバーンの後ろ側に逃げ込む。とっさにそんなことをされたら狙いをつける暇がないのだろう……口から放たれた紫電は断崖絶壁を通り越して真っ暗な空に映えたのだった。

「……」

言葉も出ない。あんなの食らったら確実に逝っていただろう。

ぐるる……

ワイバーンはこちらに顔を見せ、俺は後ずさる。

「よ、よぉし……やってやろうじゃねぇか！」

俺は爺さんに教えてもらった拳術の構えをとる。爺さんは

「相手のほうが強いと理解できたときは決して防御を取ってはならない」と言っていた。理由を聞くととても全うな……

「そりゃ、避けたほうがいいじゃろうて？」ということを言ってきた。

つまり、今この状況で俺が一回でもワイバーンの攻撃に当たってしまったら終わりということである。

ぐるる……

「ちっ、素手じゃぜってぇ無理だろ……」

指ぬき手袋を装着し、相手を睨みつける。どう考えてもあちらさんのほうが顔がいかつい。

にらみ合ってちょっとすぎ……

ダーン！！

「ん？」

ワイバーンの頭から煙が出ており……そのまま倒れてしまった。

「これでどこまで昏倒してくれるかしら？まぁ、いいか」

後ろに人の気配がしたのでそちらを見ると……

「あ、あんたは……」

「お久しぶり、あの時は不覚を取っちゃったわ」

そこにいたのは藍を助けたときに俺たちを殺そうとしていたお姉さんだった。その手にはあの時とはまた違った銃……ではなく、俗に言うバズーカ砲が握られていた。
「あんた……このワイバーンを殺したのか？」
俺は何も考えられなかったが黙っているとその黒い筒が俺を捉えるのではないかとおもって相手に尋ねた。
「のんのん♪残念ながらあいつらはそう簡単には死なないわよ。私が持っている中で一番強い弾丸をお見舞いしてあげたんだけど……あと三分もすれば目を覚ましちゃうわ」
それならばそのバズーカ砲は一体全体何なのだろうか？
俺の視線に気がついたかどうかはわからないが黒スーツの女性はバズーカ砲を見せる。
「ああ、このバズーカ砲はね～……拠点攻撃用に持ってきたの」
「拠点攻撃用？」
「そ、この……」
気がつけばあたりは雨が降る建設現場に戻っていた。
「……建設現場を潰すためにね」
「潰すって……何のために？」
目の前のワイバーンを彼女は指差す。
「そいつが眠っていたっていう跡を残さないためにね」
危ないから下がってなさいと俺に告げると彼女は無造作にバズーカ砲を乱射……派手な音が断続的に続いて俺の耳がそろそろいかれるんじゃないかというところで彼女の攻撃は止まったのだった。
「さぁて、今度はそこのワイバーンと君の始末ね……やっぱ、この前の恨みがある君からお陀仏♪ばいば～い」
彼女の左手に握られていた拳銃が俺を捉えたが……
バチン！！！
「っ！！」

いきなり彼女は左手を押さえるとその場にうずくまった。それまで固まっていた俺だったのだが……

「……一体これは？」

「やっぱ、少年なんていつでもしとめられたわね……しくじったわ」

女性は立ち上がるとワイバーンが……ああ、存在を忘れていた……気絶していなかった。

ぐるる……

「……そろそろここからお暇しないと……最後にこれ、プレゼントしてあげるわ」

俺に向かって拳銃を投げつける。

「……？」

「銃の使い方、わかるでしょう？そこの引き金を引けば液体の詰まった弾丸が飛び出すわ。そうね、私みたいにうまくあの化け物の額に打ち込めば……あの化け物を無力化できる。あの猫がやったみたいにね……じゃ、また会いましょう！」

黒猫のように彼女は消えてしまい……さて、ここで問題である。獲物のうちの一匹が逃走をはかり、もう一匹は理由はわからないがこの場に居座っている……あなただったらどちらを選ぶだろうか？

ぐるるる……

「世間一般じゃ、後者だろうな……」

俺は落胆しながらも拳銃を唸っているワイバーンに向ける。

逃げ場の少ないこの場所で紫電のワイバーンは再びあの大技を放とうとしている。再び集められていくエネルギーに俺はあせることなくそれを真正面から見据える。

「……あの姉ちゃんが何のためにこの銃を残したかわからないが……」
そろそろ充電が完了するのだろう……俺は狙いをつけてトリガーを引いた。
「とりあえず使わないと勿体ねぇ！！！」
――――
成る程、あの猫がやったようにワイバーンを無力化するか……
「……うう……」
俺の隣にはそろそろ目を覚ますであろう女の子の姿があった。つまり、このように人の姿に変えるということだったのだろう。
「……あれ？人の姿になってる……あ、あんた！何かしてないわよね？」
「してねぇよ……」
したかったけどさ、そろそろ警察が来る。
「とりあえず、説明とか色々と俺がしたいほうだが……ここを離れるぞ。お前、名前は？」
俺はその子の手をとってその場から離れて自転車を置いていた場所まで来たのだが……
「さっきのビームにあたったな……」
黒焦げの何かがそこにはあった。
「耒……」
「あ？」
「名前、聞いたでしょう？あたしの名前は耒（らい）よ。苗字までは知らないけどそう呼ばれてたわ」
「……そうかい、それなら耒……」
俺はもうパトカーがそこまで迫っているのに気がついて林の中に逃げ込んだのだった。
「とりあえず歩いて帰るぞ？今のお前、ぼろぼろの服しか着てないからな」
「……」

無言で一発殴られたが俺の後には素直についてきているようだった。

――――

「晶様！ど、どうしたんですか？ぼろぼろですよ？」

「……ごめん藍、今は事情説明よりも洋子さんに用事が……」

家に帰りついた俺を迎えてくれたのは心配そうな顔をしていた藍だった。俺を迎えに行こうとでもしていたのか傘を手に持っている。

その後、俺は洋子さんに曖昧ながらも耒についての話をして、承諾してもらった。

「とりあえず、耒さんはお風呂に入れてきましたよ」

「ああ、ありがとな……しっかしまぁ、藍みたいな奴がこの世にまだいたとはおもわなかったなぁ」

俺がそういうと彼女はどうとったのか理解できなかったが何かを考える風に呟いた。

「……そうですねぇ、他にもいるかもしれませんよ」

「どうだか」

俺はそういって黒焦げになったシャツをゴミ箱に投げ入れたのだった。

黒田の章　その四（前書き）

晶「さて、黒田の章も半分を超えてしまいました」耒「晶、あたしの出番がないんだけど？」晶「いやぁ、思い返せばいろんなことがありましたね～」耒「晶、あたしの出番がまったくないんだけど？」晶「では皆さん、楽しんでください……ああ、いい忘れていましたがここからほんのちょっとだけシリアスです」耒「ちぇ、無視かよ～」

黒田の章　その四

二十二、

夏華ちゃんが覚えていることは殆ど無かった……と言っていい。

「気がついたら奈津美のすぐ傍にいただけで……鏡に映っているのが奈津美だってわかったぐらいだった」

彼女の記憶はそこからしかない。一番古い記憶は夏華ちゃんが奈津美ちゃんと共に不法侵入を行おうとした一歩手前のところまでだった。

「……そうか」

俺はそう答えるしか出来なかった。

「なぁ、この鏡の世界で夏華ちゃんは動くことが出来るのか？」

「……一応ね」

俺の意図に気がついたのか、彼女は首を振る。

「その工場に行こうと考えてるんでしょ？さっき約束したばかりじゃないの？」

「彼女が寝ている間に行けばいいじゃないのか？で、起きる前には帰ってくるってことにしておけばいいだろ？手紙だってきちんと書けばいいんだし……」

俺は夏華ちゃんを説得するために考えることにしたのだが……

「私の姿、見たでしょ？あんな化け物がこの世界にはまだいるかもしれないでしょう？私のような化け物が……久しぶりに出来た友達を連れて行ったらと聞いたら奈津美はどんな反応をするとおもうの！」

「あんたは化け物なんかじゃない！！！！」

「！？」

俺は知らず知らずのうちに怒鳴っていた。そのときに何故かあの三人の顔が浮かんだ。

「……こんなにも妹のことを考えているあんたが化け物なんかじゃないのはあんたの妹である奈津美ちゃんが知ってるだろ？」
「でも……」
「とりあえず、手紙を書いてそこに置いとく。それに、夏華ちゃんはやっぱりここにいたほうがいいと思うんだ。彼女……奈津美ちゃんの傍にいてやってくれ」
俺は鏡の中にある扉に手をかける。
「本当にいくの？え～と、名前は……」
「晶だ、白瀬晶。あんたら二人の家庭教師だ。教師の名前を忘れんなよ」
俺はそういって彼女以外人間がいないであろうこの世界に躍り出ることとなったのだった。

――――――

「勇んで出てきたのはいいとして……」
俺は左右が逆になっている世界に一人いることに対して疑問を抱き始めていた。俺と夏華ちゃん以外他には誰かいないのか？
時計なんて持ってないし、未だに制服だし……風呂にも入っていない。とりあえず急いでこの世界から出るかどうかしないといけない気がしてきたのだが、夏華ちゃん一人だけをこの世界に閉じ込めたままにして帰るのは気が引ける。
「だから、だからなんとしてでも手がかりが欲しい……」
俺の心境はそんなところだ。
向かうべき場所はただ一つ、あの廃工場だ。あそこにはやっぱり別の何かが存在しているのだ。

――――――

「……なるほどね」
廃工場が目の前にあるのだが、そこは廃工場なんかではなかった。今も中で作業をしているのが一目でわかる。建物に備え付けられている煙突からは煙が吹き出ているのだ。
「警備員はいねぇな……」

あっちの世界ではいた警備員がこちらではいない。罠かともおもったのだが、思えばこの世界にやってきてあった人物は夏華ちゃんだけだ。警備員が必要ないとおもっているのだろう。
「さぁて、何かお宝を引き当てられればいいんだけどな……」
俺はそのまま歩き、扉をくぐって工場内にはいったのだった。

――――

工場内は様変わりしており、工場というよりもこれはどう見ても生体実験を行うような場所だった。
巨大なガラス管に入っている謎の生命体に胎児のようなもの……
……それには液体が流し込まれたりしている。
床には書類のようなものが散乱しており、その一つを手にとって目を通してみる。
「……細胞移植？ウィルス依存？」
さっぱりだ。
そんな理数関係の言葉を出されたって俺は文系派だから理解できん。ということでこれまた別の書類を手にとって見る。
「……プロト01脱走？プロト02始末終了……プロト99始末段階で脱走……」
どうやらここでは生体実験を行っているのは揺るぎのない事実のようだ。
「つまり、ここじゃ……」
工場内で見たものを思い出す。そう、そこにいたのは……
「……おやおや、ここまで来るとはね……」
「！？」
急いで声のしたほうを見ると銃弾が飛んできたのだろう、俺の頬に赤い線が引かれる。
「っ……あんたは……」
何度か目にしたことがある黒スーツのお姉さんだった。
「しっかし、ここまで来るとはね？どうやってこっちの世界に来たの？」

その手に握られていたものは彼女がいつも使っていた拳銃。
「……事故でこっちにきた」
俺は素直に答える。嘘は言っていない。
「へぇ、やっぱり……君はその資格があるんだね～？」
心から面白そうに笑っているのだが、その手に握られている拳銃や、彼女が発しているオーラのようなものは緊迫感をいっそうに高めるものだった。
「一発、うたれてみたい？きっと面白いとおもうよ？」
笑いながら俺の額へと拳銃を向ける。
「……撃って構わないが、一つだけ聞きたいことがある」
「それより、目上の人に話すときは敬語で話せって父ちゃん母ちゃんにいわれなかった？」
「……残念ながら父さん母さんの顔なんて知らない……だが、確かにそう別の人にいわれたことはある」
あれは洋子さんからよく言われていたことだ。
「……以前、この世界に一人の女の子が来ませんでしたか？」
俺がそういうと相手は首をかしげる。
「女の子……何？あの藍色の翼龍の女の子？」
「いや、違う」
「ふぅん？違う……紫電の翼龍の耒ちゃんだっけ？」
いまさら何故この人物が名前を知っているのか知らんが今はどうでもいい。
「もっと幼かったときの話だから……名前は夏華っていう人です」
敬語を話すことなんて殆ど無いので面倒であるが、ここで相手のご機嫌を損ねたら終わってしまうだろう。
俺のいった名前に心当たりがあったのか相手は頷いた。
「まったく、君はとてもそっち系に好かれる体質か何か……惹かれあうのかな？まぁ、その子は失敗作だから構わないけどさ」
「失敗作だ……と？」

目の前が真っ赤に染まる。俺は拳銃を向けられているのを気にせずに相手につっこんでいくが……相手はそれをあっさりと避ける。
「そんなに怒らない怒らない……怒った君の攻撃なんて一直線だからかわしやすいよ」
足をかけられて俺は無様に転がった。
「その子も助けたいんだ……いや、ここにいるってことはもう助けた後かな？後はあの子をどうやってもとの世界に戻すか……そんなところだよねぇ？」
ニヤニヤとそんな笑いを俺に向けながら彼女は拳銃をしまう。
「……今日こそ君をおもちゃにしようとおもったんだけどやめた。失敗作が絡んでるんなら科学者として心が痛むわぁ……」
ぜんぜん痛んでいませんという表情で彼女は俺を見下ろしていたのだった。

黒田の章　その五（前書き）

耒「え～今回、晶がマゾであるということが判明しちゃいます」晶「しちゃいません」耒「認めなさいよ、楽になれるわ」晶「楽になるわけねぇだろ？まったく、耒の頭の中身はきっと空っぽなんだろうなぁ？」耒「む、晶よりは詰まっているもん」晶「お前が詰まってるのは血管じゃないのか？」

黒田の章　その五

二十三、
「ぐぅ……」
目の前にいる黒スーツの女性は俺の背中に足を乗せる。
「どう？この屈辱的な感じは？」
「……あいにく、こんなことじゃ屈辱的だって感じないんでね……」
「へぇ、じゃあ……いやいや、興に乗っちゃったら面白くないわ……あの子、助けたいんでしょ？」
彼女は俺の横腹をける。
「ぐ……」
「どう？妹思いのあの女の子、助けてあげたいんでしょ？」
「……助けてあげたい」
「じゃ、交換条件……」
来るだろうと予想していた展開は必然的に俺に降りかかってきたのだった。
「……どうする？聞く？聞いちゃったら絶対にしなきゃいけないけど？」
「聴く」
俺が即答すると頷いた。
「うん、こういうのが奴隷に欲しいとおもってたんだよなぁ～」
「俺があんたの奴隷になればあの子を助けてくれるのか？」
「いやいや、そんな酷な要求はしないわ……そうねぇ、それなら……」
彼女はちょっと考え込むとにやっと笑った。
「私のこと、お姉ちゃんと呼びなさい」
「……は？」
俺は踏まれているのにも関わらず上を見上げる。

「お姉ちゃんよ、お姉ちゃん。約束するって言うのならあの子を助けてあげる方法を教えてあげるわ」
「……」
固まっている俺の横腹に一撃が炸裂する。
「ぐっ……」
「まったく、愚弟ね！お姉ちゃんの言うことはちゃんと聞きなさい！よろしくて？」
「りょ、了解しました……お姉ちゃん」
何とか立ち上がって俺は黒スーツの女性を見る。
「……」
「ほかに何か聞くことは？」
「何で、何で……そんなくだらないこと……ぐぅ……」
俺の腹に強烈な一撃が叩き込まれる。相手はにこりと笑って俺に告げる。
「……簡単なことよ、弟というものは永遠の奴隷よ！！」
「……そうだったのか……ぐふっ！！」
再び俺の腹にけりが飛んでくる。
「そこは『なんでやねんっ！』ってつっこむところでしょ？まだ甘ちゃんね……ほら、さっさとそこに隠れてる女の子と一緒にもとの世界に帰りなさい。ここにいたらまたきれいなお姉さんにあっちゃうわよ？」
お姉ちゃんは……にやりと笑うとその視線を一つのガラス管へと向ける……
「な、夏華ちゃん……」
「あ、晶先生……」
俺は無様に肩膝をついている状態であり、そんな俺のもとへ夏華ちゃんは駆け寄ってきてくれていた。
「麗しいね～愚弟よ？」
「く……お姉ちゃん、どうやったらこの世界から夏華ちゃんを出してあげればいいんだ？」

俺は夏華ちゃんに支えてもらいながらもふらふらと立ち上がってお姉ちゃんを見る。
「まったく、馬鹿ね……ま、だから愚弟って言われるんだけど……そんなんじゃ、立派な人間にはなれないわよ？心配しちゃうわ」
「……く」
なぜだか、本当の姉だとおもってしまった自分が恥ずかしい。
「……あんたはこの世界からすぐに戻れる……それなら、そこの彼女を抱きしめて出ちゃえばいいじゃない？」
「……そんな簡単なことで？」
「どうかしらねぇ？あんたは簡単なことだとおもってるけど……何度もこの世界から出ようとしていたそこの彼女にとっては恐いことかもよ？」
そういってお姉ちゃんは夏華ちゃんのほうを見る。
「……」
彼女の体は震えており、目の焦点があっていない。
「……その子、たまにここにやってきては何かやらかそうとしてたのよ。記憶がないなんて嘘だけど……いえないようにはしてるからね……ま、愚弟の知り合いの妹さんかなんか知らないけど……もう用事がないからかえっていいわよ」
「……く……」
「あら？そんな生意気な顔すると、お仕置きするわよ？」
その表情は冗談を言ってそうな顔だが、お姉ちゃんは拳銃をちらつかせる。
「素直に従わないっていうなら四肢を打ち抜いてもいいわよ？どうするの？」
目の焦点があっていない夏華ちゃんは答えない。それを確認することなく、お姉ちゃんは俺を見てくる。
「……わかった、従う」
「よろしい、それじゃあ……この鏡を使いなさい？」

そういっておくにあった鏡を指差す。
「……ありがとう、お姉ちゃん」
俺は夏華ちゃんを引きずるようにしてその鏡の前に立つ。
「いいわよ……けどね、もうここに来ないほうがいいわ？次、確実に飲み込まれるのは……」
お姉ちゃんは俺の背中を思い切り押す。
「……間違いなく晶だから……」

――――

「……ん？」
気がつけば、朝だった……というのは良くあることで、ここはどこだろうかと周りを眺めてみると……
「廃工場か……」
埃っぽい床に寝転がっている状態で、その上には俺に抱きしめられている夏華ちゃんがいる。
「ん？」
その上には俺に抱きしめられている夏華ちゃんがいる。
「……」
その上には俺に抱きしめられている夏華ちゃんがいる→俺が夏華ちゃんを抱きしめている。
「……はぁ、夏華ちゃんが寝ている状態でよかった」
夏華ちゃんをどかして俺は立ち上がろうとしたのだが……

ぱしゃり

「うを？」
「愚弟、親友の妹を襲うのはどうかとおもうぞ、お姉ちゃんとしては……」
そこにいたのはおねえちゃんだった。
「え？何でここに？」
「そりゃあ、あそこから戻ってくるにはここしかないからね……

ああ、愚弟は違う。愚弟は鏡に違うものが映っているところならどこでもいけるみたいだけどね」
そういってお姉ちゃんは立ち上がる。
「……私のこと、ばらしたらこの写真三人に渡しとくわ」
「……」
そういって彼女は姿を消し、残されたのは俺と夏華ちゃんだけ。
その後、俺は眠っている夏華ちゃんを背負い、埃を踏みしめたのだった。

黒田の章　その六（前書き）

晶「お、黒田の章も終わっちゃったな……」ネコ「そうだな、いい話だった……」晶「ネコ！？どこに行ってたんだ？」ネコ「うむ、トイレの帰りに暴漢に襲われてな……ネコパンチで撃退してきた」晶「マジかよ……」

黒田の章　その六

二十四、

廃工場を抜けるとそこには警備員が立っていた。

「おや？どうやってここに入ってきたんだい？それとも先ほど出て行った研究員のご兄弟か何か？」

「ええ、まぁ……彼女の弟です」

「ああ、成る程……気をつけて帰るんだよ？」

警備員さんはそういって俺たち二人についてそれ以上詳しく聞いてくるようなことはなかった。黒田に連絡しようとおもって携帯を出そうとしたのだがやめた。夏華ちゃんが邪魔をしてポケットから取り出すことが出来ないからだ。

「……やっぱ、あるもんはあるんだなぁ……」

背中に当たるやわらかい何かを意識しないように俺は動かない夏華ちゃんに話しかける。

「……」

当然、彼女から返事はないので俺は今日一日しか会うことのないだろう背中の人物に話しかけ続けることにした。

「……もうちょっと素直になれよ、そうしたらもてるぜ、きっと……」

「……」

「あとさ、あんまり威圧的な態度はとらないでくれよ？あとは……」

――――

俺は何とか黒田の家まで戻ってくることが出来た。すれ違う人は朝の出勤時間に間に合うように急いでいる人たちが多々だった。

「……ああ、疲れた……」

家の前でインターホンを押す。

「やぁ、白瀬……」

再び穴から姿を現す黒田。
「……黒田、俺のバッグとってきてくれ……ほら、その代わり……何年前かの忘れ物だ……」
「お……」
いつも飄々とした態度を崩さない黒田だったが、俺の背中から夏華ちゃんが落ちたのを見ると一瞬だけ驚いた顔をみた。
「まったく、君って奴は時折すごいね」
「俺は普段からすごい奴だ」
「そうかい……はい、鞄……今日はもう帰るのかい？」
「ああ、家族水入らずって奴だ。残った休日は家族で過ごすといい……じゃあな」
俺は地についている学生鞄を拾い上げ、少しだけついてしまった土を払ってその場を去ることにしたのだった。
「……白瀬、いつか君を再びこの家に誘いたいとおもうよ」
「そうかい、それは楽しみにしておくぜ？だが、今度はきちんと玄関から入りたいからそこのところはよろしくな」
結局、あの玄関を開けたらどうなるのかは本当のところわからなかった。

――――

「ああ、暇だな……」
休日中の家庭教師のはずだったのだが、二日目以降は確実に暇となっていた。あの三人と洋子さんは未だに帰ってこない……そりゃそうだ、あの人たちが帰ってくるのは連休の一番最後……学校から連休中に終わらせて置くようにといわれた宿題などには未だに手を出していない。そういうのをする気分ではないのだ。
「暇だな……」
そう呟いた俺のためか、どうかは知らないが……突如として携帯電話が勝手に鳴り出した。
「……はい、もしもし？」
俺は不機嫌声を惜しげもなく披露しながら相手の困惑を誘おうと

したのだが……いかんせん、相手がぜんぜん通用しそうにない相手だった。
『やぁ、白瀬……妹の命の恩人として僕らの家族は君を招待したいんだが……時間はあるかな？この前言っただろ？』
ああ、そういえばそんなことあったなぁ……まさか、こんなに早くそうなるとはおもわなかったのだが……俺はその質問に対して少々考える時間が必要だった。
「……あいにく、そっちの家庭教師の仕事を追えた後に急遽用事が入っちまってな……連休に休みはねぇよ……それより、奈津美ちゃんの成績はどうだった？」
俺がそう尋ねると相手側の受け答え人が変わったらしい。
『……もしもし？晶さんですか？』
「ああ、その声は……奈津美ちゃんか……テスト、どうだった？」
『約束どおり百点ですよ……ありがとうございました』
それを聞いて安心した……もっとも、何も教えちゃいねぇが……
『百点をとれたのは晶さんのおかげです……それで、お母様が給料を渡したいと……』
「いや、俺は何も教えちゃいない。だから、そのお金でどこかに遊びにでも行ってくださいと伝えておいてくれ……じゃ、そろそろ……」
電話口から
「お兄様、晶さんはお金が大好きだっていってませんでした？」という声が聞こえてくる。あいつ、奈津美ちゃんになんてことを教えてるんだ！
『ちょっと、かわって……もしもし、晶先生？』
今度は夏華ちゃんのようだ……つくづく、奴の携帯電話は人に渡りやすいという欠点を持っているのだろうか？それとも、あいつは兄でありながら尻に敷かれているのどちらかに違いない。

「何だ、夏華ちゃんか……俺に何か用か？ところで、あれから体に変化とかは？」
『大丈夫よ……それでさ……あのときの……お礼がしたいんだ。こっちに戻ってこれたのは晶先生のおかげだし……』
やっぱ、それか……何度もいうが……
「俺がしたことは何もない……夏華ちゃんが戻りたいとおもってたからこっちに戻ってこれたんだろ？じゃ、悪いけど俺、用事があるから」
俺はそういって携帯電話を切って、ついでに電話の電源も切ったのだった。
「……暇だな～」
俺は天井を見つめてそんなことを呟く。
自分でも何故、さっきのような行動をとったのか理解できなかったのだが……俺はそうするのが一番だとおもった。だって、まだ彼女たち二人が実際にあって一週間もたっていないのだ……しゃべりたいことも……ここで、俺は疑問を覚えた。さて、久しぶりに会った二人がすんなりと会話をしていけるだろうか？今までいなかった……新でいたことになっていた家族が戻ってきたら接しづらいのではなかろうか？
俺は要らぬおせっかいだとは知っていたが、携帯の電源をつけ、先ほど電話をかけてきた奴の番号をプッシュ。
「……あ、もしもし黒田か？やっぱ、今からお前の家に行くよ。今日の分の用事、全部キャンセルしておいたからな」
「……まったく、心変わりが早いのは相変わらずだね……で、相手側の人にはちゃんと謝っておいたのかい？」
少々笑みを含ませながらしゃべっているのだろう、奴の口調はさも面白そうに聞こえてきた。
「ほっとけ、俺が一番いいとおもうやり方にいちいち口を挟むなよ？……ああ、歓迎のせきは出来ればお前の二人の妹の間に座りたい……両方とも美人さんだからな」

いっていて頬が熱くなってくるのを感じるのだが、こういうものはあれだ、いってしまえば意外とすっきりするものに違いない。
「……二人が了承したら構わないよ。あと、あの三人が怒り狂っても知らないからね？……準備はもう出来てるからいつ来てくれたって構わない……残念ながら玄関からはやっぱり入れそうにないけどね」
苦笑気味に……だが、嬉しそうに黒田はそういうと電話を切ったのだった。
「さて、それじゃあ俺も行きますかね～」
きっと、久しぶりに出会ったら困惑するだろう。彼女たちに詳しいこともしゃべらないといけないし、まぁ、黒谷はしゃべらなくてもいいだろうが……とりあえず、俺がするべきことはただ一つ、彼女たちの間の席に座ることだろう。
俺は立ち上がって玄関を開けたのだった。

晶の章　その一（前書き）

晶「お、とうとう最後の章だな～」ネコ「ああ、長かったな……
…途中でくじけるようなことを呟いていたが……これもひとえに
感想をくれた人たちのおかげだな」晶「おいおい、読んでくれた全
員のおかげだろ？」ネコ「ふむ、それも一理あるかもしれないが…
……不特定多数の人たちには名前がわからないから御礼のしようが
ないのも事実だと私はおもうぞ？」晶「まぁ、そうっちゃそうだが
……さて、最終章の予定ですが……この章は比較的シリアス
……」ネコ「と、晶の過去や藍たちが生み出された？話になりま
す」

晶の章　その一

二十五、
連休最後……
「遅いな」
未だにあの三人は帰ってきていない。もう帰ってきていてもいい時間なのに家には俺一人が座っていた。
「……」
俺は電話が来るのを待っていて……
ＰＬＬＬＬ……

「お、やっと……」
携帯に手を伸ばそうとして、やめた。表示される電話番号は知らないところからだったのだ。
「……もしもし？」
『久しぶり、愚弟』
「……お姉ちゃん？」
「よろしい、言いつけ護ってるみたいね」
愉快そうに笑って聞こえてくるその声はあの女性で……俺はまさかを考えてしまった。
「今、あの三人家にいる？」
「いや、いないけど……」
俺は窓の外を見て……

「そうだよねぇ、だって、私がつれてっちゃったから」
「！？」
そこにいたのはお姉ちゃん、紛れもなくあの女性だ。そして、彼

女はにやりと笑った。
「愚弟にも収集が来てる、どう？あの工場にもう一回来ない？」
俺は電話を切ることなく、耳に当てたままで目の前の相手に話しかける。
「……もういかなくていいっていってませんでした？」
「私、うそつきなんだ……そう、嘘つくのが大好きなのよ」
そういって俺に手をあげると彼女は去っていった。
「……いくしかないよなぁ……」
俺は三人を迎えに行くべく、玄関を出たのだった。
――――――
「やぁ、どこに行くんだい？」
「黒田……」
庭には黒田がいつものような面をして立っていた。
「……どこか行くのかい？」
再び、似たような聞き方をしてくる。
「ああ、ちょっと出かけにな……」
「そうかい？うちの妹たちが君を呼んできて欲しいって言ってたんだ。ケーキを焼いたから毒見をして欲しいと……」
「そんなこと言ってたら妹にけられるぞ？」
まったく、その通りだよと奴は笑って答える。
「……行くのなら止めはしないけど……」
黒田は俺に背を向けてポツリと呟いた。
「……今の君、死相が出てるよ。事故にでもあわないようにしないとね」
――――――
「おや、君は弟さんじゃないかな？どうしたんだい？」
警備員さんが俺の姿を捉えたのか、そんなことを聞いてくる。
「……ええと、お姉ちゃんにここに来るようにといわれてきたんですけど……」
「ほぉ、お姉ちゃんにはなんていわれたか覚えているかな？」

まるで小学生相手に使うような言葉遣いで俺に話しかけてくる。
俺は思い出しながら……警備員さんのおじさんに答えた。
「……たしか『あの工場にもう一度来ない？』って言っていたと……」
そういうと相手は微笑む。
「残念ながらここは廃工場……工場ではないよ、君のお姉さんが言ったのはここのことじゃないと私はおもうね。彼女はここにはきていないから」
やんわりと拒絶されて俺はあせりを覚えていた。
「おやおや、君は死相が出てるね……一度自分の顔を鏡で確認するといいよ」
手鏡を渡され、俺はそれを覗き込み……

――――――

「やぁ、遅かったわね、愚弟」
「……お姉ちゃん」
気がつけばそこはあの場所、つい最近に来たことのある書類の散乱した工場というよりは生体実験室のようなところだった。
「……とりあえず、あの三人は？」
俺はあの三人が無事な姿が見たかった。たとえ、それが怪我をしていても無事ならそれでよかった。
「……いないわよ、ここには……」
「え？」

「言ったでしょ、私は嘘をつくのが好きなのよ」

「……」

――――――

三月二日、私よりも弟に興味を抱いた父は躊躇なく泣き叫ぶ弟に薬を投与した。

弟は動かなくなり、静かに眠ったようになった。
私はそれを影から見ており、震えるだけだった。
父はこちらを向いた。
「お前は駄目だ、この子で試す」
父の見解は正しかった、弟ははれて実験台第一号となった。
三月四日、あれから二日、私の弟はガラス管の中で動きもせずに、ただ、液体にひたされて浮かんでいた。
名前を呼ぶと目を開け、私のことがわかるのか笑ってくれた。
「何をしている？」
父が怒った顔をしている。私はその場を後にする。それは何故か……
別の実験体の確認をするためだ。
「……そろそろ移し変えないといけない」
父の助手をしている私より少しだけ年上の女性が白猫を見て呟く。
あの猫はもう長くはないことをあの女性は知っているのだろう。
そして、私の弟もあのガラス管の中では……

私がすることはただ一つ、おじいちゃんに渡すしか……

晶の章　その二（前書き）

晶「おれさぁ、おもうことがあるんだけど……」ネコ「何だ、少年？」晶「きっと、登場回数が多いのネコだとおもうんだ」ネコ「そうか？」晶「ここでもめちゃくちゃ登場してるからな……」ネコ「知らないのか？真の主人公はこの私だ」晶「！？」ネコ「今日から私は主人公だ！」

晶の章　その二

二十六、

「……」

立ち尽くす俺の顔に浮かんでいるものは安堵か、落胆か……

「ここに来てよかった？」

「……いや」

どうやら、お姉ちゃんの目的は俺だったようだ。彼女は俺に近づくことなく、手にある資料を読み始める。

「白瀬晶、ここでの呼び名はプロト０１……三月五日、何者かの手引きによって消息を絶った……それがあなた」

「……」

「覚えてない？」

「覚えてるわけ……ない」

「そうよね、あのときのあなたはちょっとまだ自覚できるというレベルに達してなかったから……」

何が面白いのか、彼女はにやける。

「あなたの家族、父も母もろくな奴なんていなかったわ。家族なんて関係ない、何かにただ、没頭していた……挙句に自らが生み出した実験の結果を体に投与して早死に。知ってた？あんたの家族、両親ともあんたより先に死んでるのよ」

それは知ってるさ、爺さんが言ってたからな。

「……交通事故だろ？」

「ええ、まぁ、そんなもんだけど……裏じゃ違うわ、あれは間違いなく薬の副作用で死んでしまったのよ。だって、事故を起こした車はあったんだけど中に乗っていた人間の姿がどこにも見当たらないなんて考えられないもの……」

そういってお姉ちゃんは椅子に腰掛ける。

「……投与した薬は以前はウィルスだったけど……その時点

で既に完成してたわ。あなたの両親は龍になって天にあがり……
……消滅したといっていいわね」
　それが悲しいのかどうか、既に両親がいない……というか、両親の顔を覚えていない俺としてはなんとも言いがたい。
「管理者を失った研究施設は廃れ、保管されていた薬は誰かの手によって砕け、研究所にいた被検体はまるで地獄絵図のようになり、閉鎖。そこにいたプロト01の残されたたった一人の肉親もその薬に感染……近くにあった小さな病院も見事に駄目になったわ。そこじゃ、小児科が主だったから……ちょうどいい研究結果が手にはいったって上の人たちは言ってたわ」
　関係ないとばかりに書類を放り投げて別の書類を手に取る。
「……お姉ちゃん……藍たちがそれだって言いたいのか？」
「……さぁ？それはあなたの想像しだいね。ついでに言うならこの被検体に選ばれた連中はすべて戸籍上死んでいることになってるわ。もとより、当時じゃ治らないような病気にかかっている連中に薬を投与してきたからね」
　まったく、考えられないわよね～と彼女は呟く。
「……話は戻るけど、薬の被害にあった肉親は人とは思えない力を手にいれ、孤独の道を進むことにしたわ……もう、友達と笑えるほど自分が普通の人間じゃないって理解できたからね……けど、弟はそういう生活をして欲しいとおもってた……コネとか色々と使って主に数学なんかを弟に教えてきたわ」
「……」
「……で、ある日……生き残っていたプロト01を狙っているような以前の研究員をすべて始末し終えた姉はとあることに気がつく……そのプロト01、もう寿命が長くないのよ……」
　俺は黙りこくるしかなかった。
「……なんでかわかる？」
「さぁ？」
「……薬を体に投与していた連中と好きでつるんでたからね…

……抑えられていた薬が徐々に体内にしみこみ始めたってところでしょう……プロト01は他のプロトタイプと違って他人の薬を吸っていく力を持ってたわ……より、完全体になるためにね」
「完全体？」
「そう、完全体……もともと、この研究所では……」
そういって何も入っていないガラス管を指差す。
「……龍を作ろうとしていたからね」
「龍だって？」
俺はきっと馬鹿みたいな顔をしているだろうな。
「……そうよ、よくはしらないけど、百年前にはいたっていってたわ。私が龍について聞かされたことは……その者は自然の力を完全に操り、人に化身し、代々とある家系を護ってきたらしいわ」
「……」
「そんなの信用できないって顔してるわね？まぁ、そうなんだけど……一ついいこと教えてあげるわ。うちの家系は何故か、その龍の遺伝子を持っててね……いよいよ駄目だとおもわれたプロトタイプ三体に投与したそうよ？そしたら、少々ながらも龍に近づくことが出来たのよ……薬の成分も体内で生成し始めたからね」
ま、所詮は失敗作だけどねと呟いた。彼女が言っていた失敗作という意味は……龍になれなかったワイバーンのことだろう。
「……さて、ここで質問、その三体をプロト01の近くに置くと……どうなるでしょう？与えられた条件は……ま、愚弟だから必要よね？」
にやりと笑うと彼女は拳銃に弾丸をこめ始める。
「……まだ、拳銃は持ってるかしら？」
「……一応」
護身用として弾丸そのままで懐にしのびこませている。さすがに学校のときはもって言ったりはしていないが……
「安心して、あの拳銃は人を殺す銃じゃないし、鉛弾なんて装填で

きやしないわ」
　それは良かった……でも、それじゃ護身用でもなんでもないな……
「……あの弾にこめられているのはさしずめ、あの両親が作り出したものが厄介以外の何者でもないウィルスなら……プロト０１の姉が弟を助けるために生み出した最高のワクチンってところね……もっとも、薬が体中を駆け回っている……」
　お姉ちゃんは躊躇なく俺の額に拳銃を向ける。
「……あんたに通用するかはわからないけどね！」
――――――
三月五日、プロト０１が脱走。何者かが脱走を手引きしたものとおもわれ、研究員である私たち全員が責任を問われる。
この研究所の責任者である父と母は車でプロト０１を探しに向かった。やはり、私の考えることなどお見通しなのだろう……だが、私もそこまで馬鹿ではない。
あのあせった父と母の顔、生まれてはじめてみた……そして、おもう。あの二人も人間だったのだと……もっとも、あの子はそういう両親の顔など見たこともないだろうが……手は打っておいた。生まれるだけで、私をあの薬から護ってくれた弟を……むざむざ両親に渡す気はない。
三月七日、今日は両親の葬式だ。葬式にはおじいちゃんに抱かれている弟が私の姿を見つけると笑ってくれた……だが、いずれ私のことは忘れるだろう……そして、私を姉だと理解してくれるのはこれで最後だ。
――――――
三月五日、あれから数十年の月日が過ぎた……弟も無邪気に私に質問したりすることもまれにあり、成長した姿を見るのは楽しい

ことだとおもったが……最近張っていたもと研究員の成れの果ての白猫が弟に近づいた。

やはり、いの一番にあの白猫をしとめるべきだっただろう……

あの猫はあの子にこれ以上の何を求めるのだ？

このままではいけないと私はおもい、二人の後を追う……

晶の章　その三（前書き）

晶「……」ネコ「どうした、押し黙って？」晶「武士道と書いてなんと読めるでしょう？」ネコ「ブシロードだろ？外国人はそう呼ぶだろうな」晶「うん、正解」ネコ「この問題の意味は？」晶「牽制」

晶の章　その三

二十七、

「……」

俺の頭に風穴が開いたのか……額からは赤い液体が俺の視界を赤くしていく。

「……痛いかもしれないけど、これからがんばって……」

近くにはお姉ちゃんが……いや、姉さんが座っており、俺を抱きしめてくれていた。

「……薬はあなたを殺しにかかる……あなたは耐えるの、晶……あなたはとても強い子だからね？」

姉さんは笑って俺を抱きしめてくれる。きっと、俺の母さんもこんな人だったのかもしれない……いや、冷たい人だと姉さんは言っていたな。

俺の意識は確実に遠のいていく。

――――――

三月五日、続き……弟は見事に私を騙して一匹の失敗作を助け出した。

「……まったく、あなたにはやられたわ」

「私としてもまだ君が薬にやられていないほうが驚きだ」

「なめた口聞くと、打ち抜くわよ？」

「……どういうマジックを使ったんだ？」

「ま、あの弟のおかげね」

私がそういうと白猫は
「そうか」と呟いてどこかにいなくなったのだった。
四月七日……弟が通っている学校がどこか他の学校と違うとおもったのは入学式とかが四月にないということだろう。めちゃくちゃだ、この学校は……

「やぁ、またあったな」
「まったく、白猫風情が私に何のよう？」
「あの少年、非常に優秀じゃないか？」
「まぁね、私の弟だもの……あんた、ちょっかい出すと撃つわよ？」
猫は首をすくめて
「さすがにこの姿ではな……」と呟く。
「これから旅に出ようとおもう……」
「へぇ？死にに行くの？」
「違う、君らの祖父と世界を回るんだ」
「……嘘ばっか……今度は白衣を着て頭に猫耳つけないとあの弟はあんただって気がつかないわよ」
猫は
「私は猫だ、猫耳をつける必要はない」と答えて去っていった。

四月二十日、私だけが気がついている……薬の反応は以前より強くなっている。あの両親が龍を作ろうとした本当の理由……

私を助けようとしていた、そのくらいは知っている。

そのためには弟の犠牲が必要だった。

私はその弟のデータがあったおかげでワクチンを作ることに成功した。

いずれ、弟に投与しなくてはいけない。あの弟の周りにいる三人が完璧に龍に化身できるようになる前に……

四月二十五日、この日記がめちゃくちゃなのはしょうがない。日にち、時間……そういったものが壊れているのが手に取るようにわかる。

私の記憶は多かれ少なかれ、消えてしまうだろう……

だが、その前に確実に……

この記憶の塊をあの子に渡しておかないと……

たとえ、あの子が私のことを忘れてしまったとしても……

――――――

「んぁ？」

目が覚めるとそこは病室だった……ということは良くある話だが、今、俺の目の前にあるのは汚らしい天井だけだ。

「……あれ？」
左目の感覚が無いのはなぜだろうか……とおもったらそこには包帯が巻かれていた……そりゃそうだ、こんなものがあったら左目でここを確認することは出来ない。
「晶様！」
目の前には藍色の髪をした女の子……それに、金髪に緑色の髪の毛の女の子がいる。
「晶……心配したわよ」
「晶君、逝ってしまったと正直おもってました」
心底ほっとしたようにそんなことをつぶやく二人組みに俺は尋ねる。
「……一体全体、俺は何でここで寝てるんだ？」
徐々に記憶を思い出していくのだが……思い出せないものもある。ガラス管が頭の中の記憶にちらほらと姿を見せる。
「この家の前で血だらけになって倒れていたんです。それがもう一週間ほど前ですから……」
一週間前だと？
「……一つ、質問……いいか？何であの夜お前たちかえってくるのが遅かったんだ？」
「ええと、遅くなるように連絡をしようとおもったんですけど……話中だったんですよ、晶様の携帯」
俺は何かを思い出そうとしていたのだが、それが何か思い出すことが出来ない。
「また何か変なことに巻き込まれているのではないかと私、おもってあわてて戻ってきたんです」
そこまで言って耒が続ける。
「だけどさ、行方不明……黒田はどこかに行くのを見たって言ってたけどね」
「黒田さんたち兄妹も捜索を手伝ってくれたんですよ」
「……そうか、それならお礼を言わないといけないだろうな…

……」
俺は立ち上がる。
「お？」
立ち上がった拍子に落ちた一冊の汚れた日記帳を拾い上げる。
「……これ、誰のだ？」
「え？さぁ？」
俺はその日記帳の名前を見て、急いで玄関を飛び出した。その日記帳に書かれている字は
「白瀬晶子」だった。

晶の章　その四（前書き）

晶「実はさ、この話で本編は終わりなのだよ、ネコさん」ネコ「成る程、それはご苦労だったな……だが、まだ完結扱いはされてないぞ？」晶「そりゃ、まだ凪さんとの出会いが出てないからな……次回ぐらいに出るとおもうぞ？そこで、延命処置のための手段をとりたいとおもう」ネコ「どういう手段だ？」晶「評価とか感想とかメッセージとかが来たらちょっとだけでも話を進めたいんだよ」ネコ「成る程……読者しだいというわけだな？」晶「ま、次の話を更新する間だけってことでね……続くかどうかの発表は次の前書きで！」

晶の章　その四

二十八、

寝ている間、俺は知らないはずの親父から、言われた。

「お前は犠牲になるんじゃない、晶子を助ける存在となるのだ」

寝ている間、俺は知らないはずの母さんから、言われた。

「私たちはもういないけど、二人に家を用意しているわ……詳しくは私のお父さんにね」

俺は走る……後ろからはしってついてきている三人に事情を説明しながら、あの廃工場へと……

――――――

「ここは私がもういるべき場所じゃないってことはわかってるわ」

私は今、何の変哲もない廃れた工場を眺めている。

この工場を所有していたあの工場は私が潰した。

私が所属していた組織も、関係している組織もすべて根絶やしにしてきた。

「おやおや、晶子さんじゃないか？弟さんがこの前ここに来ましたよ」

「……もう、ここに来るような人は誰もいないと思いますよ？」

「ああ、そうだろうね……私もそうおもってるよ」

警備員は私の言ったことに頷いて帽子を脱ぐ。

「だが……私はここでずっと見張っていないといけないのさ。なぜだかわかるかい？」

そんなものは考えるまでもない。

「……黒田夏華、あなたがあちらの実験室に送り込んだ……

もう二度とそんなことにならないようにでしょう？」
「さすが、晶子さんだ……これからどうするんだい？」
邪気のかけらもないような笑顔でそんなことを聞いてくる。
「さぁ？私がやってきたことは全部終わっちゃったから……長かったこの人生……終わらせるのも面白いとおもってるわ」
「さぁて、それはどうかな？面白くはないとおもうけどねぇ？」
警備員さんは意味深に笑うと工場外に視線を送ったのだった。

――――――

「ぜぇ……ぜぇ……姉さん！」
「晶……そう、薬に打ち勝ったのね？それは良かった……というか、そうしないと私がしてたことが何一つとして意味なかったってことになってたわ」
少しだけ影を落としたような表情を見せる自分の姉に俺は尋ねる。
「……父さん母さんが家があるって」
「あの二人、やっぱり出てきたのね……まったく、この世界に幽霊とかそういうものは存在しているのかしら？」
知っているといわんばかりに手を上げ、近くにいた警備員さんはにこやかに微笑んでいる。
「……警備員さん、ちょっと用事が出来たので終えるのはまた今度にします」
「そうでしょうね、そうしたほうがいいと私もおもいますよ……彼の結婚式に出ないといけませんからね」
「そうね、そうだったわ」
「……」
俺はきょとんとしてニヤニヤしている姉さんを見る。
「後ろの三人とはどこまで進んだの？お姉さんに教えなさい！」
気がつけば後ろには藍、耒、凪さんが来ていた。
「え？あ、あれが晶様のお姉さん！？」
「うえ？あの黒スーツが！？」
「やっぱり、そうでしたか……」

三人とも苦虫を噛み潰したような表情をしている。
「あんたが倒れてる間、そこの三人はそれぞれが好きなことをしてたわよ？」
「え、え～と？どんなことを？」
なんとなく聞くのが恐かったのだが俺は姉さんに尋ねる。
「そうね……せっかく家があるんだからそこに越してから教えるわ……さ、今から洋子さんにこの子を引き取るっていいに行かないとね」
姉さんはそういうとあっという間に見えなくなってしまった。
「あ、晶様……あの家からでてっちゃうんですか？」
「え、ああ……ずっと居候してたからな」
さすがにこれからもずっと……というわけにもいかないだろう。
「じゃ、私たちはどうなるのよ？あんたがいないとあそこにいれそうにないわよ！」
「いや、それは大丈夫じゃないかと……」
洋子さんは
「あの三人がいないと家事がはかどらないわ」と言っていたからな。
「晶君はどこに行ってしまうの？」
「え、え～と、気にしなくてもいいとおもいますよ」
俺が父さん母さんから聞いた場所……そこは、

――――――

「晶、朝よ～」

どごす！！

「ぐふぅ……姉さん、かかと落としはさすがに危ない……」
「何言ってんの、そろそろ迎えが来るわよ？まぁ、誰がくるかはわからないけど……」
姉さんは面白そうに笑って俺の部屋からいなくなってしまった。
「……っつ……まったく、手加減なしだよ……」

薬のおかげか知らないが、非常に体が丈夫になっていた。
「さて、おきるか……」
ぴんぽーん♪
「はーい……」
もう迎えが来たようだ……こっちの家に引っ越して一週間となるが……これまで早く来た人なんて一人もいないな……
姉さんが俺の部屋に再び入ってくる。
「き、緊急事態よ！」
「へ？」
「早く準備しないとあんた、吊るされるわ！」
俺の服を脱がし始め、俺はあわててそれを阻止しようとし始める……俺はふとおもう、俺にだって頼りにすることが出来る人はいるということを……
「……あ、晶様！？」
「晶！あんた何してるのよ！」
「晶君……やっぱり年上が好きなのね？」
「あ、晶さん！」
「晶先生！そ、それって禁断の……」
「へ？う、わぁぁぁぁぁ！？」
そこにいたのは藍、耒、凪さん、奈津美ちゃんに夏華ちゃん。
「ご、誤解だ！俺は姉さんに服を脱がされただけなんだ！」
「へぇ、その割には晶様……嬉しそうな顔をしていたような気がしてましたけど？」
「それは違う！あれはそういう意味で嬉しそうな顔をしてたわけじゃない！」
「へぇ、否定はしないのね？どういう意味でうれしそうな顔をしてたのよ？」
「あれは頼れる人がいたから嬉しかっただけだぁ！！」
「……晶君、やっぱり頼りになるようなお姉さんがすきなのね？」
「ちょっと！凪さん！乗ってこないで……学校に遅れる！」

「晶さん、だらしなさ過ぎです……」
「奈津美ちゃん……助けて……」
「晶先生なんてもう知らない！」
「あ、まって夏華ちゃん……」
俺はぐちゃぐちゃになりつつこの状況に困惑しながらも……
こんなに楽しいとおもう日が来るなんて思っていなかったのかもしれない。　～ＥＮＤ～

突風の章　その二：ミステリーワイバーン（前書き）

晶「続行決定です！イエーイ♪」ネコ「これもひとえにネムネムウーミンさんとタナチュウさんのおかげだな」晶「そうだな～感謝しないと・・・」ネコ「それで、今後の予定は？」晶「さあ？まだ決まってないからね・・・・」

突風の章　その二：ミステリーワイバーン

十四：ミステリーワイバーン

扉に手をかけ、俺は一気にその扉を開け放った。

「……すげぇ」

そこにいたのは翡翠色の龍だった。

「……いや、翼龍か」

折に閉じ込められており、中では俺をものめずらしそうに眺めている……だが、それも一時の間で俺のほうに近寄ろうとして……

がつん

檻に頭をぶつけた。

ぐるる……

どうやら、この檻から出たいようだ……翼龍は器用にも尻尾を指代わりにして近くの鍵を指差す。

「……これでこの檻を開けろってことなのか？」

頷くが……ここから出た瞬間に俺を

「うわ、めっちゃいきが良くておいしそうな男子高校生がいるじゃん♪」といわんばかりに食われるかもしれない。

「……俺を食わないか？それを約束できるか？」

尻尾で器用なことが出来るくらいだ……人間の言葉も理解することが出来るだろうと思ったのだが、どうやらきちんと出来たようだが……なにやら意味深な笑みを翼龍が作って見せた。それでも言葉が通じたことに嬉しかった俺は笑って

「そうかそうか」といって鍵を開ける……そのついでに鱗に触ってみたがそれはとても硬かった。

扉から出てきた翼龍は狭いのがつらいのか、今度は別のものを指差した。
「注射器？」
そこにあったものは注射器で……中には液体が既に入っていた。
「これをお前に挿せってか？」
頷き、促す。
「……わかったが……俺、医者の免許なんて持ってねぇぞ？それに、痛いからって暴れないでくれよ？」
幾度となく暴れたときに自分が巻き込まれてしまうのがこの部屋の中でははっきりとわかる。
俺は比較的柔らかそうな首の辺りに注射器を挿して中の液体を入れ込む。その液体がどういった効果をもたらすかわからないのだが……と、そのときに俺の後頭部になにやら鈍痛が走る。
何が起こったか理解できない俺はそのまま意識を消してしまったのだった。
――――
目が覚めると目の前にあるのは女性の顔……
「うを？」
「ああ、起きた？」
しかも、気がつけば何故かベッドで二人して寝ている状態ではないか！俺が下で彼女が上の状態である。
「え？え、えええぇぇぇぇぇぇぇ！？」
「そんなに驚かないでね～私が君を食べてあ・げ・る♪」
にこりと微笑んだその表情に底知れぬ恐ろしさを感じたので俺はあわててその場から離れた。
それに対して相手はただ笑ってるだけだ。
「やれやれ……ところで、君の名前は？」
「俺っすか？俺の名前は……白瀬晶です」
「成る程、晶君か……」
ふんふんと頷きながら俺の体をじっくりと確認する。

「……う～ん、懐かしいにほいがする。おばあちゃんの家のたんすの匂いって奴かな～？」
「え、えと……俺に言われても理解できないんですけど……」
「ああ、そうだよね～ごめんね」
「いや、いいっすけど……」
「人が来るのが珍しくてね……前に、チョロットだけここにも人がいたんだけど……君のような懐かしいにおいのする女性が連中を片付けたって誰かが言ってたから……私、それからずっとここにいたんだよ」
「ああ、そうなんですか……それはなんだか寂しいですね」
「うん、そうだね～」
つかみどころのないような人だ……だが、寂しかったのは事実なのだろう、彼女はとても静かな瞳をしている。
だから俺は突拍子もないことを口走った。
「……あの、家に来ませんか？」
「え？」
「二人……俺が居候させてもらっている家にもあなたのような人が二人いるんです」
「へぇ、成る程……うん、それならいくことにするよ……私の名前は凪」
「凪……さんですか？わかりました」
俺は凪さんと共にもときた扉へと戻ろうとして……
「……ストップ」
「え？」
右側から弾き飛ばされてそのまま壁に俺だけ激突。
「……っつ……」
「ごめん、晶君……」
ふらふらながらも立ち上がるとそこには凪さんがコンクリートの破片に潰されているショッキングな姿があった。
「な、凪さん！？」

「大丈夫大丈夫……よっこらせ」
しかし、そんな破片をものともせずに彼女はコンクリの破片を砕いて出てきて……俺のもとへとやってきた。
「それより、晶君……君のほうが重症だよ」
「え？」
「これ、折れてるからね……」
「……」
俺の右腕は見事に重力に従っている。
「まるで燃え尽きたおじいちゃんの×××みたいね？」
「えと、なんていいました？」
放送禁止用語をさらりと呟く凪さん。
「だから、もう使うことのないだろうおじいちゃんの×××……あれ？私の言葉が何故かさえぎられてる？×××がいえない！大変！」
本当に大変そうに俺のほうを見てくるのだが……
「いえ、別に俺は大変じゃないんですけど？」
「ええぇ！？嘘！だって『俺の×××を咥えて欲しい！』って言わないの？」
「言いません！てか、そういう言葉を発するのはやめてください！」
この人、危ない人だ……いろんな意味で・・・
「ちぇ、面白くないの」
「それは面白くもなんともありません！下品すぎます！……とりあえず、居候している家まで連れて行きますよ」
俺が扉に手をかけようとすると凪さんは俺の左手を止めた。
「何です？」
「まずは病院にいくのが先決ね」
「……確かにそうですけど……あの、この扉を超えないと帰れませんよ？」
びくともせず、彼女は俺の左手を掴んでいる。
「……私はそっちにはいかないほうがいいとおもうな」

「何でです？」
「あふれてる、満ち足りている……この部屋ももう長くはもたないと私、おもうの……だから、ここから出たほうがいいわ」
指差す先にはマンホールがある。
「え？だって……」
「急がないと、飲み込まれるわ」
「……わかりました」
有無を言わさぬ言動に俺は少々困惑しながらもマンホールへと消えた凪さんの後を追ったのだった。
――――
「ふぅ、やっとゴール」
「……そうっすね」
何とか街中のマンホールに顔を出すことが出来た俺たち二人の目の前に爺さんが現れた。
「……うまく抜け出せてきたようじゃのう？」
「爺さん！？てか、別に何も襲われなかったぞ？単なるこけおどしかよ？」
それに対して爺さんは呟く。
「何を言っておるんじゃ？襲われたじゃろう、そこの娘に？」
いや、まぁ、別の意味では襲われたけどさ……
「ほら、その右腕が何よりの証拠じゃろうて？カルシウム不足じゃな……もうちょっと硬くないと駄目じゃろうて」
「いえいえ、おじいさん……きっと晶君の×××は硬いに決まってますよ」
「ちょっと凪さん！何言ってるんですか！」
「……てへ」
てへとかいわなくていい！てか、この姉ちゃん……本当に危ない姉ちゃんだ。
「……じゃ、そろそろわしは行くぞい？」
「ああ、あの猫によろしくな」

「おっほっほ……お土産を期待しておれよ？」
そういって爺ちゃんは去っていったのだった。
「……じゃ、俺たちもそろそろ行きましょうか？」
「そうね……晶君、ないちゃ駄目よ？」
お姉さん口調で俺に言ってくる。
「ああ、そういえば……腕、折れてたんですよね」
何をいまさら……といわんばかりに彼女は笑って俺の折れている右腕を掴んで病院へと俺を連れて行ったのだった。
――――――
「あ、晶様！その腕、どうしたんですか！」
「大丈夫なの？」
俺はその後二人の質問攻めにあったのは言うまでもない。

おかしくなった晶の章　その一（前書き）

ネコ「おや？サブタイトルがおかしいな……もともと、少年はおかしいからあの題名はおかしいだろう？」黒田「僕もそうおもうよ」ネコ「おお、初登場の黒田ではないか？」黒田「まぁ、本編じゃ一度も会ってないけど……」ネコ「気にするな、気にしたら負けだ」黒田「そうかい？とりあえず、この章終わったら物語に一区切りつけたいと思っています」ネコ「そうだった、そっちのほうが少年よりも大切だったな」

おかしくなった晶の章　その一

二十九、

「……ぐぅ」

少年がまだ寝ている時間帯、彼の姉は市販のドリンク剤を片手に仕事にいそしんでいた。

「……この前のワクチンの効果が薄いみたいだから……凪って子から血液を提供してもらって、これをこうして、いじって……」

一言できたと呟くと彼女は背筋を伸ばす。

「……これもまだ試験品で試すにはちょっと早いわね……」

彼女は洗っておいたカップの中にその液体を流し込むとぽたりと倒れてそのまま眠ってしまったのだった……この薬が、後ほど起こす事件のことなど考えもせずに……

―――

「ん～……」

少年……晶が目を覚ます時間帯になり、晶は目覚まし時計よりも一分ほど早起きをしてそのまま布団の中でぼーっとする。

PIPIPIPI・・・・・！！！

「……よっと」

一分後に目覚まし時計が鳴り出し、それを叩いて止めると彼は立ち上がる。

「……」

寝ぼけていた顔は既になく、いつものようなちょっと不機嫌そうな顔で体を伸ばし、部屋を後にする。

「……やっぱ、一人で寝るのはなんだか寂しいなぁ……」

彼が姉と共に一軒家に引っ越してから約一ヶ月が過ぎており、な

んだかんだであの頃の生活が懐かしくて恋しいとおもいつつも、彼は首を振る。
「いかんいかん……あのまま三人と一緒に生活してたらどうかなってたぜ……」
襲う一歩手前だといっても良かったぐらいなのでそれは正しい見解なのだろう。晶はジャージに着替えていつものようにマラソンに行こうとして……
「ぐ～……」
「姉さん……」
コタツに入っていびきをかいている姉を見つけ……
「ん？」
誰も手をつけていないと思われるカップを見つけると何をおもったのか晶はそれを飲んだのだった。
「……ん～市販のドリンク、久しぶり飲んだけど……まずいんだな、これ」
彼は近くにおいてあった姉が飲んだ後の空の瓶を見つめる。そう、彼はてっきりこの瓶の中身がカップの中に入っていたとおもったのである。
「さぁて……ひとっ走りしておきましょうかね～……休日とはいえ、あの五人が来るかもしれないからな～」
この前の騒動を思い出して苦笑すると晶はその場を後にしたのだった。
――――
色野藍……見た目は藍色のワンピースが似合う物静かそうな女の子なのだが、実のところ晶の両親が作り出した薬を投与された元人間である。
「……♪」
今日はとても機嫌がよく、誰よりも早く目を覚まして朝食を作っていた。
「今日もいい出来ですね……晶様に食べさせてあげたいぐらいです」

お味噌汁を味見しながらニコニコしてちょっとまえまで一緒に生活していた知り合いを思い出す。

ピンポーン♪

「？」

こんな朝早くから誰が来たのだろうかとおもいながらも藍は玄関を用心することなく開ける。

「はぁ～い……あれ？晶様？」

そこにいたのはいつもとはちょっと違う……詳しく言うのなら無邪気で優しそうな笑みを称えた晶だった。

――――

「え～と、今日はどうしたんですか？晶様がこちらに来ることなんてはじめてですよね？」

お茶と朝ごはんをテーブルの上に置き、藍は晶に尋ねる。自分の分は晶の向かい側に置かれており、二人してゆっくりと朝食を食べる用意が出来ていた。

「いや、僕は久しぶりに藍と一緒に朝食が食べたいとおもってこっちに来たんだよ」

「え？」

なんだか普段はぶっきらぼうな晶が素直になっていることに対して驚きながらも、彼女はああ、こういう顔も晶様は見せるんだな～とその程度にしか思っていなかった。

「じゃ、二人で食べましょうか？」

「うん、そうしよう……いただきま～す」

その後の晶の食欲はすごかった。口に入れるものすべてをおいしいおいしいといいながら食べていき、ご飯粒をくっつけていたりもする。

「あら？晶様ご飯粒が……」

「とって～」

「はいはい、なんだか子どもみたいですね？」
「むぅ、僕は子どもなんかじゃないやい」
顔を突き出して、ご飯粒を藍にとってもらうと満足そうに晶は普段の晶がこの光景を見ていたら間違いなく赤面して紐なしバンジーを実行しかねなかった。
「……おなかいっぱいになったらなんだか眠くなってきちゃった……」
「？」
なんだか晶が小さくなっているように藍は見えたのだが、それも晶の珍しい行動の所為だろうとおもっていつも彼がこんなに素直だったらいいのになぁと思いながら目の前の晶を眺める。
「じゃ、膝枕してあげますよ」
「え！？」
とても嬉しそうな笑みを晶が見せる。普段の晶だった
「……別にいい、枕があるからな」
と言ってやせ我慢するのだろうが……
「わ～い♪」
今の晶は素直に藍の膝の上に自分の頭を持っていったのだった。
「……す～……」
「ふふ、可愛いものですね～晶様の寝顔、久しぶりに見ますよ」
眠ってしまった晶の寝顔を両手で挟み、まじまじと眺めながら藍はポツリと呟いた。
「……でも、何で突然こっちに晶様は来たんでしょうか？」
しかし、今自分の手の中にいる晶はいつもの晶とおかしいところがあるのだが、本物だろう。
「……ふぁ……私もちょっと眠くなっちゃいましたから一緒に寝ることにします……おやすみなさい、晶様」
そういって眠っている晶の顔に頬をつけ、そのまま藍は眠ってしまったのだった。
――――――

「んを？」
晶は目を覚まし、今の状況を確認する。彼が藍の膝枕で眠ってしまったのは今から三十分ほど前のことだった。
「……あれ？俺、なんでこんなところにいるんだ？てか、俺は何故、藍に膝枕をしてもらっているんだ？」
ぎょっとした感じで立ち上がると晶はぼさーっと考える。ああ、きっと無意識に俺が上がりこんでここで寝ちまって藍が膝枕を勝手にしたのだろう……と晶は考えてうんと頷く。
「……とりあえず、こんなところで藍を寝かせておくのもなんだから布団に入れておくか」
他の二人が眠っているであろう部屋に藍を抱えていき、いびきをかいて眠っている二人組みの隣において晶は静かに扉を閉めたのだった。

おかしくなった晶の章　その二（前書き）

ネコ「誤字が発見されたそうだな？」黒田「ああ、とてもすごい間違いだ……たとえば、彼は出ていったが彼は出て言った……とか、そういうレベルの間違いなんてものじゃない。相当重症だ」ネコ「穴があったら入りたい……なくても自分でほってはいりたいというレベルだろうな？」黒田「そうだろうねぇ」ネコ「他の人も、ばしばし報告お願いします……今週のＭＶＰは誤字報告をしてくれた海人さんで決まりだな」

おかしくなった晶の章　その二

三十、

彼が飲んでしまった薬……

「ああっ！薬がなくなってるぅぅぅ！」

それを調合した本人がようやくここで目を覚ました。今の時間帯、午前七時……少年がいなくなって二時間以上の時間が過ぎていた。

「え？これって……どういうこと？あ、もしかしてあの愚弟……」

ぎょっとしたような表情を見せた晶の姉……晶子はあわてて立ち上がる。

「こうしてちゃられないわ！あの愚弟……絶対におかしくなってるに違いない！」

スーツを着込み、拳銃を懐へ……危ないお姉ちゃん、白瀬晶子は暴走するであろう弟を止めるためにきりりと表情を引き締める……

「目標は愚弟が女の子襲う前に捕獲！！これが最低条件！」

自分に言い聞かせ、彼女は家を飛び出していったのだった。

――――――

その頃、愚弟である晶は普段の晶のままで町を歩いていた。

「……う～ん、そろそろ姉さんがおきてるっておもうんだが……疲れてるようだったし、俺がドリンク飲んじゃったからな～……代わりに何か買って帰ったほうがいいな」

怒らせたら組織一つを滅亡させたり、銃一丁で翼龍と渡り合えるような戦闘能力を所持するあの姉の怒った顔を頭に想像させる。

「この前の数学の時間はマジでやばかった……」

未だに変装して晶に数学を教えている立場であり、彼女はよく晶に問題を当てるのだった。凪さんとどうやら仲が良いようで、よく職員室の前で話をしていた。

「……っと、これでいいな」
まったく同じドリンク剤を彼は発見……
「あれ？」
それと同時に外に見知った顔を見つける。
「あれは耒……？」
晶は急なめまいを感じ、ちょっとふらりとしたのだった……

―――――

「まったく、藍さんにも困ったものだわ」
やれやれといった調子で耒はため息をはく。
「……あたし、これから用事があるって言うのに歯磨き粉を買ってきてほしい……だなんて……晶がいなくなって人使いが荒くなったんじゃないのかしら？」
ぶつぶつと呟いている……彼女が言うのは実は間違っている。普段だったら晶がそういった雑用をこなしていたために他人に回ってこなかっただけなのである。つまるところ、耒があの家でしていることといえば未だに謎の料理を晶が抜けたあのメンバーに振舞っているだけである。ただ、久しぶりに晶が耒の手料理を食べれば少しは腕が上がったと口を開くに違いはない。
「あ～……ったく、こんな雑用は晶にやらせばいいのに～」
未だにそう呟いている耒の肩が叩かれる。
「やぁ、耒」
「あれ？晶じゃない……どうしたの？」
街中で会うのは珍しくはないのだが、晶の姿は一ヶ月前によく見ていたジャージ姿だった。
「まだ家に帰ってないの？」
「まぁ、そうだね……ところで、耒はどうしたんだい？」
なんだか普段とは違うやわらかい感じのする晶に違和感を抱きながらも耒は答える。
「藍さんからの頼まれ物を買いに来たのよ」
「へぇ、それは何？」

「歯磨き粉……切れちゃったんだって……晶、今日はどうかしたの？」
いつもだったら目をそらすような……何か心に何か抱えているような感じを受ける目線をしているのに、今日の晶はしっかりと耒の目を見て話をしてきているのだった。
「別に？何でそうおもうの？」
「えっと……ほら、普段は絶対に目を合わせないようにして話すじゃない？」
以前、耒がそれを指摘すると苦虫を噛み潰したような顔をした晶だった。それに味を占めた耒は目をそらし続ける晶の目をしっかりと追いかけて行ったりとしていたのだった。
「……それに晶……そんなに目、きらきらしてたっけ？」
「ん？普段からこんなもんだよ？」
普段だったらちょっと不機嫌そうな顔をしてぶっす～とした表情だった元、同居人を耒は見つめる。
「え～と、そう、それならいいの……じゃ、あたしもう行くね」
なんだかこのままこの晶と一緒にいるといやではないのだが……なんだか気恥ずかしい気がしたので耒はそう言って離れようとしたのだが……
「まってよ、僕も一緒に行くよ」
「ぼ、僕ぅ？」
耒はぎょっとして晶を見るのだが……気がつけば晶の顔が目の前に迫っていたのだった。
それにあわてた耒は強い口調で晶に言う。
「は、放しなさいよ！あんたなんかと一緒に行く気はないの！」
「……そんな恐い顔しても元から可愛いから絵になるね？」
「なっ……！？」
普段では口が裂けてもそんなことを言わないであろう、あの晶がそんなことを行ったのだから耒の頭の中は活動を止めたのだった。
しかし、このまま黙っているとなんだかいけない気がしたので耒

はイニシアチブを手に入れるためにちょっと調子にのってみることにした。
「そ、そう？まぁ、あたしはか、可愛いからね～」
可愛いなんて言葉をあまり言わないもんだから裏声になりながらも、髪の毛をかきあげてみて精一杯大人ぶる。
「……ふふ、そういった背伸びした感じがとても可愛いね」
それに対して耒は首をかしげる。
「……背伸び？あたし、背伸びなんてしてないわよ……？あ、身長伸びたって言ってくれてるの？よかったぁ♪あたし、最近背を伸ばそうとしてがんばってたのよ～」
無邪気にそう喜んでいる耒に苦笑するかのようにして彼女の頭の上に手を載せる晶。
「……そんな素直なところだって……耒らしい」
ここで普段の晶だったらまぁ、お前らしいボケのかまし方だったな……お笑いに入ったらどうだ？と茶化していただろう。
「え～と、本当に今日はどうかしたの？」
実のところは薬を飲んでてんてこ舞いなのだが……今の晶にはそんなことは関係ない。
「別にしてないよ、ただ、耒がとても可愛いな～とおもって……でさ、僕……困った顔の耒も見たいと思っちゃった」
「え？」
晶の顔がすっと真剣な顔になる。
「耒……僕とキスしよう？」
「えぇ！？ちょ、ちょっと……いきなりじゃ困るわよ！」
「じゃ、いきなりじゃないならいいんだ？……じゃ、目を閉じて？」
「え……わ、わかったわよ……」
耒は目を瞑り……顔を真っ赤に染め……
ちゅっ

「あれ？」
おでこに軽い感触があり、耒は目を開ける。
「ふふ……今の耒にはこれで充分……だろ？」
「な、ななっ！！何よそれ！」
「おませさん♪……じゃ、僕は用事があるからばいばい、耒？またキスしてもらいたかったらお兄さんのところにおいで？」
「あんたとあたし！同級生よ！この変態！！」
耒は石を晶に投げつけるも、晶はそれを華麗に避けたのだった。
まるで、背中に目があるように……残された耒は顔を真っ赤に染めながらもその場を後にしたのだった。

おかしくなった晶の章　その三（前書き）

ネコ「さて、この章もそろそろ終わりです」黒田「もうかい？そんなに長くは続かなかったような気がするんだけど？」ネコ「元から少年はおかしいからな……」黒田「それは実に納得のいく説明だね……そうおもった皆さん、ばしばし感想をお送り下さい」ネコ「そろそろ終わりが見えてきそうな調子ですが、最後までお付き合いお願いしたいとおもいます」

おかしくなった晶の章　その三

三十一、

晶子はまず、一番被害にあいそうなおっとりとした感じの知り合いにあったのだった。

「……藍ちゃん、うちの愚弟を見なかった？」

「愚弟？……ああ、晶様ですか？この家に来ましたよ？」

あっさりと頷き、晶子は遅かったか……と呟いた。

「何かされた？」

「え～と、別に何もされませんでしたけど？」

おっとりとしていて天然なところもあるのでされていても気がついていないのかもしれないとおもってもうちょっと詳しくたずねるも……

「え？そんなことされませんでしたよ？ただ、珍しくご飯をたくさん食べて、食べた後はすぐに眠くなっちゃいましたけど？それで、膝枕してあげたら子どもみたいに喜んでました」

そこまで話すとそれがどうかしたんですかと晶子に藍は尋ねた。

「……まぁ、ちょっと込み入った事情があってね……簡単に説明すると私が調合していた薬を試作段階であの愚弟が飲み込んでしまったのよ」

「ああ、成る程～晶様が薬漬けになったってことですか？白い粉を体の中にうってしまってらりっちゃってるってことですか？」

ニコニコとした調子でそういう危ないことを口にする藍に疲れている晶子はため息をつく。

「……ま、それで構わないわ……とりあえず、あの愚弟を捕獲して縄でぐるぐる巻いちゃうことにするわ」

「縄でぐるぐるにして薬を抜けさせるんですね？」

珍しく飲み込みが早いことに驚きながらも、晶子は縄を渡す。

「じゃ、見つけたらこれで縛っておいて？」

「わかりました、さすがに晶様が幻覚を見続けるのはかわいそうですからね」
どことなく調子が外れている状態のままの藍を従えて晶子は家を出たのだった。
――――
「ったく……なんだか気分がわり～な……何でだ？」
目の前がふらふらとなりながらも晶はがんばって家へと向かう。
「あれ？晶さんじゃないですか？」
「……お、奈津美ちゃんか？」
近くが黒田の家だったからか、黒田の妹の奈津美が出てきたのだった。
「あの、なんだかとても気分が悪そうなんですけど？大丈夫なんですか？」
「ん～……ちょっと、だりぃ……ってか……」
そろそろ限界……といってそのまま晶は倒れてしまったのだった。
「だ、大丈夫ですか！」
倒れてしまった相手に対しては適切でないような言葉を吐きかける奈津美。そんな彼女の声を聞いてか、彼女の姉が現れた。
「ど、どうしたの、奈津美！」
「あ、お姉さま……晶さんが倒れてしまって……」
「晶先生が？……あ、本当だ」
あせっている表情の奈津美とは対照的に夏華のほうは冷静な判断を下す。まぁ、けられたり色々とされているところを見られたのでそのくらいで晶がどうこうなってしまうとは思っていないのだろう。
「晶先生は丈夫だから私たちの家に連れて帰ってソファーかベッドに寝かせておけば大丈夫よ」
家の方向を指差す夏華にまだ不満を持つ奈津美は尋ねる。
「そ、そうかな？大丈夫かな？」
「大丈夫よ（晶の姉に）潰されてもどうってことなさそうだったからね」

「ああ、（先ほど通った車に）潰されても大丈夫なんだ……丈夫なんだなぁ、晶さん」
何故か車をイメージさせた奈津美はやはり、どことなく天然が入っている。
「さ、運びましょ？」
「うん」
こうして、黒田姉妹に晶は連れて行かれたのだった……。
――――――
「ん？」
気がつけば晶は何故か鏡のなくなった……いや、左のほうにはこの部屋とまったく同じ部屋がもう一つあった。それは鏡の部屋ではなく、新たに作られた夏華の部屋だった。
「……ここ黒田の家か……」
にやけ面をしている親友の顔を思い出しながらも晶は首をかしげる。
「……そうか、俺……倒れたんだったな」
自分が道で倒れたことを思い出す。
「奈津美ちゃんがここまで運んでくれたのか？」
それにしては華奢だったよう泣きがするんだが……そうおもっていたところへ部屋の持ち主が現れる。
「先生、気分はどうかしら？」
「夏華ちゃん……ああ、夏華ちゃんも俺を運んでくれたのか？」
「ええ、まぁ、そうね……先生を運んであげたわ」
晶はそれを聞いて礼を述べる。
「迷惑かけた……じゃ、俺出て行くよ」
「もうちょっと休んだほうがいいわよ！」
起き上がろうとしている晶の肩を夏華は掴む。
「何言ってんだよ……男が女の子のベッドで寝たら奈津美ちゃんだって嫌がるだろ？」
「兄さんはいっつも昼過ぎにここで寝ようとしてるわ」

あいつは何やってんだ……と呟く晶。
「……とりあえず、体の調子は……」
そういってそのまま晶は気を失ったのだった。
しかし、気を失ったのもつかの間……目を開け、夏華を見る。
「……夏華ちゃんも一緒に寝るかい？」
「え？」
「僕と一緒に……ぬがっ！！」
「な、なんとか間に合ったみたい」
部屋にあった鏡からいきなり晶子が姿を現すと手に持っていた拳銃のグリップ部分を弟に一撃……晶は動かぬ人形となった。
「え～夏華ちゃんだったかしら？いや、奈津美ちゃんだったか？ま、まぁ、黒田姉妹には変な愚弟を見せちゃったわね……じゃ、これで失礼させてもらうわ」
晶を縄で縛って晶子は窓から去っていったのだった。
「え、えーと？今の……なんだったのかしら？」
一人ぽつんと残された夏華ははてなマークをたくさん浮かべて……結論を出した。
「う～ん……疲れてるのかしら？ちょっと夏見のベッドかりて寝ておこう……」
それまで晶が眠っていたベッドに入り込むと目を瞑る。
「……あれ？お姉さま？晶さんは？」
おかゆを持ってやってきた奈津美は晶の姿を探す。
「先生の姉が来て誘拐していったわ」
「え？……ところで、何でお姉さまがベッドに寝てるの？」
「……いや、先生に一緒に寝ないかって誘われて……」
「じゃ、晶さんはそのベッドの中にいるの？」
「いや、いないわよ？」
「？」
奈津美のほうもはてなマークを浮かべながらおかゆを置いたのだった。

――――

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

泣き叫ぶ声が晶たちが住んでいる家から聞こえてくる。

「まったく！あれほど私の所有物には手を出すなって言ったでしょ！」

「すんませーん！！」

「薬が抜けるまで耒ちゃんにお仕置きされてなさい！」

「……く、くせになりそう……」

そんなちょっと危なそうなやり取りが行われていたのだった……。

旅立ちの章（前書き）

ネコ「春は出会いと別れの季節だそうだ」黒田「いやいや、春は花見の季節さ」ネコ「とりあえず、ここで皆さんとお別れです。いやぁ、短い間ですけど色々とお世話になりました」黒田「タナチュウさん、ｋｉｍｉさん、無情さん、ネムネムウーミンさん……」晶「そして、この小説絶対コメディーじゃねぇだろっておもってる皆さん！」ネコ「うわ、しつこい！」黒田「今までありがとうございました！」凪「あの、私の出番が少ない気がするんですけど？」藍「あ、そんなこというなら私もですよ～」耒「あたしも！」奈津美「私もです！」夏華「まったく……自己主張が強すぎね」晶「では、皆さん……さようなら！」

旅立ちの章

三十二、

俺が街中を歩いていると奇怪な人物に話しかけられた。

「久しぶりだな、少年？」

俺はその相手をぎょっとしながら見て素直に答える。

「……残念ながら俺は白衣に猫耳をつけるような知り合いはいないんですが？」

「おや？私が誰かわからないとでも？」

俺は相手を凝視する……姉さんと同じぐらいの年頃みたいなのだが……どうにも、人の顔をおぼえるのは得意ではなさそうだ。ざっと記憶を思い当たってみたのだが該当するような相手が現れることはついぞなかった。

「……わからない」

「そうか、白衣に猫耳……あの子の言ったとおりにしてみたのだが……ほら、少年は私を抱いたことがあるだろう？」

「だ、抱いた！？」

え？お、俺ってこの人相手に何を……

相手は俺の反応が面白かったのか微笑をたたえている。

「ふふ、抱いたといっても少年が考えているようなことじゃないぞ？ほら、私は少年の祖父と一緒に船で外国に渡った……白猫だ」

「……ああ、そんならそうとさっさとネタばらしてくれればよかったのに……」

しっかしまぁ、時間が立つと人って変わるもんなんだなぁ？

俺はまじまじと白衣に猫耳をつけている目の前の元白猫？を眺める。

「え～と、それで今日はどういった用事で？」

この白猫が俺の目の前に現れるとなるとそれは怪しいことというか、厄介ごとを俺に回してくるのだろう。そして、俺は再び生と死

の狭間を行ったりきたり……往復切符を買わないといけないはめになりかねんからな。
「……率直に言うと、私と一緒に来ないか？」
「え？」
俺は白猫が言った言葉が理解できなかった。
「……どういう意味だ？」
「君の姉が君のためにとおもって作り出したワクチン……それは所詮は試作品だ。私だって君の姉と同じ場所で働いていたし、その薬についての知識も持っている。あの藍だって薬を投与されているような状態だし、試作品のワクチンを打っている君が彼女たちにどういった影響を及ぼすのかまだわかったものじゃないだろう？」
「……」
それはまぁ、確かにそうだろうな。
「だから、私と一緒にワクチンを作り出すたびに出ないかとたずねているんだ。学校のほうには長期休学を申し込んでおけばいいし……ああ、君の姉にはこのことを話さないほうがいいだろうな。ま、君がどうしても話したいというのなら話すといい……明日の朝、あの場所で待ってるから……船が出るのは明日の昼だから期限は明日の朝だからな」
「あ、明日の朝だって？」
いくらなんでも急すぎるぞ？俺は来週発売のゲームを予約しているのだが……
「いつも物事は急にやってくるものさ？いい返事を期待している」
白猫はそういうと人ごみの中に消え……いや、その特異の姿は人々の注目を浴びて街角を曲がるまできちんと確認できていたのだった。
「……家に帰るか」
俺は白猫に言われたことを考えることにして家に戻ることにしたのだった。
「……姉さん、なんていうかな……」

――――――
「私は反対だわ」
姉さんに今日白猫に会ったことを伝えると、案の定反対したのだった。
「……けど、晶……あんたが行きたいとおもうのならあの白猫について行ったほうがいいわ。私よりあっちのほうがあの工場のことを詳しく知っていたからね」
俺は黙りこくって姉さんの話を聞いていた。
「……まぁ、行っても帰ってこれるんだし、あんたの知り合いたちにそのことを話す、話さないは自分で決めなさい？あの白猫は確実性があるときしか他人を自分の領域には入れないからね」
「え～と、意味がよくわからないんだけど？」
「だから、あんたが白猫についていけばあんたの体の中にある薬は消える可能性のほうが多いってことよ？完璧なまでに適合しちゃってるからどこまで薬の効力を消せるかはわからないけど、急に空を飛びたくなったから翼生やして飛んでしまう！とかそういうことはなくなるわ」
「俺、まだ一度もそんなことになってないんだけど……」
可能性の話よ……と、姉さんはそういって俺に笑いかける。
「ま、長くて半年……ってところかしら？パスポートはどこに……」
「え？姉さんも来てくれるの？」
まだ行くとか決めていないのだが、姉さんは用意を始めている。
「当たり前よ、あんたがあっちで襲われるかもしれないし、変な虫が寄ってくるかもしれないわ……特に、あの泥棒ネコには気をつけておかないと……」
ペットボトルに水をつめている姉さんの後姿を見てなんとなく恐くおもったのだが……
「黙っていってもあの三人……いや、五人は怒らないかな？」
「どうかしらね～私だったらあんたを吊るして鍋に落とすわ」

早く行くって告げてきなさいと姉さんは俺に言ったのだった。

――――

「あら？晶じゃない？どうしたの？」

洋子さんが俺の前に現れる。

「え～と、あの三人いますか？」

「いや、お買い物に行ってるけど？上がっておいたら？」

「……いえ、とりあえず……ちょっとの間、俺のことを忘れないでくれって伝えておいてくれませんか？」

俺がそういうと洋子さんは静かな笑みをたたえたのだった。

「……わかったわ……気をつけていくのよ？」

「はい、がんばります」

背を向け、俺は黒田の家を目指したのだった。

――――

「やぁ、君が挨拶もなしに家に上がりこんでくるなんて珍しいじゃないか？」

「まぁ、その、あれだ……サプライズだ」

黒田家の玄関を開けると何故か黒田の目の前にワープしたのだった。玄関の扉にはこういったサプライズが入れられていたとはぜんぜんわからなかった。

「とりあえず、どうしたんだい？今から強盗にでも入ろうかって顔をしているけど？」

「ああ……奈津美ちゃんと夏華ちゃんはいるか？」

「いや、残念ながら出払っているよ」

「……そうか、それなら……俺のことをちょっとの間、覚えていて欲しいって言っておいてくれ」

「僕には何かないのかい？人の家の妹に手を出す年下ハンター？」

「……帰ってきたら地獄に送ってやるから覚えとけ♪」

「即急に忘れるよ……気をつけていきなよ」

黒田はそれだけ言うと俺を玄関から送り出してくれたのだった。

――――

白猫は俺がやってくるのを待っていたようだった。
「久しぶりね、相変わらずしかめっ面してるじゃない？」
「おや、君も来たのか？」
「当然よ、うちの家は友達の家にお泊りするときも保護者同伴って決まりがあるのよ」
そういって姉さんは相手にがんをたれる。
「……ま、君がいればさっさと終わりそうだからな……少年、きちんとお別れはしてきたのかい？恋しくなってもすぐには帰れないんだよ？」
「わかってる、未練は……」
ないとは言い切れないが、これが最後のお別れではないのだ。
「……ちょっとあるが、大丈夫だ」
「そうかい、それなら行こうか？」
俺と姉さんは白猫の後に続く。
ふと、そんな俺の横を一陣の優しい風が吹きぬき……
「俺はいつか帰ってくるさ、それまでお別れだ……」
俺の旅立ちを風が惜しんでくれたのか、俺が勘違いしただけか……
～Ｆｉｎ～
「晶様、早く帰ってきてくださいね？」
「……藍さん、うちわで風送って……風なんて吹くんですか？晶、気がつくとは思えないんですけど？」
「大丈夫ですよ～晶君にはきっと届きます。私たちの心がこもってますから」
「まぁ、先輩たちがするって言ったから私も手伝ったんだけど……普通に手紙書いたほうが良かったとおもうんだけど……」

「お姉さま、手が疲れてきてますよ！晶さんに不満を持たせないように手を振らないと！」

五人は主を少しの間失った家の屋上から晶がいるであろう方向にうちわで風を送り続けたのだった……

～Ｆｉｎ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8309d/

翼龍と書いてワイバーンと呼ぶ！

2010年10月8日14時49分発行